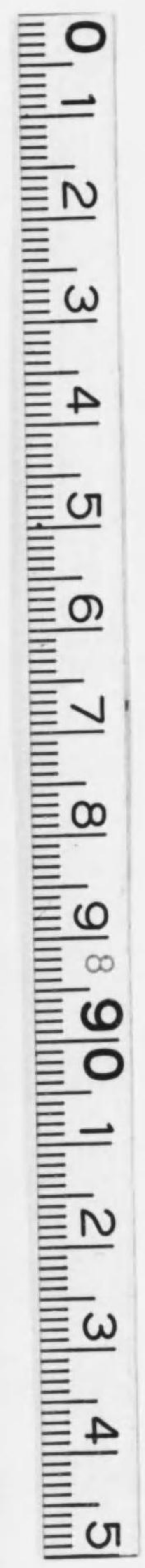


914.45-N97ウ  
1200500757587

214.45  
197  
㊦

事故本  
書き込み多数あり  
七刀取り  
P19~P40  
H13.9.12



始



27. 6. 23

914.45

N 97

(7)



東京文理科大學教授 能勢朝次著

然

草

研究社刊行





然

草



昭和二十三年八月十四日

43  
787  
43  
817

25  
15  
715  
47  
215

211  
43  
15  
215

緒言

徒然草は兼好法師の書きとどめた隨筆であつて、今日から見ると、兼好は此の書を書く爲に此の世に生まれて來たやうな感じさへもする程に、世に知られ好まれて居る隨筆である。兼好は其の當時は、歌詠みとして知られ、嵯阿・淨辨・慶運・兼好は和歌界に於ける四天王と稱せられて居た。ところが、兼好の和歌については、今日では殆ど世人は無關心であり、特別に兼好を研究でもしようといふ専門家でもない限り、黙殺された形がある。そして彼が生きて居た時には、世人は全く知らないで居たところの、隨筆徒然草が、彼の死後間もなく世に紹介せられ、歌仙兼好については知らない人でも、徒然草の作者兼好は、少くとも文藝に興味を持つ程の者であれば、誰一人知らぬ者も無いといふ程に有名になつてしまつた。これは兼好自身にとつては、或は案外な事であるかも知れない。若し地下の兼好がこれを知つたならば、俺の本領と努力とは和歌にあるんだ。徒然草などは、閑餘のむだ書きで、あんなものを珍重されては、聊か恥しいよと言ふかも知れない。和歌が勅撰集に載せられ、當時の人々から一流の歌人として尊敬せられ、

皇室や武人の棟梁からも、その詠作を所望せられるといふ程までに成る努力は、恐らく兼好の生涯に亘つての苦心精進の結果であると思はれるが、隨筆徒然草は、さして大きい努力を以て記されたものではなく、せいぜいで一年か二年の間、短かければ半年足らぬ程の期間に、心に思ひつかぶままに、そこはかとなく書きつけた感想録であるに過ぎないから。

しかし、公平に眺めて見た所、我々は兼好の歌にはさして感心もしないが、徒然草には非常に深い感興を覚えるのだから、兼好の意志の如何にかかはらず、徒然草を以て、彼を代表する傑作と認めざるを得ない。かやうな事は、必ずしも兼好に限らず、藝術家の作品にはしばしば見られる處である。例へば、鴨長明の方丈記の如きも、長明自身に於ては、さしたる物とも考へてゐなかつたかもしれない。彼の本領はやはり和歌にあり、後鳥羽上皇から三體和歌を詠進した作者の仲間に加へられた事などについては、生涯の面目として、彼自身無名抄の中に記して居る程である。しかし、今日では、長明の和歌を知らぬ者でも、方丈記を知らない者はない有様である。畫でも彫刻でも、作者や筆者が非常に苦心した作品が、案外に世に認められないで、一時の感興にまかせて、殆ど苦勞なしに出来たものの方が、世人の尊重に逢ふといふやうな事がある。これは作家としては不本意であるかも知れない。世人の認識が低級だと考へるかも知れない。しかし、

よく考へて見ると、傑作と言はれるものは、作者個人の思考趣味等を通じて、國民全體の中を貫流して居るところの國民的な好尚を、明白な形で表現して居るところに、その特色があるのである。言はば、國民全體が、何處ともなく感じたり考へたりして居る事柄で、しかもそれが非常に機微な間にあるといつたやうなもの、さうした隠然漠然として容易に把握出来ないもどかしい感じのやうなものを、明白な氣の利いた形で以つて代辯したり表現したりしてくれてゐるといふ事が、傑作の要件であるのである。従つて作者の人的な深みや、理解力の滲透度の強さや、表現力の確かさなどが、常住不斷の精進努力で鍛へられて居なくては、傑作は生れないが、その作品制作に當つての直接的な意識的努力の多寡といふものは、さして傑作といふものには大きい影響があるとは思はれないのである。それはむしろ、意識的な努力を超えた世界のものであり、超意識に於て自然と流露する天啓的なものと言つて良いかと思ふのである。

兼好が幾歳ぐらゐの時に徒然草が書かれたものか、又、彼がそれを書いたのは、單に自己の感想の備忘録として書いたものか、或は誰か讀者を豫想して書いたものか、さうした事に關しては、未だ明確に斷定すべき資料は現はれて居ない。しかし、さうした研究は、學者研究者

に任せて置いて良い事であつて、我々の徒然草に對して取るべき態度は、徒然草の中に盛りられて居る所の思想感情趣味感等を、子細に味はひ理解して、それを通して、我が國民性の好尚の趨向を洞察する事を目的とすべきであると思ふ。兼好自身は、此の書を以て廣く一般大衆に呼びかけようとは考へて居なかつたであらう。彼の生前に、此の書が世人の愛讀を受けたといふやうな消息も見えないし、傳説では、徒然草は兼好の歿後に、今川了俊や兼好の侍者命松丸等によつて編輯せられたものである、といふやうな事さへも言はれて居る所を以て考へても、その事は考へられる。従つて、此の書は、兼好が思ふ所感じた所を、誰憚る事もなく、氣兼ねも遠慮もなく、率直に大膽に記しとどめたものと考へて良い。折にふれての感慨であるから、その記す事柄に矛盾があつても、さうした事に拘泥する必要は毫もない。筆を取る際の、自身の心の鏡面に映するまゝに、それを的確に記し、その際の氣分を滲透させた文たらしめれば、それで良いのである。そして、徒然草の魅力は、實に其の點にあると思ふのである。世に廣めようとか、多くの人に讀ませようとか、さうした心持で書くものには、世人の批判を氣にしたり、時の爲政者の意向に氣兼ねをしたりして、ともすれば我ながら齒がゆい感を起すほどに、筆が伸びないものである。さうしたものは、讀者にも其の氣持がひびいて、愛讀する氣持にはなれない。然るに、心のままに飾

り偽る所なく書かれて居るものには、作者の人間味が顔を出し、生地のままの血の氣の通つたものが、親しみ深く我々の前に現前して来る。そこに魅力があり、我々を強く惹きつける。

隨筆のやうな作品の魅力は、讀む者が、自分自身の心の姿を、作品の中に發見する所にある。作者の書く所に同感するといふのは、自分自身の言ひ度い所を、作者が明快に代辯して居てくれる故である。案を拍つて快哉を叫ぶといふのは、自分としては到底言ふことの出来ないやうな點を、何の苦もなくズバリと作者が斷言して居てくれるからである。即ち、作者の心と讀者の心とが、全く同じ氣持であり、作者が讀者の心の隅々までも汲み分けて書いてくれたかの如き感じを起させる時、その書は多くの愛讀者を得るのである。兼好の書く所が、私にも同感を呼び起し、又多くの人々にも等しく同感せられるといふことは、その書く所が、人々個々の問題を超えて、我々日本人の共通の思想なり感情なり趣味なりを、如實に明快に代辯して居るものであるといふ事實を證するものである。即ち國民性を貫流する所のもの、日本人の生存する限り永久に亡びない所のもの、さうした「心の味はひ」が、その中に盛り込まれてゐるものである事による。我々は其の點に注意を怠つてはならない。「徒然草は國運思想のものであつて、現在の青年の讀むべきも

のではない」といふ意見もあるやうであるが、さうした意見を吐く人々に限つて、實際には徒然草そのものを讀んで居ないのである。よし讀んだとしても、淺薄な讀み方だけしか出來てゐないのである。即ち、徒然草の中に、己が心の姿を讀み取る事も出來ず、まして日本人の國民性を讀み取る事も出來てゐないのである。

江戸時代には、徒然草は、教訓書として社會の上下にもはやされた。私はこれを頗る興味ある事と思つて居る。誰がすすめるといふ事もなく、讀んだ者がこれは面白くてためになる書だと、次の人に奨めるといふ風に、讀者が廣告者になつて廣めて行つて、多くの愛讀者が生じたのである。註釋書が、他の古典に比べて、群を抜いて多く著はされてゐるといふ事だから考へても、如何にこの書が多くの讀者を持つものであつたかが知られる。何故にそれほど多くの人々に愛讀せられたかは、この書が、あらゆる人々の心の姿を描いて、しかも眞實を穿つて居るからである。人々の心をつつてその眞實を描いたものが、どうして教訓書として認められたものか、といへば、それは、人生を渡つて行くには、人情世情の機微に通じて居なくては、人をも害やぶひ我身をも害ふ恐れがあるから、人情世情の隈々にまでも理解を持つ爲に、この書が教訓書として喜ばれたのである。しかつめらしい徳目の羅列や、無味乾燥な道義論や、倦怠を覺えさせるお説教

などでは、到底人情世情の機微には通じ得られるものではなく、悪くすると反感さへも起しがちであるのが、世情の有様である。人の世を渡るには理窟だけでは渡れるものではない。人情を動かすものは人情である。さうした事に理解と經驗のある人々が、徒然草を推薦したのである。

「徒然草は隱遁思想のものであるから、青年には不適當なものである」といふ事は、封建時代の頭の堅い人々でさへも言はない所であつたのである。

徒然草を讀む態度が、如何にあるべきものであるか、といふ事については、前に述べた所の此の書の特徴を考へれば、自然に理解されるであらう。即ち、自分の心の鏡として徒然草に對すればよいのである。兼好が述べて居る「心の様々の姿」は、兼好一人の所感ではなくて、それは自分の心の姿でもある、と考へて讀めばよい。己が身に引き當てて讀むのである。そして、それは又、多くの人々の心でもある事を思へば良い。そして人情世情に通ずるのである。人生の姿を理解するのである。さすれば、人を使ふ身になつても、人に使はれる身になつても、富貴や權力になつても、貧しい生活に喘ぐ身になつても、決してさうした位置境涯の爲に精神が惑亂されたり慢心を生じたりする事はないであらう。心に豊かな餘裕があり、他と葛藤磨擦を起す事もなく、

83  
43  
24  
37  
33  
33

なごやかに和の心を以て人生に處し得るであらう。「和を以て貴しと爲す」の境界に到るであらう。それだけで十分ではないか。それ以上を望むのは、「あまりにも慾が深い」のである。

本書は、さきに「研究社國文學古典講話」中の「徒然草」として刊行されたものであるが、今回の重版を機会に、「徒然草鑑賞」と改めたことを断つておく。

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字が並ぶ）

目次

緒言 ..... 一

一、詩人的なる人生哲學者 ..... 一

(一) 徒然草執筆の心境 ..... 一

(二) 詩人的なる人生哲學者 ..... 四

(三) 人間願望の種々相と其の批判 ..... 七

(四) 表裏両面よりの觀照と人情世情の機微の把握 ..... 一七

(イ) 酒の論 ..... 一六

(ロ) 戀愛觀と女性觀 ..... 元

二、道 念——兼好の最大關心事 ..... 四〇

(一) 萬事にかへずしては一の大事成るべからず ..... 四〇

(二) 即刻に本意に向つて驀進せよ ..... 四二

(三) 諸縁を放下せよ ..... 四三

目次

實に残念なり



二

(四) 道心は實踐躬行にあり…………… 二五

(五) 遁世と衣食住の問題…………… 二六

(六) 外相背かざれば内證必ず熟す…………… 二七

三 無常觀…………… 二八

(一) 世間無常に對する積極的態度——物のあはれを知る——…………… 二九

(二) 正しき生き方への誘導——佛道への誘引——…………… 三〇

四、佛道を修して獲得する所…………… 三一

(一) 生死の相に與らざる境地——人生の肯定と無礙の自在心——…………… 三二

(二) 兼好の尊敬する僧侶——彼の佛教受用の性格の現はれとして——…………… 三三

(三) 一言芳談への同感の側面…………… 三四

(四) 身と心との清閑——諸緣放下と圓融無礙の大自然——…………… 三五

五、老莊的人生觀の側面…………… 三六

(一) 眞人は智無く徳無く功無く名無し…………… 三七

(二) 大欲は無欲に似たり…………… 三八

三

(三) その物につき、その物を費し害ふ物…………… 三九

(四) 寛容と無抵抗…………… 四〇

六、道及び道の人…………… 四一

(一) 道を知れる者の尊重…………… 四二

(二) 道の人細心なる心遣ひ…………… 四三

(三) 道の人體験による自得——一種の人生智・勘と骨——…………… 四四

(四) 道に入る者の心掛け——天稟の問題と修行——…………… 四五

(五) 道の人と堪能の非家との相違…………… 四六

(六) 道の人處世上に自誠すべき點…………… 四七

七、處生觀…………… 四八

(一) 名利論…………… 四九

(イ) 致富論と其の批判…………… 五〇

(ロ) 名利に役せらるる事の愚…………… 五一

(二) 自主自愛の尊重…………… 五二

(イ) 名利排斥の根源……………一四一

(ロ) 平凡の眞理——俗見と覺見との相違……………一四二

(三) 處生の要訣……………一四三

(イ) 物に争はず、己を枉げて人に從へ……………一四四

(ロ) 己が境界に非ざるものを是非する勿れ……………一四五

(ハ) 己を知れ——貪る心を以て世に交るは恥辱なり……………一四六

(ニ) 必ず果し遂げんと思はん事には機嫌をいふべからず……………一四七

(四) 交際論……………一四八

(イ) よき友・悪しき友……………一四九

(ロ) 訪問及び受訪の心得……………一五〇

(ハ) 交際の要訣——誠實と敬と言葉少な……………一五一

(ニ) 分を知れ……………一五二

(五) 品位への希望……………一五三

(イ) 物の言ひぶり——人柄の上品下品……………一五四

(ロ) 都人と田舎人——趣味の高下……………一五五

10月12日 抄  
心序用

(ハ) 強ひて興あらんと作爲する勿れ……………一五六

(六) 儉素生活への禮讃——足るを知る心……………一五九

(七) 住居調度と住む人からの問題——趣味のあらはれ……………一六〇

(八) 世間智・人間智——犀利なる心理探究……………一六一

(イ) 虚言の心理解剖——發生の心理……………一六二

(ロ) 虚言の心理解剖——受け入れの心理……………一六三

(ハ) 人情に通じたる僧への尊敬……………一六四

(ニ) 人情をわきまへぬ僧への嫌惡……………一六五

八、兼好の審美觀……………一六六

(一) 美的情趣の擴張と深化……………一六七

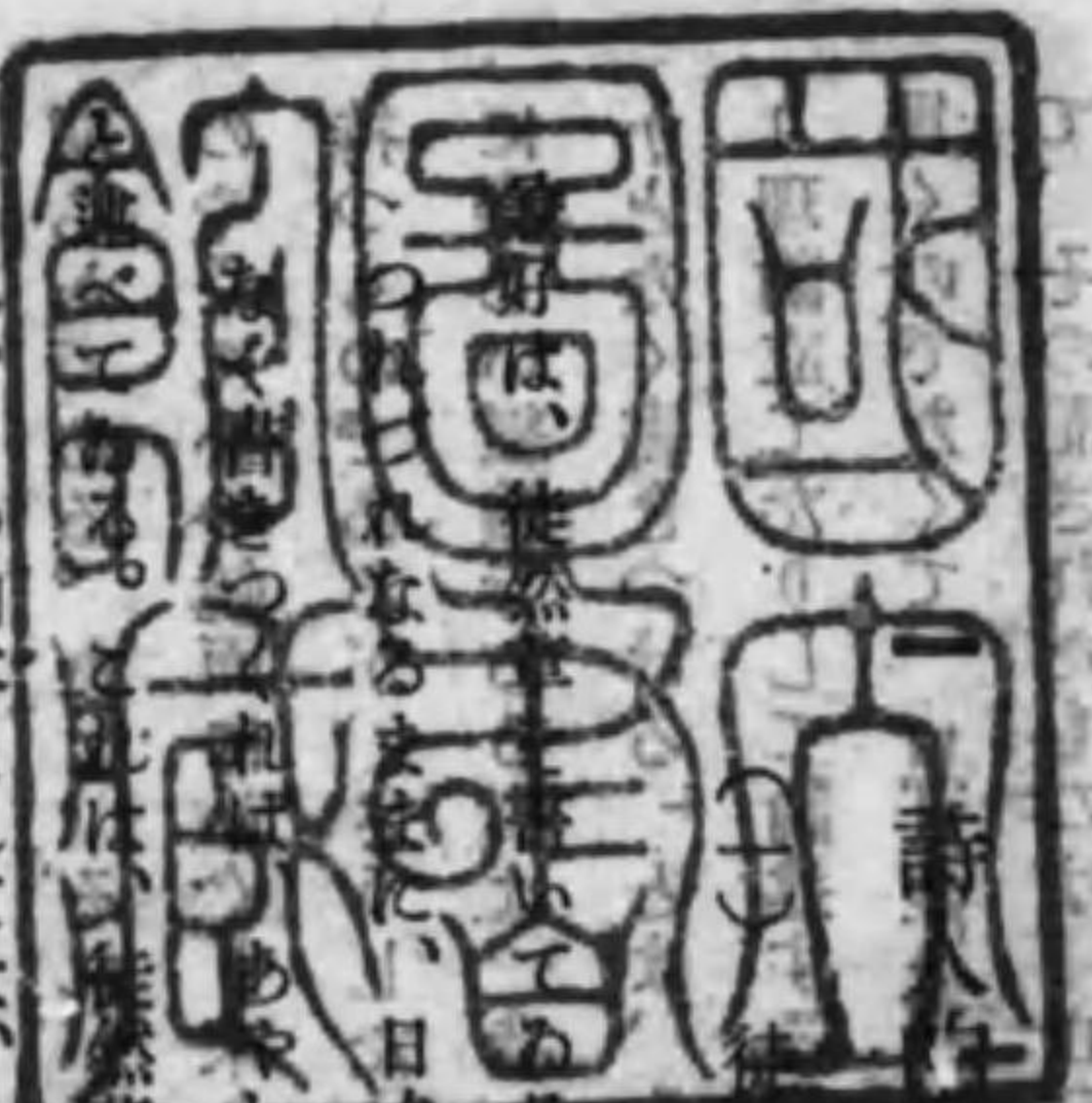
(二) 趣致の創造への暗示……………一六八

(三) 王朝的情趣の追慕……………一六九

(四) 趣味的結婚論……………一七〇

九、輕妙なる滑稽描寫の一面——ユートモリスト兼好……………一七二

大 運の... 第一... 第二... 第三... 第四... 第五... 第六... 第七... 第八... 第九... 第十... 第十一... 第十二... 第十三... 第十四... 第十五... 第十六... 第十七... 第十八... 第十九... 第二十... 第二十一... 第二十二... 第二十三... 第二十四... 第二十五... 第二十六... 第二十七... 第二十八... 第二十九... 第三十... 第三十一... 第三十二... 第三十三... 第三十四... 第三十五... 第三十六... 第三十七... 第三十八... 第三十九... 第四十... 第四十一... 第四十二... 第四十三... 第四十四... 第四十五... 第四十六... 第四十七... 第四十八... 第四十九... 第五十... 第五十一... 第五十二... 第五十三... 第五十四... 第五十五... 第五十六... 第五十七... 第五十八... 第五十九... 第六十... 第六十一... 第六十二... 第六十三... 第六十四... 第六十五... 第六十六... 第六十七... 第六十八... 第六十九... 第七十... 第七十一... 第七十二... 第七十三... 第七十四... 第七十五... 第七十六... 第七十七... 第七十八... 第七十九... 第八十... 第八十一... 第八十二... 第八十三... 第八十四... 第八十五... 第八十六... 第八十七... 第八十八... 第八十九... 第九十... 第九十一... 第九十二... 第九十三... 第九十四... 第九十五... 第九十六... 第九十七... 第九十八... 第九十九... 第一百...



詩人なる人生哲學者 自然草執筆の心境

あるが、その内容としては、大凡四つの條項が考へられる。第一は「つれづれ」である。第二は「心にうつり行くよしなし事」である。第三は「そこはかとなく書きつくする事」である。第四は「あやしくこそ物狂ほしけれ」である。

「つれづれなるままに」の「つれづれ」は、古來種々に解釋せられて居るが、兼好がこの書の第七十五段に「つれづれ佗ぶる人は、如何なる心ならん。紛るる方なく、たゞひとりあるのみこそ良けれ」と述べてゐる條と照應せしめて考へると、「他の物事に心が紛らはされたり煩はされ

たりする事が無くて、閑かな澄んだ心境を自ら味はひ得るやうな閑寂な境涯を意味して居る事が知られる。そしてその心境は、兼好にとつては決して退屈無聊なものでもなく、又弛緩したものでもなく、澄み入つた樂しむべきものであつたと見るべきであらう。さうした心境に於ては、人事自然の様々の姿が、彼の心の鏡に、次から次へと映り來るのである。それが「心にうつりゆくよしなしごと」である。「よしなしごと」とは、價値の乏しいといふ謙遜の辭であるが、それは「他人から見れば」であつて、兼好自身に於ては、興味もあり又價値もある事柄であつた事は明らかである。たゞ、それが一定の筋道を立てた考察として追求せられた思索でなくて、走馬燈のやうに心の鏡面にめぐり來り移り行く感想である點に、所謂「とりとめもない」といふ性格を持つものであるが、さうした心の移り行きを、更に一段と高い心の立場から眺める事は、まことに樂しい經驗である事は、我々の體驗からでも想像出來る所である。さうした事柄を、「そこはかとなく書きつける」とは、その心境のままに紙上に描き寫すのであつて、それを體系立てたり理論立てたりして論述する事とは違つた行き方で書くことをいふ。即ち一定の目的を以て書き貫くのでなくて、思ひ浮ぶ事柄のままに、その心理的自然さを追うて落筆するのである。従つて、その記されたものは、心の赴き移るさまを如實に示す特徴を持ち、他人が見るよりも、自ら

これを読み返す時に、あはれの深い懐しさを感じさせる性格を持つた文章となるのである。隨筆は、筆のすさびであるが、その筆のすさびは、作者の心のすさびから生れ、作者の心のすさびは清閑の心境に於て、思索をほしいままに遊ばせ樂しませる所から生れるのである。心の手綱を弛めて、我々の思考を逍遙させる際の産物である。他人と應對したり世上に交はつたりしてゐる際は、「世に従へば、心外の塵にうばはれて惑ひ易く、人に交れば、言葉よその聞きに隨ひて、さながら心にあらず」と兼好自ら述べてゐる如く、とかくに自己の心は外から制約せられて、自己獨りの心のやうな自由さは得がたい。それが「つれづれ」なる境涯に於ては、ほんとうにのびのびと心は逍遙の樂しさに遊ぶ。さうした際の感想を、さながら心のままに寫しとどめたものは、所謂「そこはかとなきもの」であるかもしれないが、作者としては「心ゆく」ものであることは明らかである。それを、第三者の立場に自己を置いて見る時は、「怪しうこそ物狂ほしけれ」といふ印象も生じるであらう。「ほんとうに變な、常規を逸したもののやうにも感じられる」といふのは、氣分の赴くままに、自由に奔放無礙に書き進めてゆく行き方を、他人の冷靜な眼で見たらば、といふ條件付きの言葉である。しかし、さうした見方で見る時に「物狂ほしき感」があるとしても、兼好としては、敢てそれを矯め直す必要は感じてゐるのではない。他人は他人、

自分は自分である。かやうな行き方も面白いではないか、といふやうな<sup>しゃくして</sup>餘裕感があり、超脱の心境に於ける心遊が感じられると思ふ。

兼好が徒然草を書いた心境は、大體以上の如きものと見て良いであらう。さうした心境に於て彼の心に浮んで来たものは一體何が中心であつたであらうか。

(一) 詩人的なる人生哲學者

兼好は僧であり、世捨人である。世を捨てたのは、浮世の交りを能ふ限り避けようとしたものであり、その點で、世の中から隠遁したものと云ふ事が出来る。しかし、彼は現世を厭離すべき穢土と眺め、來世の極樂を欣求して、此の世全部を否定し去らうとする人ではない。此世を否定し去れば、結局死んで來世に早く生れる以外に執るべき道は無いわけであり、さうした立場から自ら身を殺した僧侶も昔にはあつたが、十例へば、天王寺のほとりから、西方極樂を念じて、ひたすらに西へ西へと進んで、難波の海に身を沈めたといふ、撰集抄にある物語のやうに、兼好はさうした極端を歩む人ではない。彼はむしろ、此の人の世を愛してゐる。濁惡の世であるとは觀念してゐるが、その濁惡の世を、如何に生き通るべきかが、彼の最大の問題であつた。如

何に生きれば良いかと考へるといふ事は、この人生を、あるがままに承認して居る事である。そして、そのあるがままの人生を、與へられた運命的事實として眺め、その中に於て、最も價値ある生き方に於て生きようと考へてゐるのである。さうした彼が物語る所は、結局に於て、人生哲學とならざるを得ない。

兼好を以て人生哲學者と考へる事には、異見もあるであらうが、それは今日の哲學者といふ考へを以て、兼好を律しようとする所からの異見であらう。が、彼が人生の表と裏を實に犀利に觀察し、人間といふものを最も包容性強く理解して、人間學・人生學ともいふべきものを、實際の體驗からして築き上げてゐた睿智の人であることには、誰も異存はないであらう。勿論、兼好が考へて居る程の事は、誰でも、五十前後の年齢<sup>及ぶ頃</sup>には、漠然と考へない人はないであらう。誰かが何處かで感じたり考へたりしてゐる事は事實であらうが、それを兼好ほどに透徹して考へて居る人は稀であるし、又、兼好ほどに人生の多方面に涉つて考察し得て居る人も殆どなからうと思ふ。又、たとひ考へ感じてゐても、これを兼好ほどに鮮明な形で表現し得たものは無いのである。自己の考へなり感じなりは、自分では相當にはつきりと感じたり考へたりし得てゐるつもりでも、いざこれを紙筆に上せるとなると、甚だ茫漠としたものであつた事に氣づくものであつ

て、表現し得るといふ事は、極めて明かに、隅から隅まで透徹して知り分け感じ分けておなければ、出来るものではないのである。この點から考へても、兼好が博い豊かな人生哲學者であつた事は承認せざるを得ないと思ふ。

兼好は人生の生き方を考へたが、それは兼好一人の關心事ではなくて、實はあらゆる人々の關心事であるべき事柄であり、又、ある事柄でもあるのである。彼の徒然草が、青年層にも壯年層にも老年層にも、すべての方面の人々に愛讀せられてゐるといふ事實は、彼がすべての人々の所感を、代辯して物を言つてゐるといふ事を告げる。そして、この聰明な代辯者は、普通の凡人では「言ひ度いが、どう言つて現はしてよいかわからない」でゐる所までも、實に明快に、胸のすくやうな調子で代辯して居てくれるのである。これは、彼がすぐれた人生觀照者であると共に、物事の機微をつかんで、するどくこれを把握し表現する詩人的な長所を持つて居たことを物語る。徒然草の文政は、簡潔で淨明で、しかも潤ほひがあり味はひに富んでゐる。その點で、人生哲學の文藝化せられたものであり、人間學を詩化したものであるとも言ひ得よう。素淡たる理窟ではなくて、察しの良い含蓄に富んだ感想として示され、讀む者をして如何にもと納得し感心させずにはおかないものを持つてゐる。

(三) 人間願望の種々相と其の批判

人生哲學者である兼好が、開卷第一に述べて居る事は、「此の世に生れては、願はしかるべきことそ多かめれ」として、人間としてのさまざま願望の對象を取りあげて、これの批判を試みて居る人生論である。即ち

いでや、此世に生れては、願はしかるべき事こそ多かめれ。  
御門の御位はいともかしこし。竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞやんことなき。一の人の御有様はさらなり。たゞ人も、舍人などたまはる際はゆゆしと見ゆ。その子・孫までは、はふれにたれど、なほなまめかし。それより下つかたは、ほどにつけつつ、時に逢ひ、したり顔なるも、自らはいみじと思ふらめど、いと口惜し。

法師ばかり羨しからぬものはあらじ。人には木の端のやうに思はるるよ」と、清少納言が書けるも、げにさることぞかし。勢猛にのしりたるにつけて、いみじとは見えす。増賀聖の言ひけんやうに、名聞ぐるしく、佛の御教へにたがふらんとぞ覺ゆる。ひたぶるの世捨

人は、ながながあらまほしき方もありなん。物うち言ひたる、聞きにくから人は容貌有様の勝れたらんこそ、あらまほしかるべけれ。物うち言ひたる、聞きにくからず、愛敬ありて、詞多からぬこそ、飽かず對はまほしけれ。めでたじと見る人の、心劣りせらるる本性見えんこそ、口惜しかるべけれ。人品容貌こそ生れつきたらめ。心はなにか賢きより賢きにも、移さばうつらざらん。容貌心さまよき人も、才なくなりぬれば、人品くんだり、顔憎さげなる人にも立ちまじりて、かけずけおさるこそ、本意なきわざなれ。ありたき事は、まことしき文の道、作文、和歌、管絃の道、又、有職に公事の方、人の鏡なりらんこそ、いみじかるべけれ。手など拙からず走り書き、聲をかしくて拍子とり、いたましくするものから、下戸ならぬこそ男はよけれ。と記して居るのである。

兼好は先づ、人と生れて来たからには、願はしく思はれる事が「多かめれ」といふ。「多くあるやうに見える」といふ口吻の裏には、眞實に願はしい事は、さう澤山にあるべきものでもないといふ氣持や、澤山な願ひを持つたとしても、到底それが實現されることはあり得ないものであらう、といふやうな餘意が漂つて居るのを感じる。

先づ彼は、帝の御位はいともかしてし。竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞ、やんごとなき」と述べる。これは、普通の者が先づ望ましいものとして考へる所の「社會的な地位に關する語りはじめとして、その絶對なるものとして、皇室の事に觸れたものであるが、「人間の種姓でない」と断じて居る點に、彼の皇室觀がうかがはれる。兼好は在俗の時代には、瀬口の武士として御所に奉仕し、後二條天皇や後宇多院に御仕へ申し、又、後二條天皇の皇子邦良親王にも親しく奉仕した人間である。さうした宮仕への中に於て、彼が身にしみて感じ申した事が、皇室は神の御裔であらせられ、人間の種ではないものだといふ、絶對的尊嚴の信仰であつたものと思はれる。兩統迭立の時代であり、人心は次第に浮薄に流れ、武門が朝廷に對し奉る態度には、許すべからざる非禮の多かつた時代であるが、さうした中に於て、兼好がこれだけの信仰を得てゐた事や、又、さうした信仰を持たざるを得ないほどの神々しい雰圍氣が満ちてゐた宮中といふ

ものの尊嚴さを思ふ時、この兼好の言葉は、我々に非常な嚴肅な感じを惹起せしめるものがある。佛教的な教理からは、「十善の帝」といふ考へ方が淺濶して居た時代である。過去の世に於て十善を保ち得た故に、現世に於て帝王と生れ出でたといふ思想は、輪廻轉生の人間、六道に輪廻する衆生の中の一人として、帝王を眺めるのであつて、神として天皇を仰ぐものではない。兼好は法師であるから、十善帝王説を知らぬ筈はないが、さうした佛教的な見方を打捨てて、只管に、「人間の種ならぬぞやんごとなき」と仰ぎ畏んでゐる所に、我々の注意は向けられねばならないと思ふ。

「彼は次に、一の人（攝政關白の位にある人）以下、舍人と稱して朝廷から警護の御隨身を賜はる程の身分の者までを總括して、『ゆゆしと見ゆ』と言つてゐる。これは、人間の種姓の中で、最も高い社會的地位を占めてゐる公卿者流を、批判の對象としたものであるが、そして、これ等は、あらゆる人間の羨望する境涯の人々であるが、彼自身は、これを「願はしき事」とは言はないで、『ゆゆし』即ち、素敵だとか素晴らしいとかいふ批評を以てしてゐる。他所目には立派に感じられるといふのであつて、全く願はないのではないが、それにはそれとしての條件もあり、願つて叶ふべき性質のものでもない事を、良く心得た言葉である。兼好には、それ以上に、願望

し希求すべき事が、人間には存在する事を知つてゐるからである。たゞ、さうした公卿者流の人品や教養には、凡人地下の輩の及びもつかぬ洗煉されたもののある事を認め、それを尊重して、『その子孫までは、はふれにたれど、なほなまめかし』と、たとひ社會的地位は零落しても、孫の代までぐらゐの人には、どこやらに上品な氣高い美しさが備はつてゐるものだと言つてゐる。それは、趣味的情感の上からの肯定であつて、彼の平安時代憧憬の念に連なるものである。

第三に、「それより下つ方は、程につけつつ、時に逢ひ、したり顔なるも、自らはいみじと思ふらめど、いと口惜し」と述べる。この中には、當時權勢を振つた武人大名も、將軍も、又、財を擁して我は顔に振舞ふ豪族も含まれ、又、朝臣にしても、成り上りの權勢者をも含めてゐる。そして、それ等が、その身分分際につけて、羽振りの利く地位に坐り、自らも甚だ得意満面で、我こそは成功者よ出世者よと驕り高ぶつて、誇りに感じてゐるやうだが、と言ひ、さうしたものを一括して、『いと口惜し』と、嘔んで吐き出すやうな口吻で、否定してしまつてゐる。凡人ならば、願はしきものとして羨む境涯の者たちを、かやうに否定してゐる所に、彼の面目の躍如としたあらはれを我々は感じる。それは、驕慢を憎み、名利を退ける彼の主張に深く連なるものである。



第四には、世外の人、即ち社会階級の上下からは隔離した者として、法師を批判の対象として採り上げる。しかも、彼自身がその法師であるから、この批評は面白い。彼は先づ、俗人の法師評として、清少納言の「人には本の端のやうに思はるるよ」といふのを採り上げて、「實にさることぞかし」と肯定し、「法師ばかり羨しからぬものはあらじ」といふ。又、僧侶の批評としては、増賀上人の「名聞ぐるしく、佛の御教へに違ふらんとぞ覺ゆる」といふのを採用して、羽振りを利用し全盛を極めて得意氣な僧侶を、こき下してゐる。結局世にある法師は、世に用ひられて全盛を極めて、又用ひられないで嫌つて居ても、何れにしても、更に羨まじき所はないといふのであつて、徹底的に否定した目物である。たゞ、「ひたぶるの世捨人」だけは、「なかなかあらまほしき方もありなん」と、そこに法師の教はれるべき途を示してゐる。この立場から振り返つて見ると、兼好が否定する僧侶は、世捨人といふ地位に身を置きながら、心は世俗名利の巷を彷徨してゐる者を否定して居る事が明らかになる。身も心も俗世から離れ切つて、清閑の境地に佛の御教へを楽しむといふ「ひたぶるの世捨人」には、彼は好意を示してゐるのであつて、兼好自身の所願も、この境地を望んでゐるものと見て良い。第七十六段に、「世のおぼえ花やかなるあたりに、嘆きも喜びもありて、人多く往きとぶらふ中に、聖法師の交りて、言ひ入れ佇みたるこそ、さらすとも見ゆれ。さるべき故ありとも、法師は人にうとくてありなん」と言つて、法師が權門勢家の吉凶に際して、俗人に交つて訪問するなどを、「然らずとも見ゆれ」と苦々しく思ひ、たとひ、然るべき理由があるにしても、法師たるものは、世の交りには疎くして居たいものだとおぼえてゐるのも、「ひたぶるの世捨人」として生きることを願ふ心持の反映である。

以上は社会的地位に關しての、一般的な所願に關係した批判であるが、次に兼好は筆を改めて、別個の立場から、人間の所願の種々相を描き出して来る。

先づ、人と生れては、容貌有様のすぐれてゐるといふ事が願はしい事だといふ。これは最も手近かな所にあり、且つ萬人共通の感情であるだけに、極めて切實な所願と言へるし、何人でも、はつと思ひ當る力強さを持つ。と同時に、それは願つても叶ひ難い事であることにも氣付いて、苦笑せざるを得ない皮肉味をも含んでゐる。次に「物うち言ひたる、聞きにくからず、愛敬ありて、詞多からぬ」人柄を稱して「飽かず對はまほしけれ」といふ。これは、人間としての修養如何によつては、此の境地に到り得るものであるから、前の容貌有様の願ひに比べては可能性があるが、兼好はさうした境地に自ら到る事を望むといふよりも、一般人としては、さやうにあり度

いものだと考へてゐるやうである。そして、さうした人は、相手に「飽かず對はまほしけれ」といふ好感情を起させ、それが結局、その人の爲にも幸福を齎すものであるといふ意見である。人の心は「言葉の恣」を通して知られるものである事を思ふと、彼が人間の嗜みとして、先づ言葉を探り上げたのは、頗る炯眼と言はねばならない。それと連關して、「めでたしと見る人の、心劣りせらるる本性見えんこそ、口惜しかるべけれ」とのべて、容貌有様などが甚だ立派で、如何にもすぐれた人だと思ひ込んでゐた人が、案外に心劣りのする性質であつたなどとわかる事は、それもやはり、言葉の恣を通して知られる事であるが——一種の幻滅の悲哀で、残念の上なしであるといふ。そこで、有らまほしき事としては、「心はなどか賢きより賢きにも、うつさは移らざらん」で、心の修養の大切なことをいひ、聰明伶俐の徳を積むべき事を強調するのである。「人品容貌こそ生れつきため」で、家柄の種姓や容貌は天賦の運命であるが、と述べてゐる背後には、普通の世人は、心を「賢きより賢きに移す」ことをこの次として、謂はば不能な、種姓や容貌がすぐれてゐる事への願ひに、深い執心を持つてゐる事をそれとなく皮肉にほめかしてゐるのである。

次に、兼好は才（漢詩文の學問）といふものの必要を説いて、「容貌心さまよき人も、才なくならぬれば、人品くんだり、顔憎さげなる人にも立ち交りて、かけずけおさるこそ、本意なきわざなれ」と述べる。性質容貌共にすぐれてゐても、學問的教養の無い人となつてしまふと、地位も人の下位につき、下卑た顔つきの連中の仲間に入れられて、わけもなく壓倒されたやうな破目に陥るといふのである。性質は良くても學問の權威がなければ、これだけの目に逢ふといふ事は、學才といふものが如何に人生に必要であるかを物語ると思ふ。今日でも學問の必要は變りはないが、教育の普及といふ事が殆ど無かつた兼好の時代に於ては、漢詩文の學才を有するといふ事は、非常な人間の強味であつたのである。

以上、容貌有様、言葉づかひ・性質心さま・漢學的素養と、兼好の、一般世人としてあらまほしく思ふ項目をあげて來たのであるが、それ等は、外形にあらはれるものから、次第に心の問題へと展開されて來て居るのを見る。そして、最後に、「ありたき事は」として、「まことしき文の道、作文、和歌、管絃の道、また有職に公事のかた、人の鑑ならむこそ、いみじかるべけれ」とのべてゐる。「まことしき文の道」とは、身を修め世を治める學問を指すもので、儒教を本幹とした政治道德の學問である。作文といふのは、漢詩を作る事を指していひ、和歌や管絃音楽の道

と共に、文學や藝術の方面の嗜みとして見られるものである、又有職とは、様々の故實や典禮に關する造詣の深い事をいひ、公事といふのは、朝廷に於ける年中行事などの儀式——當時の所謂「まつりごと」の大部分はこれに含まれてゐた——をさしていふ。さうした方面に於て、故實先例に明るい事は、當時朝廷に仕へ奉るものとして、最も必要な條件であつた。さうした故實先例に關する知識に於ても、人の鑑と言はれ世の鑑と稱せられるほどの造詣を持つ事は、望ましい事であり、いみじき事であるといふ意である。「いみじき」とは今日の言葉でいへば、「素晴らしい事」といふに當り、非常に價値高く見た表現であるから、兼好は、「此の世に生れては願はしかるべき事を多かぬれ」と言つた冒頭に對して、以上の、「まことしき文の道」といふ政治道德の學問、「作文和歌管絃の道」といふ情操陶冶に資する藝術的な嗜み、朝廷に奉仕するに必要な有識・故實への深い造詣等が、眞に願はしかるべく、又、願望すべき所のものであると斷じたものである。そして、次に、お添へ物として、「手など拙からず走り書き、聲をかしくて拍子とり、いたましようするものから、下戸ならぬこそ男はよけれ」と、極めてくだけた物の言ひぶりで此の一段を結んだ。「よけれ」は前の「いみじかるべけれ」に比して、程度をぐつと下げた物の言ひぶりであつて、かうした洒脱味に富む一文を加へることによつて、堅くるしさをくつろげる手腕

はうまいものだと思はせられる所である。手跡がさらさらと能筆に書かれる事、宴席などの歌ひ物の際には、ぐつとくだけで、良い聲で音頭を取つて一座の興を引き立てるだけの隠し藝も持ち、又、酒をすすめられては、迷惑さうにしてゐながらも、十分に相手になれるだけの酒量を持つこと等は、いはば一種の社交上の技巧といふべきものであるから、前の政治道德の學問的教養や有職故實の造詣等に比べて、大したものとは言ひ得ない事は明らかである。が、しかし、現實の世渡りの辛酸をなめ、世情人情の機微に觸れて、世の中の酸いも甘いも知り抜いて來ると、かうした世渡り社交の技巧が、思ひの外に物を言ふものである事がわかつて來るのである。世の中は道理一本道では渡れるものでなく、どうしても人の心を和らげるすべが必要である事を思ふと、かやうな一文を以て此の段を結んだ兼好が、如何に常識に富んだ物わりの良い人生哲學者であつたかといふ事が理解されるであらう。

#### (四) 表裏兩面よりの觀照と人情世情の機微の把握

兼好はすべての物事に對して、必ずそのものを、自己の主觀的な主義や主張で批判しないで、客觀的に又傍觀的に、物の表裏の兩面から眺めてゐる。そして物事には、必ずそれぞれに存在す

べき理由があつて存在するものである事を見通してゐる。これは、彼の深い叡智のはたらきであり、又豊かな常識のはたらきでもある。兼好ほどに、人生智といふものの働きの豊かさを示したものはないが、それも、結局押し詰めて見ると、彼が自己をよく知り得た人であつたと言ふ點に歸するであらう。よく考へて見ると、自己の心は、人生全般の縮圖である。善もあれば悪もある。色を好む心もあれば色を戒める心もある。利他の愛情もあれば利己の根性も存在し、貧を嫌ふ心もあれば富を蔑視する心もある。貪慾心も満ちて居れば清廉潔白を好む一面もある。數へて見ればかやうな矛盾は、自己自身の中に充満して居る。結局人間は矛盾のかたまりであると言つて良い。そして、そこに人間の面白さと味はひがあるのであつて、その點を兼好は實によく知り抜いて居る。兼好の言ふ所には矛盾が多いといふ批判が下されてゐるが、それは結局、彼がよく自己を知り、人間を知つて、それをさながらに、そこはかとなく書き記してゐるからである。此の寛容な豊かさが、我々に樂しさと面白さを伴つたモラルを示すのである。此の寛容な豊かさが、我々に樂しさと面白さを伴つたモラルを示すのである。此の寛容な豊かさが、我々に樂しさと面白さを伴つたモラルを示すのである。

# 欠

# 欠

深く徹する嚴肅な道念が語られてゐる事は、又、この書が、青年にも壯年にも老年の者にも、それぞれに深い感銘をあたへる原因であるかと思ふ。その巧妙な一例として、第百八十八段を取つて見よう。

## (一) 萬事にかへずしては一の大事成るべからず

ある者、子を法師になして、學問して因果の理ことわりをも知り、説經せつぎやうなどして世渡るたづきともせよ」といひければ、教しよのままに説經師にならん爲に、先づ馬に乗りならひけり。輿車こしやう持たぬ身の、導師だうしに請こたぜられん時、馬など迎へにおこせたらんに、桃尻ももじりにて落ちなんは、心憂こころうれかるべしと思ひけり。次に、佛事ぶつじの後、酒など勸すすむることあらんに、法師の無下に能のうの無きは禮那らいなすさまじく思ふべしとて、早歌はやうたといふ事をならひけり。二つのわざ、やうやう境まがひに入りければ、いよいよ良くしたく覺えて嗜たしなみける程に、説經習ふべき暇ひまなくて年寄りにけり。この法師のみにもあらず。世間の人なべてこの事あり。若きほどは、諸事につけて、身を立て、大きな道をも成し、能のうをもつき、學問をもせんと、行末久しくあらます事ども、心にはかけながら、世をのどかに思ひてうち怠りつつ、まづさしあたりたる目の前の事にのみま

ぎれて月日を送れば、事毎に成すこと無くして身は老いぬ。悔ゆれども取り返さるる齡ならねば、走りて坂を下る輪の如くに衰へゆく。されば一生のうち、むねとあらまほしからん事の中に、何れか勝ると、よく思ひくらべて、第一の事を案じ定めて、その外は思ひ捨てて、一事を勵むべし。一日の中一時の中にも、あまたの事の來らん中に、すこしも益のまさらん事を營みて、その外をぼうち捨てて、大事をいそぐべきなり。いづかたをも捨てじと心にとりもちては、一事も成るべからず。例へば碁を打つ人、一手もいたづらにせず、人に先立ちて、小を捨て大につくが如し。それにとりて、三つの石を捨てて、十の石につくことは易し。十を捨てて十一につくことは難し。一つなりともまさらん方へこそつくべきを、十までなりぬれば惜しく覺えて、多くまさらぬ石には換へにくし。これをも捨てず、かれをも取らんと思ふ心に、かれをも得ず、これをも失ふべき道なり。京に住む人、急ぎて東山に用ありて、既に行き着きたりとも、西山に行きてその益まさるべきを思ひ得たらば、門より歸りて、西山へ行くべきなり。ここまで來着きぬれば、この事をば先づ言ひてん。日をささぬ事なれば、西山の事は、歸りて又こそ思ひ立ためと思ふ故に、一時の懈怠すなはち一生の懈怠となる。これを恐るべし。一事を必ず

成さんと思はば、他の事の破るるをも痛むべからず。人のあざけりをも恥づべからず。萬事にかへすしては、一の大事成るべからず。

人の數多ありける中にて、あるもの、ますほの薄、ますほの薄などいふことあり。渡邊の聖この事を傳へ知りたり」と語りけるを、登蓮法師その座に侍りけるが、聞きて、雨の降りけるに、蓑笠やある。貸したまへ。かの薄のこと習ひに、渡邊の聖のがり尋ねまからん」と言ひけるを、「あまりに物さわがし。雨やみてこそ」と人の言ひければ、「無下の事をも仰せらるるものかな。人の命は雨の晴間をまつものかは。我も死に、聖も失せなば、尋ね聞きてんや」とて、走り出でて行きつつ、習ひ侍りにけりと申し傳へたるこそ、ゆゆしく有りがたう覺ゆれ。敏きときは則ち功あり」とぞ、論語といふ書にも侍るなる。この薄をいぶかしく思ひけるやうに、一大事の因縁をぞ思ふべかりける。

此の段の眼目は「萬事にかへすしては、一の大事成るべからず」にある。「一時の懈怠すなはち一生の懈怠となる」事を警告するにある。それは、此の段を通讀すれば、何人でも感ぜざるを得ない所である。しかし、それを冒頭からひた押しに言ひ出しては、讀む者の心に、これほどの感銘をあたへる事は出來ないであらう。その爲に兼好は、先づ面白く滑稽な説經僧を描き出して

知らず知らずの中に、讀者を問題の核心に導くやうな手法を採用してゐるのである。

説經師にならうと志しながら、その説經の方面を習はないで、先づ乘馬の練習を始めたといふのが、既に本末錯倒から生じた滑稽の第一歩である。奥も車も持たない身が、導師として招待せられ、馬などを乗用にとよこされた場合に、桃尻で落馬でもしたら大恥ぢだと考へた」といふのが、乘馬の稽古を思ひ立つた原因である。さうした考へは、自分が既に立派な説經師になつてしまつた際の事を空想した上の事である。まだ習つてもゐない説經が、あたかも立派に完成したかのやうに考へて、その先きの事まで心配してゐる所に、我々を苦笑させるをかしさがある。又、早歌といふ諷ひものの練習もはじめたといふ。それは「佛事のすんだ後の宴席などで、導師に何の藝の嗜みもないとなると、施主の旦那はさぞかし無興に感じるだらうから、早歌の一節ぐらゐは心得て置かねばなるまい」と感じたからだといふ。これも前と同様な滑稽である。それ等が、段々と上達して、乘馬も諷ひものも、一通りものになつて來た時に、せめて説經を習ふべきであつたのを、それをしないで、一層馬や諷ひ物が上手になり度くなつて、その稽古ばかりに夢中になつてゐる中に、説經を習ふ暇はなくて、年寄つてしまつた、といふのは、單に笑つただけではすまされない痛ましさがある。

この説經僧の考へ方や學び方の滑稽さは、物事の本末を顛倒して居る所から起つた可笑味であり、誰でも「馬鹿な説經師もあつたものだ」とをかしく思ひ「なぜ肝腎の事を學ばないで、餘計なことなどに夢中になつて居たものだらう」と、不審に感じるわけであるが、兼好は、さう考へてゐる讀者に、直ちに「この法師のみにあらず、世間の人、なべてこの事あり」と、胸元に刃を擬するやうな一言を加へた。「笑つてゐられるあなた方も、反省して見られるならば、みんなこの僧の二の舞を演じてゐられる事がわかる筈だ」といふのである。今まで他人事として笑つて居た事が、自分の身の上にもあると言ひ切られて、讀者はヒヤリとせざるを得ない破目に立たされる。

兼好は語をついで「誰でも若年の時代には、萬事につけて、或は立身しようとか、偉大な一道を成し遂げようとか、能をも身につけよう、學問もしようなどと、將來にあり度く思ふ希望を心の中に描くものであるが、さてそれにまつしぐらに進んで行くかといふと、まだまだ前途は長い事だとゆつくりと構へて、一向に精進せず、差當つた目前の事の處理に取り紛れて月日を徒費してゐる。そんな事情で、結局、何一つ成就したといふ事もなくて、年は老い込んで行き、以前の希望は一場の夢と化してしまふ。そこまで行つて氣がついたのでは、時既に遅しで、後悔したと

て取返しのおく齡ではなく、坂に車のやうに身は衰へて行くではないか」と萬人共通の愚かさを巧妙に描き出して来る。讀者は自ら省みて、あつと思はざるを得ない。殊に、私共のやうな年齢になつた者には、この兼好の言葉は、身にしみて痛切にひびくのである。

かやうに兼好は我々を追詰めておいて「されば一生のうち、主とあらまほしからんことの中に何れか勝ると、よく思ひ比べて、第一の事を案じ定めて、その外は思ひ捨てて、一事を勵むべし」と、一事のみ選んで、それに全精力を集注すべき事を説く。しかし、この程度の教訓であれば、若い者でも、観念的には承知してゐる事であるので、彼は更に具體的にこれを説いて来る。それは先づ「一日一時の中に於ける生活にその事が具現されねばならない」といふのである。「一日の中、一時のうちにも、數多の事の來ちむ中に、少しも益のまさらむことを營みて、その外をば打捨てて、大事をいそぐべきなり」といふ。漠然と遠い將來を考へてやるのでなくて、現下の一刻一刻に於て、最も必要であり有益である事を即時に實行し切るのであり、その爲には、他事は惜しむ事なく犠牲にしなければならぬ。「何方をも捨てじと心に取り持ちては、一事も成るべからず」とは、甚だ極端な物の言ひやうの如くにも見えるが、ここに物事が成就するかしないかの、非常に大切な分岐點があるのである。それは老境に入つて、自他の身の上をしみじみと見

廻した時、何人にも痛切に感じられる所であるのである。

以上の根本的な生活態度を樹立することを説いた後に、碁の例があげられる。十目の得を得る爲に三目の石を捨てるといふ事は、素人碁でも容易であるが、十を捨てて十一を取るといふ事は下手碁の者ではやり得ない。が、「一目でも勝る方につく」といふ所に碁打ちの秘訣があるのであつて、その一目が實は勝敗の決を左右するのである。「一つなりとも勝らむ方へこそつくべきを、十まで成りぬれば、惜しく覺えて、多くまさらぬ石には換へにくし」といふ如く、今までの努力を惜しく思ふ情に惹かされて、これを捨て切れぬ所に、人情の弱點がある。その弱點は「これをも捨てず、彼をも取らむと思ふ」慾心となり、その結果「かれをも得ず、これをも失ふ」といふ失敗を招くといふのである。まことに二兎を追ふ者は一兎をも得ないのである。又、兼好は、「京に住む人が、所用で東山へ行き、既にその門口まで行き着いた場合でも、若し西山へ行つた方がその益がまさると考へ得たならば、即刻に踵をかへして西山へ急ぐべきである」といふ例話を出した。これは百人が百人ともに「折角此處まで來たのであるから、この事を先づ言ひ入れよ。別に目取りを指定しての事ではないのだから、西山の事は、歸つて後に出直せばよい」と考へ勝ちなものであるから、その考へ方に對する一警告である。これも、結局は、東山まで足を運



んだ努力を無にする事を惜しく思ふ心に禍されたのである。そして西山へ即刻引き返すべき事に對して、懈怠したのである。其に於て、十目を捨てる事を惜しんで、十一目を取り得ないで終るといふのと、同一の心理である。しかし、さうした一時の懈怠が、毎日の生活の上に積り積るとそれは一生の懈怠となるものであつて、實に恐るべき結果——事毎に成すことなくして身は老いぬといふ悲惨な結果——となつて來るのである。

かやうに、極端と思はれるほどの例話——それは實は極端でも何でもなく、眞實に裏づけられた大きい眞理を物語るものであるが——を擧げて、十分に讀者の自己反省の心を揺り動かした後に、「一事を必ず成さむと思はば、他の事の破るるをも痛むべからず。人の嘲りをも恥づべからず。萬事にかへすしては一の大事成るべからず」と、兼好は斷定を下したのであるが、層々と説き來り説き盡して後の一言であるだけに、この一語は、我々の腸に滲み通る強さで響いて來るのである。

次で兼好は登蓮法師の逸話を物語る。ますほの薄とまそほの薄といふ事の由來や區別などといふ事は、閑人の仕事であり、せいぜいで歌人の心得として知つてゐなければならぬ程度の事柄であるが、歌道に執心を持つ登蓮法師に於ては、事甚だ重大に感じたものであらう。蓑笠を借りて、雨中に渡邊（大阪の地名）まで出かけようといふのは、常人から見れば、物狂はしい事と感ぜられるのは當然である。雨の晴れた後でも差支ないではないか、といふ忠告は、常識から言へば至極尤もである。しかしその常識を超えて、人の嘲りをもかへり見ないで、一途に出かけて行つて習つたといふ點に、兼好は「ゆゆしく有難きもの」を感じたといふのである。その「ひたぶる心」に感じたといふのである。それは、「一時の懈怠」をも許さぬ嚴肅さを持つが故である。かやうに登蓮の振舞ひを賞した後に、彼は「この薄をいぶかしく思ひけるやうに、一大事の因縁をぞ思ふべかりける」と述べて、人間と生れ出でた者は、一大事（生死）の因縁を思ひ佛道を修すべきものである事を告げてゐる。それは、人間として最も肝要なるものであるといふ彼の佛法觀からの言である。

(一) 即刻に本意に向つて驀進せよ

「萬事にかへすしては、一の大事成るべからず」とは、一道專念への指示である。精力の多方分散を戒めて、全生活力を一道に向つて集注せよとの教訓である。その爲には「他の事の破るるをも痛むべからず」であり、「人の嘲りをも恥づべからず」であらねばならない。然るに、多くの

者が「一時の懈怠すなはち一生の懈怠となる」といふ風な運命に陥つて行くのは「他の事の破るを痛む」爲であり、「人の嘲りを恥づる」爲である。その人情の弱點に對して、更に反省を求めてゐるのが、第五十九段である。曰く。

大事を思ひ立たん人は、避り難く、心にかからん事の本意を遂げずして、さながら捨つべきなり。「しばし此の事果てて」、「おなじくはかの事沙汰し置きて」、「しかしかの事人の嘲りやあらん、行末難なく認め設けて」、「年ごろもあればこそあれ、その事待たん程あらじ。物さわがしからぬやうに」など思はんには、先避らぬ事のみにとど重なりて、事の盡くる限りもなく、思ひたつ日もあるべからず。おほやう人を見るに、少し心ある際は、皆このあらま

しにてぞ、一期は過ぐめる。  
近き火などに逃ぐる人は「しばし」とや言ふ。身を助けんとすれば、恥をも顧みず、財をも捨てて遁れ去るぞかし。命は人を待つものかは、無常の來ることは、水火の攻むるよりも速かに、遁れ難きものを、その時、老いたる親、幼き子、君の恩、人の情、捨て難しとて捨てざらんや。

といふのである。此處で兼好が「大事を思ひたつ」といふのは、出家遁世の身となる事であり、

生死の因縁を悟り明らめ、迷ひを去り、佛教の眞理に洞徹する事を意味してゐるものである。それは、人間として、一生の間に成すべき最も重大なる事柄として考へられてゐるものである。それを以て生涯の一大事と考へるならば、當然に、その他の萬事を放擲して、まつしぐらに、寸刻の躊躇もなく、その一道に突入すべき筈である。然るに、少し心ある際の人間と言はれる程の者は、大てい身近かな氣がかりな事に捉はれて、それ等を片付けてしまつてから、心靜かに佛道に入らうといふ風な考へを起す。「暫時待つて、この事件の結末をつけてから」とか、「同じ出家するならば、あの事柄も仕末して置いて後に」とか、「あの事を其の儘にしては、他人の嘲りを受けるであらうから、將來非難の起らぬやうに處理して置いて」とか、「永年かかるわけでもない、あの事はやがてすむから、その後心しづかに」とかいふ考へ方がそれである。しかし、さうした考へで居る時には、捨て去り難い事ばかり、いやが上にも重なり來つて、用件は盡きる期もなく結局、道に入るべき日といふものは無くて一生を終つてしまふといふ結果に陥る。だから、「避り難き事」があつても、その本意を遂げないで、そつくりそのまま、打ち捨ててしまふべきである、と警告する。

兼好は、これを例を以て更に説得する。「近火に逢つて逃げ出す人間は、身を助けたさの一念か

ら、寸刻の躊躇もなく、恥も外聞も捨て、財寶をも捨てて逃れ去るではないか。然るに、人間の身に死が迫つて居る事は、水火の攻めるよりも急迫したものであり、且つ到底のがれる事は不可能なものである。死に際しては、あらゆるものを捨て離れて冥途へ行くのだ。その時に、如何に捨て去り難き本意があつたとしても、それを片付けるまで死は待つてくれるものではないではないか」と言ふのである。

これは、出家に關して述べられて居る。しかし、「大事を思ひ立つ」ことを、自己の生涯を投じての一道に専念する事と考へても、この段の所説は十分に参考する價值がある。一道の爲に萬事を、そのままに放擲して顧みないといふ事は、世間的な人情や義理に拘はつて居ては、中々に成し難い事であり、他人の非難や嘲りを恐れてゐては、容易に實行し得られるものではないからである。しかし、その實行難を克服して、一旦死んだ氣持にならなければ、一道は成就するものではない。常住に死身になる事は、刻々を眞に生かす方途である事が、茲では語られてゐるものと考へてよいであらう。

これと同様の心掛けが、又、百十二段にも語られてゐる。そして、その語氣は一層にするべく激しい。

(三) 諸縁を放下せよ

明日は遠國へ赴くべしと聞かん人に、心しづかに爲すべからんわざをば、人言ひかけてんや。俄の大事をも營み、切に歎くこともある人は、他の事を聞き入れず、人のうれへよるこびをも問はず。問はずとて、などやと恨むる人もなし。されば、年もやうやう聞け、病にもまつはれ、況んや世をも遁れたらん人、亦これに同じかるべし。

人間の儀式、いづれの事か去り難からぬ。世俗の黙し難きに從ひて、これを必ずとせば、願ひも多く、身も苦しく、心の暇もなく、一生は雑事の小節にさへられて、空しく暮れなん。日暮れ道遠し、吾が生ずるに蹉跎たり。諸縁を放下すべき時なり。信をも守らじ、禮儀をも思はじ。この心を持たざらん人は、物狂ひとも言へ、現なし情なしとも思へ。護るとも苦しめ、譽むとも聞き入れじ。

此の段は、主として、出家遁世の爲には、世上の義理に對する願慮を振り捨てべき事を述べてゐる。世間的な儀禮的な慣習に隨つて生きる事は、社會人としては必要な事であり、又、それによつて社會の親和を維持し得るものでもあるから、普通の生活を營む者は何れもこれを尊重すべ

きであり、それに背反する時は、世人の擯斥をも受けるものである。たゞ「止むを得ざる場合」と認められる際には、それが許される。例へば此段に述べられてゐる「俄の大事をも營み、切に歎く事もある人」の如きがそれである。さうした人が、他人の慶弔に際しての訪問を缺いたとしても、それを怪しからぬと怒り恨む人は無い筈である。兼好は、老年に及んだ者や病者や出家者流は、この範圍に入つて良いものであるから、即刻に諸縁を放棄して、直ちに我身の一大事因縁を思ひ、佛道に専念すべきである事を、切に提唱して居るのである。信をも守らじ、禮儀をも思はじ。この心を得ざらん人は、物狂ひとも言へ、現なし情なしとも思へ。そしるとも苦しまじ、譽むとも聞き入れじ」といふ語氣の中に感じられる、物狂はしいばかりの激越な感情は、如何に兼好が、世俗の儀禮に拘泥して一大事を忘却する者に對して、ぢれつたさを感じて居たかを告げると共に、彼自身に對する叱咤の聲とも聞かれるものがある。「人間の儀式」即ち人と人との間に於ける儀禮的な事柄は、何れも去り難く捨て難いものではあるが、その黙止しがたいといふ義理につながれてゐては、爲すべき願も多く、身も苦しく、心の暇もなくなり、一生が雜事小節に終つて空しく暮れてしまふ。暮れてしまつて後に後悔しても、それは後の祭であつて、何の役にも立つものではない。思ひ立つ日を吉日として、即刻にさうした煩累をかなぐり捨て、専念に佛道を修せよといふ。即時斷行、そのみが、我々を眞に救ふものである事を告げてゐる。

(四) 道心は實踐躬行にあり

かやうな兼好の考へ方に對しては、それはあまりに性急な考へ方であり、一面的な考へ方に過ぎる。佛道を修めようといふ根本の精神さへ確立して居れば、在家出家などといふ事は、枝葉の問題であつて、さしてさうした形式に拘泥する必要はなからう」といふ意見が提出される可能性がある。さうしたものに對する兼好の見解は、第五十八段にのべられてゐる。即ち「道心あらば住む所にしもよらじ。家にあり人に交はるとも、後世を願はんはんに難かるべきかは」といふは、更に後世知らぬ人なり。げには此の世をはかなみ、必ず生死を出でんと思はんは、何の興ありてか、朝夕君に仕へ、家を顧みる營みの勇ましからん。心は縁に引かれて移るものなれば、靜かならでは、道は行じがたし。……といふのがそれである。ここには二つの觀點から解答があたへられてゐる。その一つは「道心あらば住む所によらじ」といひ「家にあり人に交るとも、後世を願はんはんに難かるべきかは」といふ如き意見は、眞に後世を知つたものではないからこそ、さやうな事が言へるのであつて、眞に道

心ある者であれば、さやうな考へにはなり得ない筈だといふのである。即ち現代的な言葉でいへば、佛道修行といふ事を、觀念的に知識的に取扱つて居る人に限つてかやうな意見が出るのであつて、さうした人には、眞に求道の志もなければ、道を行じようとの熱意もない。佛道は「行ずる」ことにあり、實踐し躬行する所にあるものであつて、頭の中で考へるといふ性格のものではない、といふ意見である。第二は「心は縁に引かれて移るものである」といふ解答である。即ち我々の心は動搖し易く、周囲の環境に左右される事が多い。従つて、眞に道を行じようといふ熱意があるならば、先づ自己の環境を、佛道修行に適するやうに整理しなければならぬ。それが修行への第一歩の實踐であるといふのである。その實踐は、人の世の交はりを断ち、煩累の多い家を出て、山林僧庵の寂靜なる所に我が身を置いて、外境から自然に散亂粗動の心を閉める行き方を取る以外には、道は無いといふのである。即ち、一面には人間の心の弱いものである事をいひ一面には、道は「行ずる」所のみある事をのべて、先づ環境整理の必要を説いたものである。

## (五) 遁世と衣食住の問題

しかし、かうした環境整理を説く兼好の意見に對しても、尙皮肉な論者は「山林に入つたとしても、草庵生活に於ても衣食住は必要であらう。さうしたものを求める事は、これも又俗人の所行と變りはない。さすれば、さうした衣食住に多少なりとも心を悩ます生活は、折角に世を背いた甲斐もない生活といふべく、在俗在家と五十歩百歩の相違に過ぎないではないか」といふ理窟を以て報いる事も考へられる。それに對する解答は、前文に引續いて

その器、昔の人に及ばず、山林に入りても、飢を助け、嵐を防ぐよすがなくては、あらねわざなれば、おのづから世を食るに似たる事も、便りに觸れば、などか無からん。さればとて「背ける甲斐なし。さばかりならば、なじかは捨てし」など言はんは、無下の事なり。さすがに一たび道に入りて、世をいとはん人、たとひ望みありとも、勢ある人の食欲多きに似るべからず。紙の衾、麻の衣、一鉢のまうけ、藜の羹、いくばくか人の費をなさん。求むる所はやすく、その心早く足りぬべし。形に恥づる所もあれば、さはいへど、惡にはうとく、善には近づく事のみぞ多き。

と述べられてゐる。兼好は、五十歩百歩であるといふ事は認めて居るのであるが、衣食住に於ける求め方の相違や、求める心の相違を、ここで取り上げてゐる。權勢あるものの食欲飽く事を知らぬ求め方は、目的が物にあり、且つ執拗であつて、満ち足りる事を知らないものであるに比し

て、草庵隱遁の求道者の求めるものは、生命を維持してゆく最少限度の物に過ぎない。しかもそれは安きものであり、幾ばくの迷惑をも人にかけるものではない。求道者の真に求める所は、道を行するにあつて、物を求める所にあるものではない。そこに同じく求めると言つても、本質の差と程度の差が確然と認められるものであるといふのである。更に考へると、五十歩百歩の相違に過ぎないといふ事に對しても、たとひ五十歩だけでも、善に近づき惡に遠ざかる事は、人間として奪ふべき事と言はねばならない。否、五十歩でなくても、一步半歩の相違でも、正しきに近づく事は、我々として望ましい事と言ふべきであらう。さうした極小なるものも、これを積み重ねて年月をわたる中には、其の差は千里萬里の差を生ずる筈である。第百八段に「寸陰惜しむ人なし。これよく知れるか、愚かなるか。愚かにして怠る人の爲にいはば、一錢輕しといへども、これを累ぬれば貧しき人を富める人となす。されば商人の一錢を惜しむ心切なり。刹那覺えずといへども、これを運びてやまされば、命を終ふる期忽ち到る。されば道人は、遠く日月を惜しむべからず。只今の一念空しく過ぐることを惜しむべし」と述べてゐるのは、寸陰を惜しむ事が、如何に大きい結果をもたらすものであるかを論じたものであるが、所謂「小が積つて大となる」といふ立場に立てば、この所論は、聊かなりとも道を行することを積集する事が、如何にその者に大きい結果をもたらすものであるか、といふ事に對する警告とも見得るのである。涓滴が積つて大河となり、塵ひちが積つて山となる如く、出家の姿に恥ぢる精神から、自然に惡業に遠ざかり善行を修する機會を得ることが重なれば、そこに「道を行する」ことの大成就が期待されるのである。理窟で進むものではなくて、人間全體の行爲に於て進むものである所に、此の世の妙味のある事が物語られてゐるやうに感じるのである。

(六) 外相背かざれば内證必ず熟す

又、かうした山林幽居の草庵生活が、自然に人心をして、道を行するたよりとなる事について「人の心は縁に引かれて移るものなれば、しづかならでは道は行じ難し」と言つて居る心持は、第百五十七段にも詳しく説かれてゐる。曰く

筆をとれば物書かれ、樂器をとれば音をたてんと思ふ。杯をとれば酒を思ひ、囊をとれば錢を思ふ。心は必ず事に觸れて來る。假にも不善のたはぶれをなすべからず。苟且に聖教の一句を見れば、何となく前後の文も見ゆ。卒爾にして多年の非を改むる事もあり。假りに今この文をひろげざらましかば、この事を知らんや。これ即ち觸るる所の益なり。心さ

らに起らずとも、佛前にありて數珠を取り經をとらば、怠るうちにも善業おのづから修せられ、散亂の心ながらも繩床に坐せば、おぼえずして禪定なるべし。事理もとより二つならず。外相もし背かざれば、内證かならず熟す。強ひて不信といふべからず。仰ぎてこれを尊むべし。

この眼目は「事理もとより二つならず。外相若し背かざれば、内證必ず熟す」といふ一句にある。即ち、事（身に行ふ事）と理（心に悟ること）とは、不二であつて、悟る事は實行する事であり、身に實踐する事が即ち悟りとなるものである事をのべ、事と理を各別の物と考へる事の誤謬である事を明かにし、外相（外に現はれる形態）に於て佛道に背馳する事がなければ、内證（心に於ける悟り）は必ず熟して來るものである事をのべる事が、中心である。事と理を別のものと考へる事は、佛道を外から眺めたり、頭で考へたりする者の陥り易い錯覺であり、その爲に「道心あらば住む所にしもよらじ、家にあり人に交はるとも、後世を願はむに、難かるべきかは」などといふ議論も生じるのであるが、佛敎では、理障事障といつて深くこれを戒めて居るのである。かやうに、外に現はれる現象と、内にこもる本體とが、同一不二である事を、身にしてみても切に感ずる時に、悟道を求める者が、其の形を整へ環境を先づ整理して、外相に於て先づ佛道に

背かないやうにと志すことは、當然の務めといふべきものであると思ふのである。それを兼好はむづかしい佛敎教理的な立場からではなくて、「心は必ず事に觸れて來る」といひ、最も卑近な我々の經驗を取り上げて、具體的な實例によつて納得させようとして居る。ここにも兼好の廣い人生智がうかがへると思ふ。賽を取れば擲（博奕の一種）をやり度く思ひ、かりそめながらも佛書を見れば、その前後の文章も眼に入り、時には長年の非を悟る事もあるといふ。これは外物に觸發されて我々の心が悲喜哀樂様々に動搖する事を考へて見ても、如何にもと思はれる處であつてそれを押し進めれば、佛への勤行に對しても、さして心は動かなくとも、勤行といふ外相を充實する事によつて、自然に精神が清淨にもなり、散亂心ながらも、坐禪の床に就くならば、その坐禪といふ行によつて、自然に澄心靜慮の念が萌して來るといふことにもなるのである。茲に私は修行者が先づ形式を整へ、外相を誤りなく整へようとする意義があることを感じる。「形式などはどうでも良い。内實さへしつかりして居ればそれで十分だ」などといふ議論が、相當に職者であるといはれる人々によつて唱へられる事があり、年齢の若い人々にさうした論の歡迎せられる事も多いが、「それはやはり頭で考へた理窟に過ぎないものである事が、はつきりと此の段などで示されてゐると思ふのである。

三 無常観

兼好は、以上見て来たやうに、佛道に入つて、生死一大事の因縁を究明し、悟りを得て後世を願ふといふ事を以て、人生の最も大切な事と考へて居る。これは彼が法師であり、佛教信者である爲に、教義的な立場からかやうな論をするのである。といふ風にも見られるであらうし、又、幾分はさうした事が、兼好の心にあつたであらう事も認めて良いと思ふ。それを認めるとしても、兼好の心にこれほどまでに強く根を張つてゐた佛教信念は、單に教義教相の上からばかり學び取つたものとは思はれない。彼の實際の生活感情が、それをしつかりと裏付けて居るものと思はざるを得ない強さを持つて居る。さうしたものが、果してどんな所に根ざして居るものであらうか。これは我々として一應考へて見なくてはならない所であらうと思ふ。

佛教の中心は悟りにあるが、その悟りへ人を導く入口ともいふべきものは、無常観である。無常といふことは、觀念でもなければ思想でもなくて、現實刻々の事實であり、それが同時に人間の生死の問題として我々に迫つて来るものであるだけに、我々を衝き動かす力は甚だ強烈なるものがある。しかも、これは、避ける事も遁れる事も出来ない運命的な事實である。それだけに、何とかこれに對應する心構への必要を我々に感じさせる。その心構へを樹立するものとして示されたものが佛教である。かやうに考へて良いであらう。

(一) 世間無常に對する積極的態度——物のあはれを知る——

佛教に入る人は、多くはこの無常に對する解釋を求め、死生に對する悟りを得る事を目的として入る。平安時代に於ては、無常を悲しみ、來世を願ひ、佛の救済によつて、後生を淨土に得ようと思つて入る者が多かつた。所謂「厭離穢土・欣求淨土」の思想である。しかし、次第に佛教の眞諦が世人に把握せられるに及んでは、單に此世の無常を悲觀する事は、殆んど意義の無い事であることが認識せられ、無常を積極的に肯定して、無常なるが故に人生の意義のある事を認めようとする傾向に進んで來た。これは非常に大きい思想的轉換と言ふべきものであつて、從來は悲觀の對象として取り上げられた無常を、人生肯定の資料とするものであるとも言ひ得る。兼好が、徒然草の第七段に、

あだし野の露消ゆる時なく、鳥部山の煙立ち去らでのみ住み果つる習ひならば、いかに物の



あはれもなからん。世は定めなきこそいみじけれ。と述べた逆説的な一段は、よく人々に引用せられる處であるが、これは正しく、右にのべた無常、といふものの積極的な意義に觸れた一面を示すものと言ひ得る。兼好は此處では「物のあはれ」を知らせるところの原動力として、無常をながめて居るのである。若しも此世が恒久不變のものであり、人間に老死といふものが無いとしたら、人の心に「物のあはれ」といふものは宿らないであらうといふのである。人生は短いとなげき、無常をかこつといふのも人間の情であるが、命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。蟬の夕を待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあつゝぞがし。つくづくと二年を暮らす程だにも、こよなうのどけしや。飽かず惜じと思はば、千年を過すとも、一夜の夢の心地せめ。とも言ひ得るのであつて、結局は心の持ち方一つであり、短いと思へば短く、長いものと観すれば長いものである、といふのが兼好の見方である。そして、かやうに「心一つ」で如何やうにも考へ得られるといふ事がのべられるといふのは、己の中に、無常を支配し得る所のもの、換言すれば、無常といふものに支配され壓迫されない所のものの存在する事を告げるものであると思ふ。これの存在に目がつく所に、中世佛教の面白さがあり、無常といふものを、積極的に意義づける所の根源があるものと考へて良いであらう。かくて、

住み果てぬ世に、醜き姿を待ちえて、何かはせん。命長ければ辱多し。長くとも四十に足らぬほどにて死なんこそ、自安かるべけれ。そのほど過ぎぬれば、容貌を取づる心もなく、人に出で交はらむ事を思ひ、夕の日に子孫を愛し、榮行く末までの命をあらまし、ひたすら世を食ふ心のみ深く、物のあはれも知らずなり行くなんあさましき。

といふ見方も生れて來るのである。長壽を願ふといふ事は、醜さの來るを待つ事であり、我身に恥辱を數多受ける事を望む事でもあるといふ。勿論これは半面の眞理であるに過ぎないが、かうした半面にも思ひ及び得るといふ事は、精神にそれだけの餘裕があり得て、無常に支配されない自由の主となり得てゐることを物語る。そして、更に老年に及んでは、「物のあはれ」をも忘れてひたすらに世を食ふ傾向に進む事をのべて、それは人生として、果して眞に希望すべき事であらうかといふ疑問を投げかけてゐるのである。

「物のあはれ」は普通は美的情趣の一つである如くにも見られてゐるが、それは實は深く人間の本質から發する感情であつて、最も深い人間的な本能であるといふものである。言はば「物のあはれ」を知るか知らなしかといふことは、人間と禽獸とを分つ一線であり、人と人非人とを

分つ一線であるとも言へると思ふ。さうしたものを忘失して、徒らに世を食るとか、子孫の榮え行く行末までも我身の生命の存續を希望するとかいふ事は、人間として生きる事とは言へなくて人非人として生きる事となるわけである。それは心ある人としては、決して望むべき事ではないであらう、といふのが兼好の考へである。

(二) 正しき生き方への誘導——佛道への誘引——

以上は無常といふものの肯定として、「物のあはれ」に觸れたものであるが、更に無常といふものの大きい肯定としては、それを生かす事によつて、人を佛の教に導き入れよといふ點があるとも言ひ得る。それは、世上の名利に狂奔する者に對して、その果敢なさを教へ、正しい人間の營みに立返らせる手段ともなる。第百六十六段に

人間の營みあへる業を見るに、春の日に雪佛を作りて、その爲に金銀珠玉の飾りを營み、堂塔を建てんとするに似たり。その構へを待ちて良く安置してんや。人の命ありと見る程も、下より消ゆる事、雪の如くなるうちに、營み待つ事甚だ多し。

と、世の無常を忘れた人間の營みを、雪達磨の爲に堂塔を建設しようとするに似てゐるといひ、

第七十四段に

蟻の如くに集りて、東西にいそぎ南北に走る。貴きあり賤しきあり、老いたるあり若きあり、行く所あり歸る家あり。夕に寢て朝に起く。營む所何事ぞや。生を食り利を求めてやむ時なし。身を養ひて何事をか待つ。期する所たゞ老と死とにあり。その來る事速やかにして、念々の間に留まらず。これを待つ間、何の樂しみかあらん。惑へる者はこれを怖れず、名利に溺れて先途の近きことを顧みねばなり。愚なる人は又これをかなしぶ、常住ならんことを思ひて、變化の理を知らねばなり。

と名利に溺れて、己が最期の近い事を知らぬ者の愚かしさや、徒らに無常を悲んでこれに對する心構への無い者についてのべてゐるが、それ等は結局、無常といふものに對する正しい認識を缺く處から生じる惑ひであるとしてゐるのである。従つて、人間としての正しい生き方は、常に世の無常といふ事を念頭に置き、その無常に對處する覺悟をはつきりと持つて、念々を惑ひなく生きる以外に方法はないといふことになる。第四十九段に

老來りて始めて道を行ぜんと待つ事なかれ。古き境多くはこれ少年の人なり。はからざるに病をうけて、忽ちに此世を去らむとする時にこそ、はじめて過ぎぬる方のあやまれる事は知

らるれ。あやまりといふは他の事にあらず。速やかにすべき事をゆるくし、ゆるくすべきことを急ぎ過ぎて過ぎにし事のくやしきなり。その時悔ゆとも甲斐あらんや。人はただ無常の身に迫りぬる事を、心にひしとかけて、つかの間も忘るまじきなり。さらば、などか此の世の濁りもろしく佛道を勤むる心もまめやかならざらむ。

と述べて居るのが、兼好の無常觀を生かして、積極的に人生に寄與せしめようとする意圖を吐露したものと云ひ得るであらう。

#### 四 佛道を修して獲得する所

(一) 生死の相に與らざる境地——人生の肯定と無礙の自在心——

兼好は無常觀を媒介として佛道を修する事を求めて居るが、佛道を修し得て何を獲得するかに關しては語る處は少い。來世の極樂往生を願ふやうな口吻は洩らして居ない所を見ると、彼の念願が欣求淨土にあつたとも思はれない。兼好は天台の教儀を學んだ僧であらうと言はれて居るが天台的な諸法實相觀をのべ立てた所もない。彼の所論には老莊的な匂ひの濃きものがあり、老莊思想は彼の時代に於ては、禪の流行と共に禪僧等に好まれたものであるが、彼の所説には禪に觸れたものもない。従つて兼好が佛道より獲來つたものは、所謂「生死の相にあづからざる」境涯への悟得であつたものと考えざるを得ない。それは、最も包容性に富んだ佛教受用の仕方であつて、死の問題によつて精神の感亂されないだけの平靜さを獲得し、死を見ること歸するが如き心境に到達して、その境地に於て、最も生き甲斐の感じられるやうな生き方をしようとしたものであるまいかと思はれる。従つて、人生の否定者ではなくて肯定者であり、あらゆる物事にその

存在理由を見出して、廣く且つ深い立場から、これを靜かに味はふことに喜びを見出した人間であつたやうに思はれる。

佛教が三世の因果説を説き、過去の世に於ける業因が報いて此の世に於ける結果となり、此世に於ける善惡の所行は、又やがて來世に於ける結果を生む原因となるものである、と説くのは、我々の心に一つの安神をあたへ、諸惡莫作・衆善奉行といふ方向に衆庶を導き、未來の世に希望をかけて死の恐怖を薄らがしめるといふ効果を生むものであるが、そして、それによつて精神的に救はれた人々も甚だ多いのであるが、そこには現實の世といふものの意義を、たゞ來世への手段として眺めるといふ風な傾向が無いとは言へない。現實の世を現實の世として肯定して、それに積極的な意義を見出すといふ方面に於ては、やゝ缺けるものがある。即ち現世を生かす佛教ではなくて、來世の爲死後の爲の佛教のやうな感がする。そこに不滿を感じて、現世を眞に生かす眞に意義あらしめる佛教たらしめ、我々の現實の生活の支柱となるやうな佛法と化せしめたのが、中世佛教の特色である。そこには多分の日本の特色が加味せられ、國民的佛教となり切つたものが感得せられる。我國の禪佛教には、この傾向が殊に強い。そしてそれ等が最も力強く支配した時代が、兼好の生きた時代であつたのである。

兼好の佛教受用の仕方、この時代的傾向と國民性的傾向とに副つたものと考へて良いであらう。その事は、鴨長明の方丈記と兼好の徒然草とを讀み比べて見ると、甚だ明瞭に感得し得られる。方丈記に見られる佛教的色彩が、著しく悲觀的であり、此の世を穢土と觀じ、來世の極樂を欣求する傾向が強いのに反して、徒然草に見られる佛教觀が、人間の現實生活の支柱として考へられ、生死に惑亂されないだけの精神的自由を目ざしてゐるものであり、個々の生活事實に對して、圓融無礙な自在性に富んだ處理に生きようとするものである事は、はつきりと看取せられる所である。

兼好は法師となり出家遁世の身となつて居るが、法師臭い所は殆んど見られないと言はれてゐる。これを目して、彼は生悟の僧に過ぎないとか、或は法師としての徹底さを缺いて居るとか、さうした批評も加へられてゐるやうであるが、私はさう思ひたくはない。即ち、兼好は佛教を以て自己の精神の糧とした人であつて、彼の人間性がそれによつて深められはしたが、佛法に囚はれないだけの自主性を確持して居た人であると思ふ。これは、佛教を以て人生の爲の佛教であるとする立場であり、小さく見れば、自己の精神安立の資として佛法を見る立場である。それに對して、所謂僧徒の中には、この人世を佛法の爲の人生であるかの如くに考へ、自己を佛法の爲に

存在する者の如くに信じて、所謂佛法唯一絶対の思想を振り廻はす者が多い。味噌の味噌臭きの甚しいものであり、一種の職業意識に溺れたものとも言ふべき者である。さうした嫌味を持たず臭氣をも帯びない所に、私は兼好が萬人に愛せられ好まれる所があるのだと思ふ。彼が法師臭くないといふ批評は、彼の缺點を指摘したものであると見るよりも、彼の長所を指示したものと見る方が、却つて妥當ではあるまいか。

(二) 兼好の尊敬する僧侶

——彼の佛教受用の性格の現はれとして——

兼好が徒然草の中で、敬意を以つて描き出して居る僧が、如何なる僧であるか、といふ事を調べて見る事は、彼の佛法受用の仕方がどんなものであつたかといふ事を知る上に、参考になるかと思ふ。その二三をあげると、第八十四段には

法顯三藏——人間味の豊かさ——

法顯三藏の天然てんぜんに渡りて、故郷の扇を見ては悲しび、病に臥しては漢かんの食しょくを願ひ給ひける事を聞きて、「さばかりの人の、無下むげにこそ心弱こころよわき氣色きしきを、人の國にて見え給ひけれ」と人の言

ひしに、弘融僧都の「優なほに情なさけありける三藏かな」と言ひたりしこそ、法師の様にもあらず、心にくく覺えしが。

といふ批評が見られる。これは兼好自身の下した批評ではないが、弘融僧都の批評に對して「法師臭くもなく、奥ゆかしい感じがした」と同感の意を表してゐるのであるから、兼好も同意見と考へて良いものと思ふ。これは、法顯ほどの求道心堅固な聖僧も、遠く故郷を離れた印度に於て故郷の扇を見ては涙を流し、病に臥しては、支那の食事を願つたといふ事に對して、それは人情の自然として、誠に尤もであるとし、強ひてさうした人情を押し殺さうともしないで、人目恥しいやうな風をも、純眞に卒直に、隠す所なく示したことに、法顯の純な人間味を發見して、これを「優にやさしき三藏かな」と禮讃して居るのである。法師の法師臭く振舞ふものの中には、「物のあはれ」を解する事もなく、無情な枯木の如き者も存在し、それを以て自ら到れりと誇りかに考へる傾向があるに對して、それは眞に願ふべき境地ではなくて、「物のあはれ」を知る事こそ、法師に於ても、奥ゆかしさを感じしめる種となるものであることを告げたものと思ふ。又、百六段に、高野の證空上人の無邪氣さを描いて

證空上人——純眞・無邪氣——

四 佛道を修して獲得する所

高野の證空上人、京へ上りけるに、細道にて馬に乗りたる女の行き合ひたりけるに、口引きける男あしく引きて、聖の馬を堀へ落してけり。聖、いと腹あしく咎めて、「こは希有の狼藉かな。四部の弟子はよな、比丘より比丘尼は劣り、比丘尼より優婆塞は劣り、優婆塞より優婆夷は劣れり。かくの如くの優婆夷などの身に、比丘を堀に蹴入れさする、未曾有の悪行なり」と言はれければ、口引きの男、「如何に仰せらるるやらん、えこそ聞き知らね」といふに、上人なほいきまきて、「何といふぞ。非修非學の男」と荒らかに言ひて、きはまりなき放言しつと思ひける氣色にて、馬引き返して遁げられにけり。尊かりける評論なるべし。と、滑稽たつぷりな描寫を試みてゐる。ここに描かれてゐるのは、高僧證空の無邪氣さである。在俗の女人（優婆夷）として、僧侶（比丘）を堀に落すやうな事は非禮の極であると怒り、佛語丸出しの咎めだてに、何を言はれてゐるかも分らず、「如何に仰せらるるやらん、えこそ聞き知らね」と茫然平然としてゐる口引きに對して、「何といふぞ非修非學の男」と罵り付けたことは、僧侶としてはあまりにも輕率だとの評もあらうが、そこに又天真なる無邪氣さも感じられる。その無邪氣さは、馬子に罵倒をあびせかけた瞬間に、「極りなき放言しつ」と、ハツと自分の行動の輕忽を恥ぢる心を生ぜしめ、その恥かしさに堪へられないで、馬首をめぐらして元來た道へ一目散

に遁げ出すといふ滑稽な場面を展開せしめた。まことに小兒の如き無邪氣さである。さうした點を兼好は同感し愉快に感じて、「尊かりける評論なるべし」と評してゐる。これも兼好が純真な人間味を愛し、それを失はないでゐる者に尊さを感じてゐるといふ性格を示したものと云ひ得るであらう。又、第三十九段に、法然上人の言葉を禮讀して

法然上人 — 念佛絶對の信念 —

或人法然上人に「念佛の時、睡りに犯されて行を怠り侍る事、如何にして此の障をやめ侍らん」と申しければ、「目の覺めたらん程念佛し給へ」と答へられたりける、いと尊かりけり。又「往生は、一定と思へば一定、不定と思へば不定なり」と言はれけり。これも尊し。また

「疑ひながらも念佛すれば往生す」ともいはれけり。是もまた尊し。と讚仰の意を表してゐる。この法然の言葉は、さすがに一世の高僧の言葉だけあつて、實に深い示唆を持つ言葉であり、兼好が「いと尊かりけり」、「これも尊し」、「これもまた尊し」と禮讀したのは、如何にも尤もである。法然上人は淨土宗の開祖であり、念佛する事によつて往生し得るものであるとの信仰を廣めて、多くの衆庶を救済された上人である。「念佛を申して居る中に、睡魔に犯されて念佛の途切れる事があつて困るが、どうしたらこれを防ぐ事が出来ませうか」と

いふ問者に對しては、普通の僧侶ならば「念佛に一心になつて居ない爲だ」とか「熱心が足りないからだ」といふやうな事も、言ひ兼ねまじい所である。しかし、上人は「目がさめてゐる間だけ念佛なさるが良し」と簡単な言葉でこれに答へた。これは、さうした質問をする人物が、念佛往生の事を信じ切つてゐる事への看破と、さうした質問を持ち出す純眞さを愛する心とに、裏づけられた答と見られる。無理に睡氣を押してまでも念佛するには及ばないし、念佛の回数が多寡が往生の確否を決定するものでもない事は、上人の良く知つて居られる所であつたらうと思ふが、それをかやうに、簡明に「生きた答」として答へるといふ事は、上人ほどの人でなくては出来ない事のやうに思はれる。第二の答は「念佛して、それで果して往生が出来るものであらうか」といふ如き質問者に對する答であらうと思はれる。上人は念佛する事によつて往生し得るものと確信してゐられる人であるが、それだけの信仰を得てゐない者では、幾分の疑ひを持たざるを得なかつたのである。念佛はたゞ阿彌陀佛の名を唱へるだけの易行門である。従來の華嚴や天台や眞言などのやうな、苦行修學を経た後に、悟りを得て菩提涅槃に入るといふ風な教義のものではない所に、一種の不安を人々は感じたものであらう。修學し苦行する代償として報はれるものが、悟りであり涅槃であり極樂往生である、といふ風な考へ方から見ると、念佛するといふだけでは

あまりに安易であつて、そんな生やさしい事で果して極樂往生といふやうな過分な結果が得られるであらうか、といふ風な疑問も生じて来るわけである。それに對する上人の返答は、極めて率直端々である。「往生といふ事は、必ず往生し得られるものだと思へば、必ず往生し得られるものであり、どうか疑問のものだと思ふ時には、往生し得るかどうだか不定である」といふのである。これは換言すると「信じ切る者には往生疑なし」といふ言葉であり「信絶對」といふ立場である。宗教に於ける最も至高なる要件が「信仰」にあると説く事は、古今東西の宗教を通じて共通のものであるが、「信絶對」を、かくも力強く斷言し得た上人の言葉には、磐石の如き重さがある。「これも尊し」と禮讀してゐる兼好の言葉に、我々も同感を感じざるを得ない。第三の「疑ひながらも念佛すれば往生す」といふ法然上人の答は、更に偉大であつて、ここには「念佛絶對」の信念がある。「信すれば往生し得る」といふだけでは、信じ切れない者は救はれない。多くの宗教が「信絶對」にとどまつて居る限り、その宗教は一切を救ふことは不可能である。然るに、法然上人は「信じ切る事が出来なくても、疑ひながらも、念佛をすれば救はれる」といふ斷言を下してゐるのである。これは、信不信を遙かに超えた「念佛絶對」の心境であつて、法然上人の偉大さは茲にあるといふも過言ではないであらう。「これも尊し」と、三度まで「尊し」との

べてゐる兼好には、全く法然上人に渴仰してゐる純な妻が見られる。第二の答の「不定と思へば不定なり」といふ答は、この第三の「念佛絶對」といふ答によつて、極めて簡明にその結末がつけられてゐる點も注目すべきであると思ふ。

私は會て、兼好のこの段を引いて、我々の「研究生生活」も全くこれに等しいものだ、私の學校の卒業生諸君に餞した事があつた。我々學徒の生活は研究三昧であるべき事は、何人も良く承知して居る事であり、又希望して止まない所である。しかし實際教職に就いて見ると、校務其他訓練教授等のために、研究に費し得る時間は極めて少い。疲労に負けて研究を怠る事がある。かやうな場合にどうすれば良いか、とはよく私に持掛けられる純真な相談である。その時「時間の餘裕のある限り研究してゐれば良い」と言ひ得たのも、兼好の徒然草に教へられた所であつた。又、研究題目を決定して研究に取りかかつて見たが、果してこの研究は大成し得られるものかどうかといふ事に不安を感じて、煩悶する學生に對しては「大成すると信じ切つてやつて行けば、きつと大成する。疑問だと疑つてゐては、大成するか否かも疑問になる」と言つて勵ました事も又、徒然草に導かれての言葉であつた。そして、更に「たとひ疑問に思ひながらでも、とにかく研究を持続し實踐して行くなら、その持續實踐は必ず研究そのものを大成せしめるものだ」と、

強く言ひ切り得たのも、やはり兼好を通じて見た法然上人の「念佛絶對觀」の賜物であつたのである。法然上人は念佛を中心として説かれたが、それは我々に取つては、あらゆる方面にわたつて、一生受用して盡きざる偉大な啓示教訓であると言ひ得られる。そして、この一つの話を傳へてゐるだけでも、徒然草の價値は偉大なりと言ふべきだと思ふのである。

盛親僧都 — 飄逸・ユーモア・人徳 —

以上は、世上に名の聞えてゐる高僧に關して、兼好が如何なる點に好意を持ち好感を有して居たか、といふ事を知るに足る好資料であるが、兼好が最も多くの筆を費して描き出して居る僧に眞乘院の盛親僧都がある。この盛親僧都の描寫は、其の奇行と物に拘らぬ磊落な性格を中心として、面白くをかしく描かれて居るが、其の筆致の底に流れ漂ふものは、兼好の同感的な禮讃意識である。兼好は、自己の庶幾する脱俗飄逸の一面が、この盛親僧都によつて見事に果されてゐる事に、一つの羨望をさへも感じてゐたやうに思はれる。即ち第六十段に

眞乘院に、盛親僧都とて、やんごとなき智者ありけり。芋頭といふものを好みて多く食ひけり。談義の座にても、大きな鉢にうづだかく盛りて、膝もとに置きつつ、食ひながら文をも讀みけり。患ふ事あるには、七日二七日など、療治とて籠り居て、思ふやうに良き芋頭を

四 佛道を修して獲得する所



えらびて、殊に多く食ひて、萬の病を癒しけり。人に食はする事なし。たゞ一人のみぞ食ひける。極めて貧しかりけるに、師匠死にさまに、錢二百貫と坊ひとつを譲りたりけるを、坊を百貫に賣りて、彼是三萬疋を芋頭の錢と定めて、京なる人に預け置きて、十貫づつ取寄せ、芋頭を乏しからず召しけるほどに、また他用に用ふる事なくて、その錢皆になりけり。「三百貫のものを貧しき身にまうけて、かく計らひける、まことに有り難き道心者なり」とぞ人申しける。

この僧都、ある法師を見て、「しろうるり」といふ名をつけたりけり。「とは何物ぞ」と人の問ひければ、「さる物を我も知らず。若し有らましかば、此の僧の顔に似てん」とぞ言ひける。

この僧都、みめよく力つよく大食にて、能書、學匠、辯説人にすぐれて、宗の法燈なれば、寺中にも重く思はれたりけれども、世を輕く思ひたる曲者にて、萬自由にして、大方人に隨ふといふ事なし。用仕して饗膳などにつく時も、皆人の前すゑわたすを待たず、我が前にすゑぬれば、やがてひとり打食ひて、歸りたければ、ひとりつい立ちて行きけり。時・非時も人に等しく定めて食はず。わが食ひたき時、夜中にも曉にも食ひて、睡たければ、晝もかけ

こもりて、いかなる大事あれども、人の言ふ事聞き入れず。目覺めぬれば、幾夜もいねず、心をすまして嘯き歩きなど、世の常ならぬさまなれども、人に厭はれず、萬ゆるされけり。

徳のいたれりけるにや。

と記して居るのである。

盛親僧都が、里芋の頭を好き、それを多く食つたとか、經典講義の場合にも、膝元にうづ高く盛つて、食ひながら經文の講義をしたとか、病氣の時には特に良い芋頭を選んで、したたか食べる事によつて、病氣を癒したとかいふ事は、謂はば食物に對する奇癖の一種と見るべきものであつて、それ自體に於ては、格別に笑ふべき事でもなければ又稱讚すべき事でもない。たゞ邊幅を飾らない無邪氣さともいふべきものが感じられるのである。宗の法燈とも重んぜられ、能書家であり、學者であり、辯説もすぐれた人物であつて、重々しく振舞ひ取りすまして高僧めかしてゐても、誰も不審に感じないほどの資格を持ちながら、好きな芋頭に徹底的な食慾ぶりを發揮して世間體や見えに無頓着である點に、我々は好感を感じ、その無邪氣さを愛するのみである。それが、世人から「誠に有り難き道心者なり」と禮讚されるに到つたのは、彼が、極めて貧しい身でありながら、金錢財寶に對する慾望をも持たず、師匠から譲り與へられた二百貫の錢と寺坊一棟

をも、何等の執着なく手離して、それを芋頭の代價として、悉く食つてしまつたといふ恬淡ぶり  
に原因がある。貧しい者が思ひがけなく有福になると、そこに物慾が猛然と起り、所謂「金持ち  
ほど吝嗇になる」といふ風になり易い。貧しさに懲りてゐる故である。さうした世間の人々から  
見れば、この僧都の奇行は、有難き道心者と見えたであらう。しかし我々としては、その點はそ  
れほどの讃歎を送る必要もないかと思ふのである。兼好も、その點に關しては「世人が評判した  
と、世評を單純に報告してゐるだけである。

次に「白うるり」といふあだ名の話が出て来る。これは甚だ我々を面白がらせる話である。盛  
親僧都が或僧を見て、白うるりといふあだ名をつけた。人がそれに對して「白うるり」とは一體  
どんなものか、と質問した處が「自分はさうした物は知らないが、萬一有つたとしたら、彼の僧  
の顔に似たものであらう」と答へたといふのである。これは考へやうによつては、隨分と人を馬  
鹿にした話であると批評されるかも知れないが、この僧都が、案外にユーモリストであつた點に  
我々は親しみを感ぜざるを得ないのである。ユーモアは人生を明るくする。そして、それは世の  
中の物のあはれを知り、如何ともせられぬ世上の運命といふものに對する諦觀をも持ち、しかも  
さうしたものに打ちひしがれないだけの心の餘裕を持つ者でなくては、ユーモアの味はひを出し

得るものではないのである。芋頭の話だけでは、無邪氣で恬淡な奇行家としての盛親僧都だけし  
か感じられないが、この白うるりの話に到つて、我々はこの僧都の人間味にふれた感じがするの  
である。

兼好は更に筆をついで、この僧都が、學者としても書家としても又辯説家としても傑出し、一  
宗の法燈と稱讚されるだけの實力の保有者であり、仁和寺全體からも（眞乘院は仁和寺の一院で  
ある）重んぜられてゐる人間でありながら「世を軽く思ひたる曲者くまものにて、よろづ自由にして、大  
方人に隨ふといふこと無き」點について描いてゐる。例へば法要などに招請せられて饗膳につく  
際にも、一同の前へ御膳が据ゑ渡されるをも待たないで、自分の前に据ゑられれば早速に箸をと  
るとか、歸り度くなればひとりさつさと歸つて行くとか、平常の食事も、他人のやうに時を定め  
て食べるといふ事をしないで、食ひ度くなれば夜半でも曉でも食べるとか、睡眠も、睡くなれば  
夜晝の區別もなく何時でも勝手に眠るとか、さうした行跡は、言はば一種の放埒であり、我が儘  
氣儘な振舞ひであつて、常人ならば當然に批難せられるやり方である。然るに盛親僧都に於ては  
彼の芋頭好きと同じく、一つの無邪氣な奇行として、世人同僚からも厭はれず、それが默許され  
て行つたといふのは、何に因るものか。兼好は此の段の冒頭に僧都を評して「やんごとなき智者」

であると言ひ、次に、「宗の法燈とも稱すべき人物であつて、寺中にも重く思はれ」て居たと述べ、最後には「徳のいたれりけるにや」と評してゐる。この三つの評語を通じて、この僧都が群を抜いた學僧であり、それと同時に其の學に誇らない人物であり、又學ばかりでなく、金錢財寶に對しても世人の毀譽に對しても、聊かも執着心を持たない人物である事が知られ、それ等が結局僧都の「人徳」を生み出したものである事が、我々に示されてゐると思ふのである。さうした「人徳」が、更に親しみあるものとなり愛嬌あるものとなつて「大徳は愚に似たり」といふべき相貌を示すものが、この僧都の「物に拘らぬ奇行」であると考へられる。僧都の奇癖奇行は、僧都をして僧都の智者的な偉さを割引せしめ、平凡人に近い感じを起させる點に於ては、一つの弱點のやうであるが、弱點を持つといふ事や、その弱點を臆面もなくさらけ出すといふ事は、偉い人物であればある程、それに対する人々に親しさを感じさせるものである。これは不思議と言へば言へる現象であるが、隙のない人は他人から恐れられ、隙だらけの人間が他人から可愛がられるといふのが、世間心理である。しかもこの僧都には、一脈のユーモアがある。さうした點が、世人に許され厭はれぬ原因ともなつてゐると思はれる。兼好がこの僧都に對して好感を持つて、多大の筆を費して描いてゐるのは、彼が法師としてあらまほしき一つの典型を、この僧都に於て見

出してゐるのであらうと思はれる。

(三) 一言芳談への同感の側面

——消極的態度・無所有の禮讚・所欲の

離脱・所憑の離脱・清閑の境涯——

兼好が、佛教受用によつて、何を求めようとして居たか、又、如何なる僧侶に好感を持つてゐたかは、大凡以上述べた所から想像せられると思ふが、それ等を最も簡明な形で、先人の言葉を引いて述べてゐるのは、第九十八段の一言芳談からの引用である。

尊きひじりの言ひ置きける事を書きつけて、一言芳談とかや名付けたる草子を見侍りしに、心にあひて覺えし事ども、

一、しやせまし、せずやあらましと思ふ事は、大やうは、爲ぬはよきなり。

一、後世を思はん者は、糞汰瓶一つも持つまじきことなり。持經・本尊にいたるまで、よき物を持つ、よしなき事なり。

一、遁世者は、なきに事かけぬやうをはからひて過ぐる、最上のやうにてあるなり。

四 佛道を修して獲得する所

一、上臈は下臈になり、智者は愚者になり、徳人は貧になり、能ある人は無能になるべきなり。

一、佛道を願ふといふは、別の事なし。暇ある身になりて、世の事心につけぬを、第一の道とす。

といふのがそれである。これは、兼好自身が「心に合ひて覚えし」と言つて、如何にも同感したので記憶してゐる由を述べて居るから、彼自身も言ひ度い所であつたと考へて良いものである。

先づ第一の「しやせまし、せずやあらしと思ふことは、大やうはせぬはよきなり」は、明禪法師の言つた言葉であるが、爲さずも苦しからぬ事、是非しなくてはならない事でもない事は、大體から見ても、爲ない方がよいと言ふのであつて、何れかと言へば、物事に對して消極的な態度を執る方が、無難であるといふ意である。爲なくても良い事に手出しをして、種々と心を悩まし煩累を重ねる事は、世上に多い例であるが、それは佛道を願ふ者にとつては、一つの障害となるが故である。第二の「後世を思はん者は、糞汰瓶（糞味増壺）一つも持つまじき事なり」云々は俊乗房の言であるが、來世往生を願ふ佛道者は、全くの無所有の身として有るべき事を告げても

のである。所有は煩惱の起りであり、執着の原因である點への戒めと見て良いであらう。持經や本尊は、佛道者として最もあがめ尊ぶものであるが、それすらも立派なものを持つといふ事は、無益であるといふ。これも立派な經卷や本尊でなくとも、信仰上何等事缺けぬ以上、良き物を持つ必要はない筈であり、良き物を求め持つ事は、やはり所有慾の一つの發現として斥けたものであつて、解脱上人の言葉である。第三の「遁世者は、無きに事缺けぬやうをはからひて過る、最上のやうにてあるなり」は、聖光上人の言である。物が無くても事が缺けないといふ風に、平素から心身を馴らして置くといふ事は、能ふ限り生活を簡素にする事である。生活の簡素化は、求める心を封じ去つて、一物をも求めない心境に立到つて、はじめて完全に具現せられる。求めて得られぬ時に、事缺くる感が生じる故である。所欲の心を離脱する事が、世をのがれたる者として、最上の事のやうであるとは、さすがに言ひ得て核心をついた語であると思ふ。第四の「上臈は下臈になり、智者は愚者になり、徳人は貧人になり、能ある人は無能になるべきなり」といふのは、松蔭顯性房の言である。その心持は、上臈・智者・富者・有能者が悪いといふのではないが、さうした人は、その臈や智や富や能を誇り憑む傾向に流れ易く、又、それ等に執着する傾向になり易い事に對しての警戒と見て良いであらう。「無きに事缺けぬやうをはからふ」は、求め

る心を去る意であるに對し、これは所有するものをも放下せよとの意である。無一物・無所有といふのは、財物に關しての戒めばかりではなくて、この言をなした顯性房に於ては、物心兩面にわたる心得として考へられてゐる姿を見る。捨離の困難さより見れば、物の方面よりも、心の方面が更に困難であるが、そこまで到らねば、佛者としては満足とは言へないといふのである。第五の「佛道を願ふといふは、別の事なし。暇ある身になりて、世の事を心にかけてぬを第一の道とす」といふ行仙房の言は、從來見來つた兼好の意見と、全く符節を合した如き意見である。「暇ある身」になる爲には、世上との交際を斷つて、閑寂な境に隱栖するのが最も良策であり、「世の事を心にかけてぬ」は、出家以後の出家——即ち僧の身となつて後に、更に精神的に悟り得て、眞の無所有の境地に入り、無所欲の境地に入る事——を遂げる事である。何程墨染の衣に身をやつし、山林に幽居しても、心の中に浮世が存在するやうでは、それは決して佛道を願ふものとは言へないからである。僧侶が榮達を望んだり、權門に出入して世の譽れや財を願ふなどといふのは、俗よりも尙一層に俗なるものであることは、あまりにも明かである。先づ身邊より俗を清め去り、最も手近な所から得道への第一歩をふみ出す爲には、「暇ある身」となつて、「世の事を心にかけてぬ」以外には良策は無い。しかも、その事だけでも成じ得るならば、それは感心すべく尊ぶべき法師と稱して良いであらう。

## (四) 身と心との清閑

—諸緣放下と圓融無礙の自在—

以上一言芳談の引用を通じて、兼好の庶幾してゐる所をうかがつたのであるが、これ等の思想は又、七十五段にも、次の如くに述べられてゐる。

つれづれ佗ぶる人は、如何なる心ならん。紛るるかた無く、たゞひとりあるのみこそ良かれ。

世に従へば、心、外の塵にうばはれて惑ひやすく、人に交はれば、言葉、よその聞に隨ひてさながら心にあらず。人に戯れ、物に争ひ、一度は恨み、一度は喜ぶ。その事定まれる事なし。分別みだりに起りて、得失やむ時なし。惑の上に醉へり。醉の中に夢をなす。走りていそがはしく、呆れて忘れたる事、人皆かくの如し。いまだ眞の道を知らずとも、縁をはなれて身を閑かにし、事にあづからずして心を安くせんこそ、暫く樂しぶとも言ひつべけれ。「生活・人事・技能・學問等の諸縁をやめよ」とこそ、

摩訶止觀にも侍れ。

此の段は、「つれづれ」即ち、心身清閑の境涯を禮讚し、世上に「つれづれ」を、退屈なわびしいものと考へる者のある事に對して、それは一體如何なる心持であるのであらうか、と疑問を提出して居るのであるが、その「つれづれ」なる境涯は、佛道を願ふ上に於て、一言芳談に「暇ある身になりて、世の事を心にかけぬを第一とす」と説いてゐる行仙房の所論に、全く合致したものと云ひ得る。

世に従ふ時には、其の心は世俗の雜事に奪はれて、様々の惑ひに陥り易く、他人と交際する時には、相手の氣持ちへの氣兼ねもあつて、話す言葉さへも、我が思ふままに言ひ出す事は出来ない。心と言葉とが二重につかはれねばならないといふ氣苦勞がある。そして、或は戯れ、或は争ひ、或は恨み、或は喜びなど、様々な心の動搖を重ね、分別心を起し得失を考へなどして、心の休まる暇もない。東奔西走して多忙であるかと思へば、又、自己の本心を忘れ去つて、その自覺さへもないといふ風な有様である。畢竟これ等は「惑の上に酔へり、酔の中に夢をなす」とも評すべきものであつて、決して「心ある人」の望むべく處すべき境涯ではない、といふ。ここに於て、世に従ひ人に交る事が、如何に我々の心を錯亂せしめ昏迷に陥らしめるものであるかを、明

かに告げてゐる。そこで、當然希求せられるべきものは、清にして閑なる境である。清を得て俗事を離れ、閑を得て惑心から遠ざかる事は、心を澄まし道を思ふ上に於て、絶対に必要であり、そこに眞の楽しみといふものも見出されるわけである。兼好が最後に、天台智者大師の摩訶止觀を引用して「生活・人事・技能・學問等の諸縁をやめよ」といふ有名な語を以て此の段を結んでゐるのも、畢竟は、彼の念願が、外物に惑亂されない澄心清閑にある事を物語るものであると思はれる。

以上眺めて來た所によつて、兼好が人間として、最も好ましい事として望んでゐる事は、清閑で物にわづらはされぬ境涯の如くである。さうした境涯に入る事は、何の爲であるかといへば、佛道を修する事にあるのであるが、佛道を修して何をしようとしてゐるのかといへば、その目的は、心に眞の自由——いはば圓融無礙な大自在ともいふべきもの——を得ようと志してゐるものと考へられる。然るに、この圓融無礙な大自在などといふものは、心が何かに束縛されたり拘泥したりしてゐては、到底得られるものではない。而して、心が何かに拘泥したり束縛されたりするといふ事は、その物に對して欲望を感じたり執着を持つたりする事が原因になつて起るもので

ある。若し欲もなく執着もなければ、心はそれに對して動く筈はなく、あたかも路傍の石を見るに等しいであらう。しかし、さうした無執着無欲の心境には、なかなか容易に入り得るものではない。それは漸を追うて求めねばならない。先づ己が身邊から、さうした執着や欲望を誘ふやうなものを拂ひ去ることが第一歩である。その爲には、山林草庵等の世外に我が身を退けること、暇のある身となり得て俗界から離脱する事が先づ求められ、次では心の中に於ても、世上の事を心にかける必要のない心境の静かさが求めらるべきであると思ふ。これは、甚だ消極的であり、隱遁逃避的であるが、實際に於ては、佛道を修する事の根柢となり地盤となるものであつて、この消極性は、偉大なる自在の獲得といふ積極性に、深いつながりを持つものである。この地盤にまで到らなければ、何程僧侶の姿となつても、心の俗を脱却する事は不可能であると思ふ。

## 五 老莊的人生觀の側面

兼好が、何れかといへば、消極的な生活態度を取り、それによつて外物に煩はされる事と避け極力精神の清澄閑靜な事を希つたことは、主として佛教の影響に因るものではあるが、それを傍から支持したかと思はれるのは、老莊の思想である。老莊思想は、支那の亂世に發達したものであり、亂世の煩累に堪へられなくなつた人心によるこび迎へられたものであるだけに、處世の要を、無欲無爲にありとし、自然を尊び人爲を退け、消極隱遁を以て明哲保身の道と考へたものである。儒教が修身齊家治國平天下を以て目的とし、積極的に社會の動亂を鎮めようとする志向するに對して、正反對の立場に立つたものである。兼好の居た時代は、我國内は亂世が將に起らうとする時代であつたから、武士の如きものを除いては、人々はその暗澹に堪へられない状態であつた。従つて、教養に富み心ある人々は、何れも多少は老莊的な氣持に同感を感じてゐたやうである。兼好の徒然草の中にも、彼が愛讀書として「老子のことは、南華の篇」を擧げてゐる條があり、老莊の思想が力強く強調せられてゐる條々が見られるのである。

(一) 眞人は智無く徳無く功無く名無し

第三十八段に於て、世上の名利に役せられる事の愚かさを述べた條の終に、しひて智を求め賢を願ふ人の爲にいはば、智慧出でては偽あり。才能は煩惱の増長せるなり。傳へて聞き學びて知るは、眞の智にあらず。いかなるをか智といふべき。不可は一條なり。いかなるをか善といふ。まことの人は、智もなく、徳もなく、功もなく、名もなし。誰か知り誰か傳へん。これ徳をかくし愚を守るにはあらず。もとより賢愚得失のさかひに居らざればなり。

とあるものなどは、その代表的なものであらう。これは、智を求め賢を願ふ人に對して、その非をあげたものであるが、儒教などに於てならば、智を求め賢を願ふ事は、決して非とせない所であり、又、實社會に於ても、これは稱讃すべき事とせられる所のものである。然るに、兼好は「智慧出ては偽あり。才能は煩惱の増長せるものなり」と述べてゐる。これは、老子の「大道廢れて仁義あり。智慧出でて大偽あり」といふ考へ方を受けついたのであつて、此の世に偽りといふものが生じるのは、なまじひに智慧がある爲であつて、全然智慧分別を持たない嬰兒の如きもの

には偽りといふものはない。さすれば、智慧を求める事は、偽りを生む結果を求めることであるではないかとの意である。又、才能を得んが爲には、それを得るまでの煩瑣な勞苦を重ねなければならぬばかりでなく、才能を得たいといふ望みそのものも、煩惱の一種と言ふべく、その煩惱が増長して才能が得られるとなれば、才能なるものも、さして希求すべきものではないではないか、と斷じてゐるのである。

次で兼好は、「傳へて聞き、學びて知る」ところの世間的なる智に對して、眞智とも稱すべきものの存在を告げる。その眞智とは、「不可は一條」なる事に洞徹する明智である。即ち、善も惡も一如であり、生も死も一如であり、彼も是も一如であり、賢も愚も一如である事を悟り知る明智である。物事を相對的に見ないで、絶對の立場に於て、それ等がすべて不二であり一如である事を悟り知る叡智であるといふ。従つて眞智より見れば、善と言はれるものも善ではなくなり、惡と言はれるものも惡ではなくなり、すべての相對的な區別は消失してしまふわけである。たゞあるものは、自然であり變化であるのみであつて、そこに善不善を考へるなどといふ事は、さかしらな小智の小細工に過ぎないといふのである。これは、莊子の齊物論に「方に可、方に不可。方に不可、方に可。因て是、因て非。因て非、因て是。是を以て聖人は、由らずして、これを天



に照らす」とある條に従つた兼好の考へ方である。

第三に兼好は「まことの人」なるものを説く。これも莊子に、神人又は至人又は聖人と稱する人を意味するものであつて、さうした眞人は、「智もなく、徳もなく、功もなく、名もなき」人であるといふ。智・徳・功・名等は、儒教的立場では尊び重んぜられるものであり、實世間に於ても人々の望む所のものであるが、さうした相對的なものをはるかに超越して、只管に無爲に還り自然に歸り無欲に歸つた人間、言はば消極の極地にまで至り得た人間、それが眞人であるといふのである。これも莊子の逍遙遊に、「至人は己なし。神人は功なし。聖人は名なし」とある思想を、その根柢としてゐるのである。

かやうに、老莊思想の立場に立つ時は、萬事が甚だ消極的であり否定的であつて、一見すると、すべての文化的な意識や道徳的な意識を、悉く抹殺してしまふものの如くにも見られる。そして確かに支那に於ては、さうした考へ方として生きて來たものであつたが、我が國に於ては、その否定的消極的な方面を、主として世俗的な名利の欲望を脱離する手段として採り入れてゐる傾向がある。明哲保身の方法として、参考に供するといふ傾向がある。兼好に於て見ても、彼の佛教觀と老莊思想とは、兼好の心に於ては、十分な融化状態にあり、共に相挾けて、清閑自然の生

活に入る事に對する主張を裏づけてゐるのを見るのである。その事は、「これ徳をかくし、愚を守るにはあらず。もとより賢愚得失のさかひに居らざればなり」とのべて、賢愚得失といふ如き世俗的な境地を、清らかに離脱してゐる點に、眞人なるものの面目を見てゐる事からも察せられるのである。

(二) 大欲は無欲に似たり

かやうな消息は、二百七段に、財を求むる者が、たゞ財の蓄積を樂しむ如き生活信條を述べた事に對して、兼好がこれを批判して、  
抑々人は、所願を成ぜんが爲に財を求む。錢を財とする事は、願を叶ふるが故なり。所願あれども叶へず、錢あれども用ひざらんは、全く貧者と同じ。何をか樂しむとせん。この捉は、たゞ人間の望を斷ちて、貧を憂ふべからずときこえたり。欲を成じて樂しむとせんよりは、しかし、財無からんには。癩疽を病む者、水に洗ひて樂しむとせんよりは、病まざらんには。若かじ。ここに至りては、貧富分く所なし。究竟は理即に等し。大欲は無欲に似たり。と言つてゐる條にも見られる。財を集めても、これを費消しないのでは、財の無い貧者と異なる

ところが無く、何の楽しみも無い筈である。従つて、さうした考へ方は、結局する所、「人間は望みといふものを断念して、貧を憂ふる事を止めよ」といふに等しいものであると言ひ、物欲を成じて財を集めなどするよりも、むしろはじめから財を持たないで、無欲恬淡な平靜心でゐる方が遙かにすぐれてゐると判定してゐるのである。無欲は結局、貧をも憂へず富をも羨やまないといふ偉大なる心の安寧をもたらすものであるから、或る面から言へば、偉大なる欲とも言へる。消極の究極は偉大なる積極へ連なるものである、との心である。これは又、佛敎的に言へば「究竟は理即到等し」といふのと相通する。究竟とは妙覺を得て佛の位にまで到り得た最上者をいひ、理即到とは佛法といふ名をさへも知らない凡夫をいふ語であるから、佛も凡夫も全く同じであるとの意である。金銀財寶を積んで巨萬の富を成就し得たものを佛に喩へるならば、全く無一物の貧乏者は理即到に譬へられる。即ち、大富豪も貧乏人も全く同一であるとの見方であつて、消極の究極は偉大なる積極であるといふ心持である。

(三) その物につき、その物を費し害ふ物

——君子の仁義・僧の法——

徒然草の第九十七段には、次のやうな警句が記されてゐる。一、  
 その物につき、その物を費し害ふ物、數を知らずあり。六身に鼠あり。家に鼠あり。國に賊あり。小人に財あり。君子に仁義あり。僧に法あり。我々の常識と少しもことにも私は老莊的な物の考へ方を見るのである。鼠・鼠・賊・財までは、我々の常識と少しも食ひ違ふ所はないし、又、老莊的でもないが、君子に於ける仁義や、僧に於ける佛法といふものをも、鼠や鼠と同様に見ようとする所は、たしかに老莊的である。仁義は儒敎道德の根本をなすものであり、君子と言はれる程の人は、自らこれを實踐すると共に、これを社會國家に廣めて、以て世を治めようとするものである。しかし、仁義道德を世に廣め行ふ事は、實に困難な大事業であつて、孔子の如き人でさへも、非常な艱苦に遭逢し、絶望的な歎聲をさへ發してゐるのである。さうした觀點から見れば、「君子を苦痛に陥らしめその身を害はしめるものは仁義である」といふ事も言へるわけである。明哲保身を眼目とする老莊の消極思想より見れば、左様な苦痛を冒してまでも仁義道德を廣める必要はない事であり、且つ、無爲自然の大道を唱へる老莊に於ては、仁義道德などといふものは、この大道が廢れた結果、小さかしの人間の唱へ出した人爲的なものに過ぎないとも見てゐるのであるから、鼠や鼠と同様に「その身につき、その身を費し害ふ物」

と見るのも、さして奇異な考へ方ではないのである。この事は、僧に於ける佛法に於ても同様であつて、法の爲に身を殺すとか、佛法流布の爲に艱難辛苦をするとかは、僧たる者に取つては或は本懐であるかも知れないが、老莊的な立場より見れば、それも「その身につきて、その物を費し害ふもの」と言ふ事が出来るといふのである。

かやうな老莊的な考へ方が、兼好自身に於て、佛法と融合し、破綻を見せないでゐるといふのは、兼好自身に於ても、佛法は自らを止観禪定の安らかさに置き、精神上の眞の自由に遊ぶためのもものと考へて居り、他に働きかけるとか他を救済するとかいふ風な、他人相手の流布宣布に對しては、殆ど關心を持つて居ない爲であると思ふのである。

(四) 寛容と無抵抗

自らの身と心とを、平靜清閑の境に置き、それによつて、外界の雜事から煩ひを避ける事を望んだ兼好が、處世上に於て求めた心境が、他と軋り合ひ争ひ合ふ如き事を極度に避ける、といふ點にあつたであらう事は、容易に想像し得る所である。寛大で無抵抗的なことは、兼好の欲する所であり、それは又、老莊的な處世の姿である。第二百十一段に

左右廣ければさはらず、前後遠ければ塞がらず。狭き時はひしげ砕く。心を用ひる事少しきにして酷しき時は、物に逆ひ争ひて傷る。寛くして柔らかなる時は、一毛も損せず。人は天地の靈なり。天地は限る所なし。人の性何ぞ異ならん。寛大にして窮らざる時は、喜怒これにさはらずして、物のためにわづらはず。

と述べて居るのは、その考へ方に、老莊的な匂ひが十分に盛られてゐるのを感じる。心を用ひる事が、廣く行き渉らずして、或る局面に拘泥したり、主義を通さうとしたりする時は、必ず他と衝突して争ひを生じ、その結果は自他ともにその身をやぶるに至る。それに反して、寛大であり柔和であり、廣く心の行きわたる者に於ては、他と衝突する事もなく、一毛を損する事もないのである。ここに無抵抗の偉大なる強みがある。その強みは、畢竟人間が天地の心を我が心とすることから生れる。天地には極限がない。何物をも包容し、一物をも拒否しない。自然にあるがままにあらしめて、毫もこれに逆ふものではない。さうした天地自然の心を我が心に生かし、自然に任せて人爲を退けるといふ心は、これ即ち老莊の理想とする所である。兼好の處世觀には、たしかにこの理想が生きてゐるのである。前にも引用した一言芳談中の「上藤は下藤になり、智者は愚者になり、徳人は貧になり、能ある人は無能になるべきなり」といふ條にも、やはり老莊的

なる色彩がある。これは、佛敎的に言へば、無所有・無所得への勸奨であり、執着を脱離せよとの教である。と見られるが、老莊的な立場に於て見ると、「自己に何か頼むものを有する事は、他に對して争ふもととなり、その結果我が身を破ることとなる」といふ考へ方となるのである。智者が智を頼む事が、その智によつて愚者に勝ると考へたり、徳人(富者)が、その財を頼む事によつて、貧者以上の利得を食らうとしたりするやうであつては、それは却つて争ひのもととなるものであり、智者は智に倒れ、富者は富の爲に身を害せられる恐れがある。さうした危惧を去つて、自然のままに作爲を加へない平靜な生活を送らうとするならば、頼むものを持たないのに越した事はない。あたかも、財寶を所有するが故に盜賊が恐しいのと同じであつて、無一物であれば盜まれやうはなく、何程盜賊が横行しよう、平然としてゐることが出来るといふに等しい。消極の強さである。

### 六 道及び道の人

兼好が徒然草の中に於て、尊ぶべきものとして述べて居る中に、「道」・「道の人」などといふものがある。この「道」といふ考へ方は、我が國の中世時代に發達したものであつて、我が國の文化の傳統を正しく維持して行く上からも、又、それを高めて行く上からも、大きい寄與をなしたものであり、他の一面に於ては、人間の人格修養上に於ても、實に見事な貢獻をなしたものであつた。

「道」といふものは、あらゆる専門の文化技藝にわたつて居る。例へば、歌道・連歌道・文章道・茶道・能樂道・花道等の、文化藝術の方面に於ても、算道・醫道・陰陽道・有識道等の學術的方面に於ても、又、劍道・柔道・弓道等の武藝的方面に於ても、それぞれに専門の學術なり技藝なりを修める事は、皆、「道を行する事」として考へられ、尊重せられて居たのである。術や藝としてこれ等を眺めないで、「道」として尊ぶ所に、中世的精神のすぐれた發現が見られるのである。それには、その道の傳統を正しく維持して、誤りなく次代に傳へねば、先人に對して申譯が

立たないといふ道徳感があり、受け傳へたものを更に練磨研精して更により良き術藝たらしめ、聊かでも進歩したもものとして傳へねばならないといふ責任感が存し、自己のたづさはる専門の道を、精進努力の限りを盡して學習練習することによつて、自己の精神修養人格陶冶に資すべきものであるといふ實踐倫理觀が附隨してゐる。即ち、「道」と稱せられるものは、その根柢に大きい道義意識を持つものである。そして、その道義感とは、各自が「誠」を盡して事に當るといふ最も端的な行に連なるものである。そして、「道の人」と言はれる者に於ては、己が誠實の限りを盡す事に於て、天地神明の誠に通じ得るものであるといふ、固い信仰の念を持つて居たのである。「道」はその點で、「道の人」とつては、宗教的なるものであつたと言ひ得る。かやうに、宗教と道徳と傳統的術藝の習道とが、一元的に融け合つて、白熱的な光芒を放つものが、「道」であつたのである。

(一) 道を知れる者の尊重

徒然草の第五十一段には、  
龜山殿の御池に、大堰川の水をまかせられんとて、大堰の土民に仰せて、水車を作らせられ

けり。多くの錢をたまひて、數日に營み出してかけたりけるに、大方廻らざりければ、とかく直しけれど、終に廻らで、徒に立てりけり。さて、宇治の里人を召して、こしらへさせられければ、やすらかに結ひて参らせたりけるが、思ふやうに廻りて、水を汲み入るる事めたかりけり。萬にその道を知れるものは、やんごとなきものなり。といふ話が記されてゐる。宇治の里人は、宇治川を利用して水車を廻らす事に慣れて居り、その水車の作り方や仕掛け方に關しても、十分な習熟を積んでゐる者であるから、極めて容易に大堰川にも水車を仕掛け得たのである。これに反して、大堰の土民は水車に關しての經驗も乏しく、その仕掛けについても無智であつた爲に、多くの費用と努力を費しながら、遂に役立つものを作り得ないでしまつたのである。この二つの例をあげて、「萬にその道を知れる者は、やんごとなきものなり」と言つて居る兼好は、専門家といふものを尊重すべき事を、しみじみと感して居たに相違ないと思ふ。又、百十四段には

今出川の大堰、嵯峨へおはしけるに、有栖川のわたりに、水の流れたる所にて、齋王丸御牛を追ひたりければ、足振の水、前板までさゝとかかりけるを、爲則御車の後に候ひけるが、希有の寛かな、かかる所にて御牛をば追ふものか」と言ひたりければ、大殿御氣色あしくな

りて、「おのれ車やらんこと、齋王丸に勝りてえ知らじ。希有の男なり」とて、御車に頭をうちあてられけり。この高名の齋王丸は太秦殿の男、料の御牛飼ぞかし。この太秦殿に侍りける女房の名ども、一人は膝幸、一人は特種、一人は胞腹、一人は乙牛とつけられたりけり。といふ面白い話が記されてゐる。今出川の大殿(菊亭大臣兼季公)が、従者の爲則を叱りつけて、御車に頭を打あてられたといふのは、爲則が自分の無智な事をも省みないで、高名な牛飼童に向つて、生意氣に叱りつけた事に對する叱責であつたのである。勿論、爲則は常識的な判断から、「水の流れてゐる所などで牛を追つ立てるといふやうな、亂暴な追ひ方をするものだから、足掻の水が前板までかかるといふやうな事になるのだ」と考へ、それで、「けしからぬ牛飼童だ。こんな所で牛を追ふといふ法があるものか」と叱つたのであるが、情ないかな、それは素人常識に過ぎないものであつた。それに對する大殿の叱責は、「牛の追ひ方に於て、汝は齋王丸に勝つた智慧が有り得るか。けしからぬ男め」といふ意であつて、素人のくせに、専門家に對して叱責がましい事を言つた非禮に對する怒りであつたのである。牛追ひの術に於ては、齋王丸は専門家であり、「道の人」である。彼は太秦殿に仕へた牛飼童であり、その方面での高名な者であり、料の御牛飼(天皇の御召車を引く牛を飼ひ訓練する者)をも奉仕したほどの、その道の達者であつたのである。

又、最後に、太秦殿(藤原信清)は、まことに牛好きな方であつて、召使の女房の名にまで、牛の名をつけて呼んだといふ程の變り種であつた、といふ話が附け加へて語られてゐるのは、さうした牛好きの太秦殿であればこそ、齋王丸のやうな高名な牛飼童を召使ひとして持ち得られたのだといふ事を、それとなくほのめかし、齋王丸がなみなならぬ牛飼童であつた事を知らせる爲と思はれる。

(二) 道の人の細心なる心遣ひ

以上の話は、「道の者」を尊重すべき事をのべて、宇治の里人や今出川の大臣を、其の例として引合ひに出したのであるが、次にのべる第八十五段以下の話は、「道の人」が、如何に細心な心づかひを常に働かせてゐるかを物語つたものとして興味が深い。

城陸奥守泰盛は雙なき馬乗りなりけり。馬を引き出でさせけるに、足をそろへて鬮をゆらりと越ゆるを見て、「これは勇める馬なり」とて、鞍を置きかへさせけり。また足を伸べて鬮を蹴あてぬれば、「これは鈍くして過あるべし」とて乗らざりけり。道を知らざらん人、かばかり恐れなんや。

この語に於ての眼目は、「道を知らざらん人、かばかり恐れなんや」といふ兼好の批評の言葉にある。天下に雙ぶ者もない程の馬術の達者であるならば、勇み逸る馬でも、又や、疲れ氣味の鈍い馬でも、それぞれに立派に乗りこなし得る筈である。然るに泰盛は、勇み逸る馬であると見れば一旦置かせた鞍をも外させて其の馬に乗らず、鈍い馬であると見れば、過ちあるべしとして乗らうとはしなかつた。これは一見すると臆病のやうにさへも思はれるが、眞に道を知る者は、決して無理をしたり危きに近寄るやうな事をしないで、どこまでも細心の注意を拂つて慎重に事を行ふものである事を告げるものである。これと同様な意見は、百九段の高名の木のぼりの條にも見える。即ち、

高名の木のぼりといひし男、人を控てて、高き木にのぼせて梢を切らせしに、いと危く見えしほどは、言ふこともなくて、おるる時に、軒だけばかりになりて、「あやまちすな。心しておりよ」と言葉をかけ侍りしを、「かばかりになりては、飛び下るともおりなん。いかにかく言ふぞ」と申し侍りしかば、「その事に候。目くるめき枝危きほどは、己が恐れ侍れば申さず。あやまちは、安き所になりて、必ず仕ることに候」といふ。あやしき下臈なれども、聖人のいましめにかなへり。鞠も難き所を蹴出して後、やすく思へば、必ず落つと侍るやら

といふのがそれである。「高名の木のぼり」と言はれる程の男は、單に人の上り得られないやうな所までも、易々と上り得るといふやうな技術を持つといふだけではなく、木にのぼる事の危さを、實に細心に各方面から研究して居る人である事を告げてゐる。まことに考へて見れば、危さを徹底的に知り得るならば、その限度までの間は絶対に安全である、といふ自信が得られる事ともなるのであつて、ここに、「道の人」の、物事を慎しみ慎んで、決しておろそかにしない事の効果があらはれるのである。そして、さうした達人の言として、「過は、安き所になりて、必ず仕る事に候」といふ一言を聞く事は、さすがにと我々を首肯せしめるものがある。危いと自ら警戒する所では却つて過つ事がなく、もう大丈夫と安心して氣の緩んだ刹那に過失が生れる、といふのは、單に木上りばかりでなく、兼好が次で述べるやうに、蹴鞠道に於ても同様な戒めがある。そして、更に考へて見れば、この戒めは萬事にわたるものとも言ひ得る。油断は失敗のもとであり、弛緩は過失の原因である事は、敢て他に例を求めなくても、自分自身の過失失敗を冷静に考へれば、誰でも我が身邊に於てこの事例を十分に求め得る筈である。

高名の木のぼりの話は、安神し油断する所に失敗を招く原因のある事を告げるものであるが、

更に秘を深く感ぜしめる話は、我々自身としては十分に緊張し切つてゐると自覺して居る際に於ても、達人名手の眼から見ると、懈怠油断が萌してゐる事があるといふ話である。第九十二段に或人、弓射る事を習ふに、もろ矢をたばさみて的に向ふ。師の曰く、「初心の人、二つの矢を持つことなかれ。後の矢を頼みて、はじめの矢に等閑の心あり。毎度たゞ得失なく、此の矢に定むべしと思へ」といふ。僅かに二つの矢、師の前にて、一つをおろそかにせんと思はんや。懈怠の心、みづから知らずといへども、師これを知る。このいましめ萬事にわたるべし。道を學ぶる人、夕には朝あらん事を思ひ、朝には夕あらん事を思ひて、重ねてねんころに修せん事を期す。況んや、一刹那のうちにおいて、懈怠の心あることを知らんや。何ぞ只今の一念に於て直ちにすることの甚だ難き。

と説かれて居る條がそれである。弓を射る際に、二本の矢を持つて的に向ふのは、弓術に於ける慣例である。この話の場合に於ても、習ふ者が双矢をたばさんで的に向つたのは、その慣例に従つたのであるが、師がこれに對して、「初心者は二つの矢を持つな。後の矢を頼みとして、初の矢をなほざりに放つやうになり易い。」と戒め、「何れの矢でも、當り外れにかかはらず、たゞ一矢だけで事を決するのだと思へ」と警告したのは、自己の思ひ及ばぬ所に、氣の弛みが萌す

ことのある事を告げたものである。まことに兼好の言ふ如く、僅かに二本の矢であり、しかも師の前に於て射る際に、誰がその二本をおろそかに射ようなどと思ふ者があり得よう。十分の緊張と慎重とを盡して放たうと考へてゐるに相違ないのである。しかるに、氣の弛みといふものは、自己では全く意識してゐなくとも、達人名手である師の眼には、それが判然と見えるといふのである。實に恐るべき事であると共に、我々を深い反省へと導く事實といふべきものである。兼好は、この事例をひわさけて、「此のいましめ萬事にわたるべし」と言ひ、道を學ぶる者が、やもすると、明日ある事を頼んで、今日の學習を徹底的に行する事を怠り、明日重ねてねんころに修しようなどと考へ勝ちである事を指摘し、そこに懈怠心が瀰漫してゐる事を暗示してゐる。そして、かやうに明日を頼み明日を期する如き人間が、どうして、只今の一刹那の中にも萌すといふ懈怠、自ら自覺する事さへも出来ないといふ懈怠心を、知る事が出来ようか、と危ぶみ、「何ぞ只今の一念に於て直ちにすることの甚だ難き」と、歎聲を洩らしてゐるのである。只今の一念とは、現下の一刹那の意である。現下の一刹那一刹那を、懈怠なく修し切る事が、何といふ困難な事であらうかとの歎きである。が、これを徹底的に修し切るか否かが、「道の人」となり得るかどうかの嚴然たる分岐點である以上、我々は是が非でも、只今の一刹那に於て悔のない生き方に生



きねばならない事は明白である。盛年は重ねて来らず、一日は再び展あしたなり難しである。

(二) 道の人の體驗による自得

——一種の人生智・勘と骨——

道を修して長年に涉り、その道の上手といはれる程の者になると、たとひその道が、雙六や博奕の如きものであつても、その深い體驗からにじみ出した言葉には、非常に意義ぶかい眞理がひそんで居るものであつて、兼好が語つてゐる次の二つの話の如きは、その好例といふべきものと思ふ。第一百段には、

雙六の上手といひし人に、その手立てを問ひ侍りしかば、

「勝たんと打つべからず、負けじと打つべきなり。何れの手か、疾く負けぬべきと案じて、その手をつかはすして、一目なりとも遅く負けべき手につくべし」といふ。道を知れるをしへ、身を修め國を保たん道も、また然しかなり。

雙六は勝負を争ふものである以上、勝つ事が目的である。従つて勝たうと思つて打つのが當然であり、何人も、如何なる手を用ひれば勝ち得るかといふ事に對して、非常な苦心と工夫

をこらすのである。然るに、この雙六の名手は、兼好に對して、「勝たうと思つて打つ勿れ、負けまいと思つて打て」といふ意味深い一言を告げてゐる。「勝たう」といふのと「負けまい」といふのは、結局は同一であるが、その心構への仕方が違ふのである。勝たうといふ心を以て臨む時には、相手方の弱點をのみさがし出して、相手の弱點を突かうと心を配るものであるから、自分の方の弱點に氣づく度合が乏しい。その結果、相手に自分の弱點を突かれて思はぬ負を取る事が起り易い。殊に自分よりも上手な相手に對しては、勝たうと打つては必ず失敗を招く。それは弱點を看破する力量に於ても、上手はすぐれてゐるからである。然るに、「負けじ」と警戒し、一目なりとも遅く負ける手につく行き方は、必ず自分の弱點に目をつけ、これを防ぐことに全力を盡す。従つて相手に乘ずる隙を與へる機會が少い。ために容易には負けないのである。この手で行く時は、上手な相手であつても、さう脆く敗られる事はなく、相手がちれて勝をあせる方角へと導くことが出来る。さうした際が勝負の分岐點となるのである。前者は積極的であり、後者は消極的であるが、眞理は後者を以て良しとするのである。兼好はこの雙六上手の言葉に深い人生的な意義を見出して、「道を知れるをしへ」であると評し、「身を修め國を保たん道も、また然しかなり」と、その一言は、修身治國の道にも通ずるものであると讃歎してゐるのである。

この雙六打ちの話に連關して思ひ起されるのは、能樂道の天才、世阿彌元清の言つた、技藝の玉成に對する秘訣である。花鏡といふ能樂の秘傳書の中に於て、技藝の修養について、「すべて技藝が、磨き上げた玉の如くに玉成せられるといふのは、長年月にわたつて、己の藝の不足な所や短所を發見し、その缺點を無くするやうに努力する事によつてのみ、獲得せられるものである。良い所や長所が積み重ねられて大成するものではない。従つて、常に自ら反省して、自己の藝の缺點を取り除く工夫をこらすと共に、常に他人の批評を仰いで、自己の缺點の所在を示して貰ふやうにせねばならない。その爲には、すぐれた鑑賞眼や批評眼を備へた見物の多い都會に住して、其の讚歎褒貶を一身に浴びるやうに心がけることが大切である」といふ意味の事が述べられてゐるのである。この意見に於て、「長所を助長して、それで立派なものになれるのではない。短所を削り去る事に徹する事によつてのみ玉成するのだ」といふ點が、私の最も面白く感じる所である。それは、一見消極的な努力のやうに見えるけれども、雙六打ちの上手が、「勝たんと打つべからず、負けじと打つべきなり」と言つた秘訣に、たしかに相通するものがあると思ふ。一道を究めつくした者には、其の言に、相互に通ひあふ眞理が含まれてゐる所が尊い。

次に、第二百二十六段には、博奕打ちの言葉として、

「ばくちの負極まりて、残りなく打ち入れんと爲んに逢ひては、打つべからず。たちかへり、つづけて勝つべき時の至れると知るべし。その時を知るを、よきばくちといふなり」と、或者申しき。

といふ言葉が記されてゐる。これは長年博奕をした者が、體驗の上から、理窟無しに感得した勝負の勘を語つたものと思ふ。連続的に負け通して、その最後に、あらゆるものを悉く賭けて、死物狂ひでかかつて来るやうな相手に對しては、勝負する事を止めねばならない。何となれば、今度はその相手が連続的に勝つべき時運が來てゐるのである。その時運をよく感得するのが、博奕の上手と言はれるものである、といふのである。これは體驗から來る一種の靈感ともいふべきものであつて、其の境地にまで到らないものには、容易に感得せられない一種の勘である。勘であるから、理論的に説き明かす事は容易でないが、道に志す者としては、修行によつて勘が生れて來るまでに到らねば、眞の修行とは言はれないものである。世阿彌は、能樂の競演に於て、男時と女時とある事を語つてゐる。男時とは自己に有利な時であり、女時とは不利な時である。男時に乗じて伎倆の限りをつくして演ずれば、必ず相手に勝ち得るが、女時に際會した時には、如何に努力して見ても、容易に演出効果は上らない。しかも、この男時と女時は、或る時間を隔てて、

交替的に循環して来るものであるから、若し自分に女時がめぐつて来てゐると感じたならば、その際は出来る限り慎重に控へ目に、疵の無いやうにと演能して、やがて男時に移り變つて来たと思ふ際に、あらん限りの手立てを盡して、積極的に華やかに面白く演じて、以てその男時を利用するやうにせよと述べてゐるのである。これも、時運の不利を、靈感的に勘知して、その時運に逆はず、これを利用するコツを説いたものとして、前の博奕者の言葉に、相通ふ所があるやうに思ふのである。

(四) 道に入る者の心掛け

——天稟の問題と修行——

以上、一道に専心する者が、その道を研精する事によつて、伎の上達を得ると共に、人生に處する態度に於ても、何かしら自悟自得の境地に入り得るものである事を、徒然草の實例談を通じて見て来たのであるが、かやうな一道に専心するには、どんな心掛けが必要とせられるものか。道の夫と然らざる者との相違點は、どんな所にあらはれるものか。一道に到れる人の眞の價値は、どうした點にあるものか、等の問題について、兼好の所論を見て行くこととする。先づ第一に、

道に入る心掛けについては、第五百十段に

能を附かんとする人、よくせざらん程は、なまじひに人に知られじ。内々よく習ひ得てさし出でたらんこそ、いと心にくからめと、常に言ふめれど、かくいふ人、一藝も習ひ得ることなし。いまだ堅固かたほなるより、上手の中にまじりて、毀り笑はるるにも恥ぢず、つれなく過ぎて嗜む人、天性その骨なけれども、道になづまず、みだりにせずして、年を送れば、堪能の嗜まさるよりは、終に上手の位に到り、徳たけ、人に許されて、雙なき名を得ることなり。

天下の物の上手といへども、始は不堪のきこえもあり、無下の瑕瑾もありき。されどもその人、道の校正しく、是を重くして放埒せざれば、世の博士にて、萬人の師となること、諸道かはるべからず。

といふ意見が見られる。ここには、何かの藝能を身につけようと志す人が、人情の弱點として陥り易い錯誤が先づ語られてゐる。それは、「下手の間は内密に習つて、上手になり得た後に、人中へ差し出でた方が、奥ゆかしくて良いであらう」といふ考へ方である。そしてこれは、萬人が萬人と言つて良いほどに、誰もが考へる所である。しかし、實際に於て見ると、さうした事を考へ

る人間は、一人としてその藝能をものにし得たためしはないのである。それに反して、未だ一向に未熟で物になつて居ない時期から、上手な人々の中に立ち交つて、他から毀られたり笑はれたりしてもそれを恥しがる事もなく、平氣で押し通して、學習練習に勤むといふ行き方を取る者は、たとひ天稟的な素質に恵まれて居ない者でも、その道を素直に歩み、又、放埒なやり方をしないで、長年月に涉つて修行を重ねる時には、遂には上手と許される位に上り得るものであり、先天的に堪能でありながら修行の疎かな人よりも上位に至り、人徳もつき、世人からも認められて、無雙の上手といふ評判を得るものである、といふのである。前の不成功者は、未熟で人笑はれるなる事を恥ぢる心の爲に、遂にものにはならず、後の成功者は、他の毀譽褒貶を眼中に置かないで、只管に上手に交つて藝能の修行に熱中する事によつて、成功を勝ち得たのである。他人の笑を恥ぢる心は人情の常であつて、それ自體は決して悪い事でも何でもないが、その人情に負けて道を修する事がとかく疎かになりがちになる點に弱點がある。未熟な間は笑はれるのが當然である。當然であるからそれはいさぎよく受けて差支ないものである。技能さへ上達すれば、周囲の笑は消える筈である。笑が消え去るか否かは、自己の技能の上達しつつかあるか否かを測る良いバロメーターであると思へば、さして笑を恥ぢるには及ばない。要は、他人の笑を氣に病むといふ

のは、まだその道に真劍になり得てゐない證據であつて、眞に熱中すれば、他人の笑などといふものは耳に入らない筈である。他人の笑に對して平氣で押し通せといふのは、厚顔に心臓強くせよといふのではない。真劍に熱中せよとの謂である。

次に、天稟ある者の嗜まないものと、天稟にはさして恵まれて居ない者が眞面目に着實に修行する場合との、比較論に入つて、眞に大成し得るのは、たとひ天稟乏しくとも、眞面目に修行する者であると述べてゐる。即ち、天下無雙の上手と評せられるやうな人でも、その初心時代には、堪能者ではないとの世評のあつた人もあり、又、甚だしい缺陷のあつた人もあるが、その人が、道の掟を正しく守り、自己の道を尊重して、少しも放埒我儘な學び方をしないで、修行の年劫を積んだ結果として、一世の模範ともなり、萬人の師ともなり得たのであつて、この事は、如何なる種類の道に於ても、少しも變るものではない、といふ意見である。兼好に於ても、天稟的な素質を持つ事を好まないわけではない。天稟有るは、無きに勝ること數等である事は十分に認めてゐるわけである。しかし、天稟乏しいもの、又は缺陷のあるものが、道に入らうと志したり、又道を繼がねばならない位置に立たされたりする場合も、世には甚だ多い。さうした者でも、其の道の掟を正しく守り、是を重んじて、我意に任せた行き方を避けるならば、天晴れな後繼者たり得

るといふのが、「道」のすぐれた所なのである。天稟無き者をも、これを導いて、天稟ある者と同等の位置に登らしめるだけの手段と方法とは、その道の先人によつて築かれ、それは型として或は掟として、道の中に具はつてゐるからである。

(五) 道の人と堪能の非家との相違

次に、道の人と、堪能の非家とを比較した兼好の所論を見よう。第八十七段に「萬の道の人、たとひ不堪なりといへども、堪能の非家の人にならぶ時、必ずまさる事は、たゆみなく慎みて軽々しくせぬと、ひとへに自由なるとの、等しからぬなり。藝能所作のみにあらず。大方の振舞、心づかひも、愚かにして慎めるは、得の本なり。たくみにしてほしきままなるは、失の本なり。」といふのがある。専門家は、たとひ少々は下手と言はれてゐても、上手と言はれる素人と立ち並んで事を行ふ時には、必ず素人に勝る出来榮えを示すものである、と言ひ、其の然る理由を説明して、専門家即ち道人は、たゆみなく慎んで事を軽々しくしないに比べて、素人は、ひとへに我意にまかせてほしいままに事を行ふといふやり方をするが爲であると述べてゐる。「素人は何

程上手であつても、専門家の敵ではない」といふ事はよく言はれ、「餅は餅屋」といふ諺までも生れて來てゐるのは、實にかやうな所に、その優劣の原因があるのである。天稟に恵まれて居ても、その天稟は、道の掟を正しく守るといふ行き方を以て育てなければ、その美しい萌芽を伸ばす事は出來ない。努力と不退轉の精進を以て培ひ育てなかつたならば、あたら天稟も、徒らに枯死するのみである。然るに素人は、その天分を頼みとして、努力修養を正しく積み重ねる事を怠り嫌ふ傾向があり、漸を追うて規則正しく道に進むことをもどかしく思つて、我流に事を運ぶ傾向に流れ易い。その爲に、遂に一道を眞に我が身につける機を失ひ、何時までも素人藝としての達者といふ境地を出る事が出來ないで終るのである。これは、なまじひに天稟的素質に恵まれたが爲に、却つて失を招いたものと言ひ得る。兼好は更に語をついで、單に藝能所作ばかりでなく、一般的な振舞に於ても心づかひに於ても、自らの愚を自覺して慎重に事を運ぶ者は得を招き、自らの巧みさを頼んでほしいままに事を行ふ者は失を招くと説いてゐる。所謂「此のいましめ、萬事にわたるべし」である。

## (六) 道と人の處世上に自誠すべき點

次に、一道に携はる者の、處世上に於て、何を最も警戒し、如何なる境地に立つべきものであるか、に關する兼好の意見を見よう。第百六十七段に

一道に携はる人、あらぬ道の席に臨みて、「あはれ我が道ならましかば、かく餘所に見侍らじものを」といひ、心にも思へること、常のことなれど、世にわろく覺ゆるなり。知らぬ道の羨しくおぼえは、「あな羨し、などか習はざりけん」と言ひてありなん。我が智を取り出でて人に争ふは、角あるものの角をかたぶけ、牙あるものの牙を嚙み出す類なり。人としては善にほこらず、物と争はざるを徳とす。他に勝る事のあるは、大きな失なり。品の高さにても、才藝のすぐれたるにても、先祖の譽にても、人にまされりと思へる人は、たとひ詞に出でてこそ言はねども、内心にそこばくの科あり。慎みてこれを忘るべからず。をこにも見え、人にも言ひけたれ、禍をも招くは、たゞこの慢心なり。一道にもまことに長じぬる人は、みづから明らかにその非を知る故に、志つねに満たすして、つひに物を誇ることなし。

といふ切實な意見が見える。或る道に従事する者で、その道に於て相當の自信のある者が、自分の携はる専門とは異つた道の席に臨んだ場合に、「あゝ、これが自分の専門の伎が行はれる席であつたならば、自分の腕前を示すことも出来、人々にも感心させる事も出来よう」と思ひ、「かやうに傍觀者としての地位に立つ事もあるまい」と残念に思ふものであるといふ。いかにも人心の機微にふれた言葉であつて、大ていの者が、誰でもかやうな感じをいだくものである。しかし、兼好は、さうした感じを抱くことに關しては、「それはあまり感心した事ではない」とのべ、自分の知らない道を羨しく思ふならば、「自分も習つて置けば良かつたに、習はないで残念だ」と言つて居れば、無難であらうといふ。他のすぐれた事に對して、羨望の念を表明する事は、相手を満足させるものであり、「若し自分の道であつたなら、君達ばかりに名譽を獨占させる筈はないのだが」といふ風な口のきき方をする事は、相手に反感を起させるにすぎないものである事を、兼好はよく知悉してゐるのである。

次に兼好は、「他にまさる事のあるは、大きな失なり」といふ事をのべて居る。その他に勝るものとしては、才藝もあり、智もあり、社會的な地位もあり、先祖の譽れ等もあるわけであるが、何故にこれ等が、その人に取つて「失」であるかと言へば、さうしたものを持つ人が、その

勝るといふ事に於て、やゝもすると慢心に流れ易い爲である。自らのすぐれてゐる事を以て、他を見下すやうな振舞や言動に出やすいためである。才智藝能に於てすぐれてゐるといふ事自體は、その人の得であつて、少くとも失と言ふには當らない。それを失たらしめる根本は、それを頼みそれに慢するといふ精神にある。これはあたかも、角ある獣がやゝもすると角を傾けて相手を突く氣勢を示し、牙のするどい獸が何か心に激する事があれば牙をむき出すのに似てゐる。従つて最も消極的な立場に立てば、さうした勝れた點を持たないでゐるのが、最も安全であるといふことになる。頼み持つものがなければ、慢心の萌しやうもないからである。しかし、兼好は、一面に於ては、「道の人」として一道に通達した人を稱揚し、さうした「道を極めたる人」となる事を勸奨してゐる。それとこれとは一見矛盾してゐるやうにも見えるであらうが、眞に「道の人」となり得た人に於ては、「一道にもまことに長じぬる人は、みづから明かにその非を知る故に、志常に満たすして、遂に物に誇ることなし」といふ境地に立つ故に、他にまさる才智藝能を持つ事が、決して「失」とはならないものであるといふのである。私は此處に於て、「道の人」の眞の價値が闡明せられてゐる事を感じる。

道に眞に長じぬる人は、自ら明かに「その非を知る」が故に、「志常に満たす」といふ。「その

非を知る」とは何の非であるかといふに、自己が「道の人」として、未だ理想の境地には到り得てゐないといふ自覺である、如何なる道に於ても、究めれば究める程に、その奥が深く、容易な事では究極境に到り得るものでない事がわかつて來るのである。「道」は無限につづく修行の道程であつて、「もうこれで良し」といふ所はないのである。能樂の天才世阿彌も、「命には終あり。能には果あるべからず」と言つてゐる。他人より見れば、一道の究極をきはめた人の如くに見えても、道の人自身に於ては、まだまだ修行し努力すべき所が非常に多い事を知り、自らの不十分さを痛切に感じるものである。「志常に満たす」といふのは、かくの如く、自ら自己の不十分さを知り、自分で自分に満足出來ない事實を告げる。かうした「道の人」は、従つて、己が才藝を誇らうなどといふ氣持にはどうしてもなれないのである。才藝に誇る人間は、決してその道に長じたる人間でもなく、自己の修行不足に對する自覺を持つ人間でもなくて、いはば生かぢりの程度を出でない者と評して良いと思ふ。

## 七處世觀

人生に於て、處世上に最も危険性の多いものと言はれるものは、所謂色慾と名利慾である。その中、色の戒めに關しては、兼好は、「世の人の心をまどはす事、色慾にはしかず」と訓へ、「まことに愛着の道、その根深く、源遠し。六塵の樂欲多しといへども、皆厭離しつべし。その中にたゞ彼の惑ひの一つ止め難きのみぞ、老いたるも若きも、智あるも愚なるも、かはる處なしと見ゆる」と述べて、深くこれを戒めてゐる事については、既に述べた所である。

## (一) 名利論

色に次いで、又、人の心を強く惑はすものに、名利の慾がある。名譽と利得心といふものは、冷靜に考へると、此の世の人々をして營々として働かしめ努力せしめて、社會の福利を増進させる爲には、實に良い刺戟劑であつて、たしかに人生の爲に役立つてゐるものである。世には、名利を以て一概に蛇蝎の如くに考へ、有害無益のもの如くに言ふ人もあるが、それは名利に溺れ

る弊害だけを見て、一面的な物の考へ方をして居る人に過ぎないと思ふ。若し此の世の中の人々が、全然利と名とに關する興味を失ひ、それから脱離してしまつたら、此の世の中は一體どんなに變つて行くであらうか。恐らくはあらゆる方面に於ける進歩は止まり、活動も停止し、退屈で面白くもない世の中となるであらう。それは道學者が空想するやうな良い世の中ではなくなる筈である。しかし、我々はさうした心配は少しもする必要はない。名利欲求の念は、人間社會には本能的につきまとふものであつて、よほどの聖人君子でない限り、全然これから脱離するといふ事は、不可能な事であるから。だから、普通の世の中に於ては、名利に伴ふ所の罪惡を防止し、名利が世の進歩の原動力として働く方面を助長すれば良いのである。たゞ、一個人の人生觀とすると、これを尊重愛護しようとする人もあれば、これから遠ざかつて、心の靜かさを得度いと望む人もあり得ると思ふ。兼好は世捨人であり隱者である。従つて彼は、自己の清閑を希ひ、つれづれを愛する上からして、名利を否定しようとする側に立つてゐる。しかし、彼の論述は、必ず物の両面を視察して、それぞれの存在理由をあげ、且つその論理を運ぶこと頗る巧妙で、我々を成程と納得させるに足る上手さと面白さを持つて居る。一例を、第二百十七段の致富觀に取つて見よう。



(イ) 致富論とその批判

ある大福長者の曰く、「人は萬をさしおきて、ひたぶるに徳をつくべきなり。貧しくては生けるかひなし。富めるのみを人とす。徳をつかんと思はば、すべからず先づその心づかひを修行すべし。その心といふは、他の事にあらず。人間常住の思ひに住して、かりそめにも無常を観ずる事なかれ。これ第一の用心なり。次に萬事の用をかなふべからず。人の世にある、自他につけて所願無量なり。欲に従ひて志を遂げんと思はば、百萬の錢ありといふとも、しばらくも住すべからず。所願は止む時なし。財は盡くる期あり。限りある財をもちて、限りなき願ひに従ふこと、得べからず。所願心にきざすことあらば、我を亡ぼすべき惡念きたれりと、かたく慎み恐れて、小用をもなすべからず。次に、錢を奴の如くして使ひ用ゐるものと知らば、長く貧苦を免るべからず。君の如く神の如く恐れ尊みて、從へ用ゐることなかれ。次に、恥にのぞむといふとも、怒り怒むる事なかれ。次に、正直にして約をかたくすべし。この義を守りて利を求めん人は、富の來ること、火の乾けるにつき、水の下れるに従ふが如くなるべし。錢つもりて盡きざる時は、宴飲壁色を事とせず、居所を飾らず、所願を成せざれども、心とこしなへに安く樂し」と申しき。

そもそも人は所願を成せんがために財をもとむ。錢を財とする事は、願ひをかなふるが故なり。所願あれどもかなへず、錢あれども用ゐざらんは、全く貧者とおなじ。何をか樂しむとせん。この按は、たゞ人間の望みを絶ちて、貧を憂ふべからずと聞えたり。欲を成じて樂しむとせんよりは、しかし財なからんには、癪垣を病む者、水に洗ひて樂しむとせんよりは、病まざらんには如かじ。ここに至りては、貧富分く所なし。究竟は理即到に等し。大欲は無欲に似たり。ここでは先づ、或る大福長者の曰くとして、致富の要訣が、諄々として説かれて居る。しかもそれは、江戸時代の長者經のやうに、具體的な金儲けの手段や儉約の方法を説くものとは違つて、長者になるべき心づかひの修行が説かれて居る所に興味がある。恐らくこれは、兼好の創作にかゝるものであつて、兼好が實際に大福長者から聞いたのではないであらうと私は考へてゐる。それは餘りにも上手に語られてゐるからであり、兼好ほどに世の中の酸いも甘いも噛みわけた人でなくては、容易にかやうには説くことも出来まいと思はれるからである。そして、かやうに、致富の要訣を述べるのは、次にこれを大きく否定して、兩々相對比させて、一層鮮明に彼の意圖を表現しようとする所の、兼好の好んで用ひる常套筆法の一つのあらはれとも見られるのである。

ここで面白いのは、「人はよろづをさしおきて、ひたぶるに徳(富の意)を附くべきなり」と先づ致富が人生最上の急務である事をいひ、「貧しくては生ける甲斐なし」と、貧乏では、折角此世に生れながらも、全く生き甲斐といふものがないと断じ、「富めるをのみ人とす」と述べて、世間に於ても、金持ちだけが人間らしく認められるものであつて、貧乏人では人間扱ひすら受けられないものである、と述べてゐる所である。實際の世の中に於ては、正にこのやうな考へ方が支配して居り、又、さうした實情でもあるから、決してこの言葉は凡人にとつては誇張の言葉とは響かないものであり、如何にも同感を誘ふものであると思ふ。

次で大福長者の言は、致富の爲の要訣に入つて行くのであるが、その根本として、「心づかひの修行」といふ事が大切であるといふ。心づかひとは、氣の持ちかたであり、大きく言へば人生觀の立て方とも言ふべきものであるが、その第一要件は「此の世の無常を觀する勿れ」であると言ふ。自分は何時死ぬかも知れない儚い身であるなどと思ふと、金を溜める元氣も失せ易いからである。「常住の思に住する」とは、何時まででも生きて居られるものだといふ信念に安住する意であるが、結局は生死の問題などは念頭に置かないやうにといふ心得と考へて良い。眞先きに、「無常を觀する勿れ」を持ち出して來た所などは、この大福長者の言葉なるものが、兼好の創作ら

しく思はれて、微笑させられる所である。第二の要件は、「願望や欲望を満たさうと思ふ勿れ」である。それを満足させるが爲には金錢が必要であるが、人間の願望には限りが無いから、それを一々叶へてゐては、財は何程あつても到底足りるものではない、といふのである。これも面白い考へ方である。「所願が心にきざしたならば、自分を亡ぼす悪念が來たものと思つて、堅く慎み恐れ、如何なる少しの要用であつても、それを叶へる事は止めよ」といふ。これは如何にも金持の心理をうがも得たものであつて、誠に興味が深い。第三の要件としては、「金錢を神の如く君の如くに畏怖し尊敬せよ」といふ。若し金錢を、奴隸のやうに思ひ、己が意のままに使ひ用ゐるやうなやり方をすれば、永久に貧苦を免れ難い。神や君の如く恐れ尊敬せよならば、これを使役する氣持にはなれない筈であるといふ。比喩の取り方が面白いために、この言葉は江戸時代の町人にも愛好せられて、「金は主人と思へ」、「金は親と思へ」などいふ箴言にまでも展開してゐる。主人と思ひ親と考へるならば、これを自分の用を足すために使ふといふ事は、到底出來ない筈であるといふのである。第四には、「恥に臨むといふとも、怒り恨むる事なかれ」といふ要件が示されてゐる。これは一見すると、殆ど致富といふ事には無關係であるかの如くにも見えるが、「利得の爲には恥辱をも忍べ」といふ心持を示したものと解すべきである。近松の淨瑠璃の中にも、侍

は利徳を捨てて名を求め、町人は名を捨て利徳を取り金銀を溜める。これが道と申すもの」といふ有名なセリフがあるが、名を捨て恥を忍んでも、金銀を溜めるのが町人道であるといふ考へ方は、兼好の言葉に通ふ所があると思ふ。「商人は、片足あげて小便の出来ない者では、成功しない」といふ皮肉な言葉も世には行はれてゐる。片足あげて小便するとは、大になり獣になる意であり、恥といふ事を知らぬ畜生になる意である。兼好は勿論それほどまでには考へてゐないであらうが、世間體を恥ぢるやうな心では、金銀は溜るものではないといふ事が語られてゐると見て良い。第五の要件としては、「正直にして、約をかたくすべし」であるが、これは別に事あたらしい要件ではなくて、古今東西何れの商賣道に於ても言はれる所で、「正直は最上の商略なり」との諺もある。結局する所は、他人の信用を獲得せんが爲である。以上の五つの要件を遵奉して、利徳を追求するならば、其の身に利徳の集る事は、火の乾けるにつき、水の下れるに従ふが如しであるといふ。

大福長者の言は更につづいて、金銀財寶の集積が、如何に楽しきものであるかを述べる。即ち金持ちとなり長者となれば、別に宴飲の楽しみをせず、聲色の享樂をも味はず、居所に美麗を求めず、し度いと思ふ慾望を叶へなくとも、心は永久に安らかで且つし楽しいものである、といふのである。この言葉も、たしかに金持ちの心理を巧妙に告げてゐる。財寶を集め貯へて、富が次第に増大して行くのを見る事を無上の楽しみとする、といふのは、分限者の共通心理であるからである。その楽しさを満喫してゐる爲に、宴飲聲色を事としなくても、少しも不満に感じないといふのである。但しそれは、宴飲聲色の楽しみを求めようと欲すれば、その財力によつて、何時でもその望みは叶へ得られるといふ自信がある事によるものである。この事は計算の中に入れて考へねばならない。

兼好はかやうに大福長者なる者の口に藉りて、致富の必要と、その爲の要訣と、富の楽しさを並べ立てた上に、今度は全然其の立場を變へて、それ等の言葉を、批判の俎上にのせる。即ち、人々が財を求め富を願ふのは、それによつて、自己の願望する所のもを叶へんが爲である。然るに、自己の願ひ求める所のもを叶へず、錢があつてもこれを全く使用しないとすれば、それは錢の無い貧乏人と全く等しい。さうした境涯に何の楽しみがあらう」といふのである。これもたしかに一面の眞理を突いて居る。が、前にも述べたやうに、使用しようとしても一文も無い貧乏人と、使用しないではゐるが、使はうと思へば何時でも存分に使ひ得られるといふ自信を持つて

金を使はないでゐる者とは、たとひ「使はない」といふ點では共通點があつても、其の精神上に於ける餘裕と安心に於ては、格段の相違のある事も事實である。従つて、「錢あれども用ひざらんは、全く貧者と同じ」といふのは、理窟の上での計算であつて、額面通りには受取り難い所がある。勿論、兼好法師がこれほどの事を知らぬわけは無いが、説得力を強めるために、理論詰めに詰めて行つたものと見て良いであらう。次で兼好は、長者の示した五ヶ條の致富の掟を一括して、それは結局「人間としての欲望を絶ち、貧を憂ふる事なかれ」といふ事に歸着するものだと断じた。所願を叶へ度いといふ欲心を絶つならば、貧乏であつても少しも苦痛はない筈である。貧乏が憂く情ないといふのは、所願を叶へられないが爲であるのだから、所願さへ絶つならば、貧はうれふる必要がなくなる、といふのである。これも理窟と言へば言ひ得られる。といふのは人間として所願が無くなる事も、又これを絶つといふ事も、恐らく不可能であるから、永久に貧をうれふる心は無くならないであらうと思はれるからである。そして、兼好は最後の斷案として、「欲を成じて樂しびとなさんよりは、しかじ財なからんには」と言ひ、「癩や疽を病む者が、水で冷して快よさを感じるよりも、さうした病氣の無い方が願はしい事であるといふ醫へを以て、欲心を成じ金を集める者を病者にたとへ、貧しきを無病に比してゐるのである。

以上を見渡すと、兼好の意は、利徳の追求に對する否定、富を積んでも散じないといふ生き方への否定、この二つを通じて、世にあり勝ちな富豪階級への蔑視の意、さうしたものを示さうとしてゐるが、我々の興味の中心は、それ等の否定の仕方よりも、むしろ、大福長者の言葉の方に惹きつけられる所がある。大福長者の言葉は、世人一般の意見の代辯として語られ、且つその表現の仕方、まことに氣が利いたものであるからである。兼好法師が、大福長者に藉口して試みた自問自答として見ると、兼好はやはり多數の人々の考へ方を代辯し、その言ひ度い所を切實に語り出す方に於て、すぐれてゐると評して良いであらう。

(ロ) 名利に役せらるる事の愚

名利を求め心を否定し、名利の爲に使役せられる事の愚を説いた條として、良くまとまつた論は、第三十八段にも見える。即ち、

名利につかはれて、しづかなる暇なく、一生を苦しむるこそ愚なれ。

財多ければ、身を守るにまどし。害を買ひ煩を招く媒なり。身の後には、金をして北斗

を支ふとも、人の爲にぞ煩はるべき。愚なる人の目を喜ばしむる樂しび、又あぢきなし。太

きなる車、肥えたる馬、金玉の飾りも、心あらん人は、うたて愚なりとぞ見るべき。金は山

に捨て玉は淵に投ぐべし。利に惑ふは、すぐれて愚なる人なり。埋もれぬ名を永き世に残さんこそ、あらまほしかるべけれ。位高くやんごとなきをしも、すぐれたる人とやはいふべき。愚に拙き人も、家に生れ時にあへば、高き位にのぼり驕りを極むるもあり。いみじかりし賢人聖人、みづから卑しき位にをり、時に遇はずして止みぬる、又多し。偏に高き官位を望むも、次に愚なり。

智恵と心とこそ、世にすぐれたる譽も残さまほしきを、つらつら思へば、譽を愛するは人の聞かざるなり。譽る人、毀る人、共に世に留まらず。傳へ聞かぬ人、またまた速かに去るべし。誰をか恥ぢ、誰にか知られん事を願はん。譽はまた毀のもとなり。身の後の名残りて更に益なし。これを願ふも、次に愚なり。たゞし、強ひて智を求め賢をねがふ人の爲に言はば、智恵出でては偏あり。才能は煩惱の増長せるなり。傳へて聞き學びて知るは、まことの智にあらず。如何なるをか智といふべき。不可は一條なり。如何なるをか善といふ。まことの人、智もなく、徳もなく、功もなく、名もなし。誰か知り誰か傳へん。これ、徳をかくし愚を守るにあらず。もとより賢愚得失のさかひに居らざればなり。

迷ひの心をもちて名利の要を求むるに、かくの如し。萬事は皆非なり。いふに足らず、願ふに足らず。

ここでは兼好は、主として老莊思想的な立場に立つて論じてゐるのであるが、それは彼の豊かな人生智によつて、一般的な處世の常識を語るやうな風に述べられてゐて、讀者を實にも同感せしめる論理の巧みさがある。そして、彼の言はうとする所は、「名利に使はれて、靜かなる暇なく、一生を苦しむる」事は、甚だ馬鹿げた事である、といふ一點に歸着するやうである。「使はれる」といひ、「一生を苦しむる」といふ事から考へれば、兼好の所説は極めて自然であつて、その根本には、何物にも使役せられない自主性といふものを愛重する心持が、主となつてゐるのを見る。

兼好は先づ、財寶金銀は、必ずしも人の身に幸福をもたらすものとは限らず、時には、財の爲に自ら害を買ふ如き事すらあり、多くの場合、煩累を増す媒となるものであるといふ。財産家であつたが爲に殺害されたとか、御家騒動が生じたとか言はれるのは、財が害を買つた例であり、如何にして財を守りこれを増すかに日夜心を悩ましてゐる者は、財が煩累を増す媒となつた例で

ある。又たとひさうした苦難に逢はなくても、死んでしまへば、たとひ積んで北斗星に届く程の黄金があつたとしても、冥途の役には立つ物でもなく、他人の煩ひの基となるに過ぎないといふ。遺産をめぐる争ひなどは其の適例である。又、愚な人目を喜ばしめる楽しみ、例へば家屋や身の廻りの立派な装飾等も、考へて見れば味気ないものであつて、心ある人の眼よりは、きつと厭ふべく愚なる事だと見られるに相違ないといふ。従つて、財寶金銀に眩惑されて、これを得ようと身を苦しめる事は、愚の最上なるものであると斷じたのである。財は使ふべきものであつて、財に使はれるべきものでないといふ事が言はれるのは、財の爲に使役せられる人間が、此の世には如何に多いものであるかを物語るものである。

次に兼好は、財寶に比べては、名譽を求めの方が人間としては望ましい事であり、埋れぬ名譽を後世にまで残すといふ事は、人として願はしき事であると言ふ。しかしながら、其の名譽といひ名譽といふのも、高い官位に上り、世人にその名知られる事などを求めるやうなのは、さして望ましい事ではないといふ。何となれば、官位の高い人間が必ずしも人格的に傑出した人間であるとは言ひ難く、愚人でも高い家柄に生れて時運に恵まれれば、高位高官に上つて羽振りを利用し得るからであり、それとは逆に、立派な聖賢と稱すべき人々が、時運に際會することが出来ず

に、卑賤な位置に身を終へた例もあるからである。そこで兼好は、官位の高きを望むは、利に惑ふに次ぐ愚かなるものであると斷じたのである。

埋れぬ名を残すことは、智恵と心のすぐれたるといふ名譽を残し得て、はじめて意義がある。智のすぐれたるは賢人であり、心のすぐれたるは聖人である。聖人賢者のほまれを後世に残す事が、人として希ふべきものであることは、何人も疑ふ者はないのであるが、そして兼好も、一度はこれを肯定するのであるが、更に翻つて彼は、佛老的な立場からこれをも否定しようとする。その理由は、名譽を愛する事は、結局、人の聞き（世間の評判）を喜ぶことであるが、譽める人も毀る人も、いつまでも此世に居るわけではなく、やがて故人となつてしまふ。又、その人々もち傳へ聞く人も、同じく此世を去るわけであるから、一體何人に恥ぢ何人に知られる事を願ふものか、わけのわからない事となるではないか、といふのが一つの理由。第二には、譽は毀の本であつて、名譽ある所には、必ず影の形に添ふ如くに、毀りもこれに附隨して廻るものであるから、といふのが第二の理由である。以上の理由によつて、自分の死後に名譽が傳はつて見ても、何等の益の無い事であることは明白だから、さうした名を求めて心身を苦しめることも、愚なる事である。

あるといふ。ここに於て、名と利を求めて、これに役せられ身を苦しめる事を、兼好は全的に否定し去つたのである。

最後に兼好は、賢人となり聖人となる事を望む者に對して、老莊的立場から、これをも否定し去らうとする。先づ賢人となる事への否定は、智慧の否定を以てする。智慧は世俗では尊ぶべきものと考へるが、「智慧出でては偽あり」であつて、此世に「偽」といふことが生じたのは智慧といふものが生じたが偽であるといふのである。又、聖人となることへの否定は、聖人と稱せられるべき眞人は、無爲自然恬淡寡黙なるものであつて、徳とか功とか名とか言はれる如きものに従ふことなきものである。従つて眞の聖人は、世人その徳を知らず其の名も知らず其の功をも知らぬものである。故に、世に徳を知られ名聲の傳はる如きものは、眞の聖人ではない。さうした似而非なる聖人たらんと望む事も、愚であるといふのである。

以上の如くして、兼好は、名・利を悉く否定し去つて、「迷ひの心をもちて、名利の要を求むるに、かくの如し」といひ、「萬事は皆非なり、言ふにたらず、願ふに足らず」と述べてゐる。この所論はやゝ激越であるが、名利の奴隷となつて東奔西走する徒輩の、我は顔に跳梁する彼の時

代を考へ、彼の人生觀が、隱遁清閑の境に憧れるものである事を考へると、兼好の身としては、言はずにはすまされぬ問題であつた事が諒せられると思ふのである。

(一) 自主自愛の尊重

兼好が名利を退けたのは、その根本には、何物にも左右せられない自主自由といふものを、切

に希求する念願がある。自ら自己をいたはり慈しむ心持がある。名譽でも財でも、それ自身としては、大したものでもないにしても、有つても一向に差支のないものである。兼好に於ても、有るは無きに勝ると考へてゐたであらうが、その爲に心の平靜が亂されたり、心身を惱まされたりする事は、自主性や自由性を愛重する立場に居る以上、兼好の好まない所であつた。名利を得る爲に心身を苦しめる事、一旦獲得した名利を失ふまいとして心を悩ます事、それは人生として、生を受する行き方ではない。最も愛重すべきもの味はふべきものは、自己の生であり、自己の自主自由である。それに比べると、名利などは實に儂いものであり價値の乏しいものであるのだから名利に使はれて己が生涯を苦しめる事は、本末を顛倒した愚かなことである、といふのが、兼好

の本音であらうと思ふ。

しかし、兼好の求める自由性や自主性は、自己を主張して他を己の意志に服従させるとか、他を顧る事なくしてほしいままに振舞ふとかいふ自恣的なものではない。もつともつと消極的なものであつて、自らの心の平和を亂さない事への願ひとも稱すべきものである。従つて、外部から自分の平和を亂すやうな壓力の加へられる事を避けようとすると共に、自分の心に起る欲望の爲に、清澄な心境をかき亂される事をも極力避けようとする。それ等と正面衝突する事を避け、出来得る限りに「事なかれ主義」で、避避的に遁れようとするものである。しかし、これを獨善主義と見るのは當らない。獨善主義者は、他の迷惑は顧みないで、自己だけ都合であれば良いといふ行き方を取るが、兼好の行き方は、自己の平和を愛するが爲に、他人の平和をも尊重し、相互の間に無用の摩擦や葛藤の起る事を極力避ける行き方である。隱遁といふのも、他との摩擦を避避する手段であり、それによつて境涯の平静を保つためである。その點で、佛教的な行き方であると共に、老莊的な人生の生き方であると言ひ得る。老莊は自主を愛し人生を愛するものであり、その手段として自然に隨順するのである。兼好の自主自由には、この自然隨順の心持が深い。かうした心持に於て、自己心内の欲望からも脱離しようとする進む行き方に、佛教の無常觀が働

いて居るのである。

(ロ) 平凡の眞理——俗見と覺見との相違——

かやうな兼好の考へ方が、具體的例話で示されて居るのは、第九十三段である。

「牛を賣る者あり。明日その値をやりて牛をとらんといふ。夜の間に牛死ぬ。買はんとする人に利あり。賣らんとする人に損あり」と語る人あり。これを聞きて、傍なる者のいはく「牛の主まことに損有りといへども、又大きな利あり。その故は、生ある者、死の近き事を知らざる事、牛既に然なり。人又おなじ。はからざるに牛は死し、はからざるに主は存せり。一日の命、萬金よりも重し。牛の價鵝毛よりも輕し。萬金を得て一錢を失はん人、損ありといふべからず」といふに、皆人嘲りて、「その理は牛の主に限るべからず」といふ。又曰く、「されば、人死を憎まば、生を愛すべし。存命の喜、日々に樂しまざらんや。愚なる人、この樂しみを忘れて、いたつかはしく外の樂しびを求め、この財を忘れて、危く他の財を食ふには、志滿つ事なし。生ける間生を樂しますして、死に臨みて死を恐れば、この理あるべからず。人皆生を樂しまするは、死を恐れざる故なり。死を恐れざるにはあらず。死の近き事を忘るるなり。もし又、生死の相にあづからずといはば、まことの理を得たりと



いふべし」といふに、人いよいよあざける。この段は、一般的な民衆と、一人の覺めたる人との對話の形式を以て、まことの道理といふものは、中々容易に人々には受け入れられないものである事を、興味深く示してゐる。最初の牛の賣買の話に於て、約定の夜の間牛が頓死した事は、賣主としては損失であるし、買はうとした者には利得である、といふのは、最もわかり易い常識的な考へ方である。それに對する覺めたる人の批判は、これも理窟の通つた批評ではあるが、一般人には、さして切實に響かないで、嘲りを得たといふ。その理由は、賣主は牛の死によつて損はしたが、それによつて「生ある者は、常に死の近き事を心頭しんとうに置くべき事」や、「自己が幸に生を保ち得てゐる事を喜ぶべき事」などを、切實に感ぜしめられたことは、大きな利益であるといふ意見は、牛の賣主が牛を失つたといふ損失に比べて、現實にひびいて來る利益感が乏しい點にある爲だと思ふのである。「それ位の利益ならば、牛の主だけに限つた事ではなく、誰でも感得せられるものである」といふ一般人の意見は、それが普遍的な眞理である爲に、悟つても感得しても、別に大した利益になるものではない、といふ考へ方である。心に得る所得よりも、物としての所得を重んずる點で、これは世俗一般の思想を代表したものと云ひ得る。

次に「死を憎まば、生を愛すべし。存命の喜び、日々に樂しまざらんや」といふ條になると、この眞理の深さは容易に俗人には理解し難い。それは、あまりにも「當り前」であり「當然」である爲に、淺く見える爲である。平凡の中に潜む眞理は、よほどの達識者でないと、見遁してしまふ。又、この「生を愛する」といふ事は、卑俗な見方をする、享樂生活を送る事とか、快樂主義的な生き方をする事のやうにも、誤解される恐れもある。しかし、享樂追求や快樂主義は、強い刺戟を求めて感覺を酔はせる事を目的とするものであるから、次第に頽廢的に流れ病的に流れて、その志は常に満たされるといふ事はない。志が満たされない生き方、外からの刺戟に頼る生き方、それは、決して、「生を愛する生き方」とは言ひ難い。むしろ「生を嘗ふ生き方」に墮したものである。眞に生を愛する生き方は、外物から煩はされる事のない清閑の境地に身を置き、心に自由を獲得して欲望のために悩まされる事なく、靜かに日々の生活を味はひ樂しむ所にある。靜かなる法悦にひたる事にある。それは刺戟的でもなく享樂的でもないが、汲み盡せぬ平和の喜びがある筈である。しかも、自らが内に求める樂しびであるから、求めて得難いといふ悩みのあるものとは異つて、隨時隨所に主となり得るものである。かやうな自受樂ともいふべき人生の愛し方を忘れて、心身を苦しめ悩まして外の樂しびを追

ひ、この尊い平和の心境を忘れて、危険な財貨欲のままに行動する時は、その志は満たされる時ではなくて、一生は楽しみを求めながら苦惱の連続として暮れて行く。さうした生き方をして居ながら、死に直面して恐怖するといふことは、第一理窟の通らない事である。死が恐しければ、生を愛すべきものであり、生に悩んでゐるならば、その悩みの終結であるべき死は、歓迎せられて然るべきものであるからである。だから、「人が生を眞に楽しまいとしないのは、死を恐れないが爲である」といふ事が出来る理窟である。しかし實際に即して言へば、死を恐れない者はないのだから、これは「死を恐れざるにはあらず、死の近き事を忘るる」故であると言つて良いものである。死が身邊に迫つて居る事を忘失してゐるものだから、生を楽しむべき事をも忘失し、夢中に彷徨して、外に愁をたくましくして居ると評して良い。若し又、生死などといふ問題を超越して、それに関して心を勞する事もない状態にまで到り得てゐるといふのであれば、それは「眞の理」を悟り得た達人であるといふべきものである。さうした人であれば、死をも恐れないし、従つて特に生を楽しまうともしないであらう。淡々として自然と天理に随順して、最も明哲な生き方に生きるであらう。かうした物の考へ方に對して、一般世人は、いよいよこれを嘲笑するといふ。それは結局、深

く物事を考へる事をしないが爲に、眞理が迂愚の如くに感じられることによるものである。世上の悲劇と喜劇とは、皆かうした所から生れて来る。それは滑稽であると同時にあはれなるものであるが、世の中の味はひといふものも亦、その中に存するかと思ふ。

(三) 處世の要訣

世に處して行くに、生を眞に楽しむ行き方を採り、それによつて自らを安んじると共に、他にも迷惑を及ぼさないで生きて行く事は、最も望ましい事であるが、さうした處世法に關して説く兼好の言葉には、まことに滋味深々と評すべきものが多い。それ等の中で、特に私の心に深く感じた二三について述べて見たい。

第三百十段には

物に争はず、己を枉げて人に従ひ、我が身を後にして、人を先にするには如かず。萬の遊びにも、勝負を好む人は、勝ちて興あらんためなり。己が藝の勝りたる事を喜ぶ。されば負けて興なく覺ゆべきこと、又知られたり。われ負けて人を喜ばしめんと思はば、更に

遊びの興なかるべし。人に本意なく思はせて、我が心を慰まんとぞ、徳に背けり。陸じき中に戯るるも、人を謀りあざむきて、己が智のまさりたる事を興とす。これ又禮にあらず。されば、はじめ興宴より起りて、未き恨みを結ぶたぐひ多し。これ皆、争ひを好む失なり。

人にまさらん事を思はば、たゞ學問して、その智を人にまさらんと思ふべし。道を學ぶとならば、善にほこらず、ともがらに争ふべからずといふ事を知るべき故なり。大きな職をも辭し、利をも捨つるは、たゞ學問の力なり。

といふ意見が見える。これは主として儒教的な立場に立つての意見であるが、出家隱者とならないで、世俗の世に立ち交つて、しかも事無く世に處して行く爲には、儒教の教訓が最も實際的であるためだと思はれる。

「物に争はず」とか「我が身を後にして人を先にする」といふ事は、論語に於ても説かれて、君子や仁者の處世法として記されてゐるが、「己を枉げて人に従ふ」といふ事は、兼好が附加した一項目である。そして甚だ意味深い所である。自己の主張なり希望なりを枉げてまでも、人に従ふといふ事は、輕率に考へると、卑屈な根性のやうに若い人達には考へられるかも知れない。勿論己を枉げて人に従ふ事が、若しも自己の利益とか名譽とかを得る手段としてであるならば、それ

は卑屈であらうが、人我の間に無用の衝突摩擦を起さないで、圓滑に世に處する事を目的とする立場から見れば、これは大勇と稱讃すべきものである。何人でも、自己の主義主張を枉げる事を好む者は無い筈である。それを敢てする事によつて、人我の間の争を防ぎ、自己を救ふと共に他をも救ふといふ方途に出る事は、よほどの勇氣を持つ者でなくては行し難い。佛教で言ふ所の柔順心の實現であるからである。

次に、萬の勝負事に關する例をあげて、それが決して自他を共に満足させるものでない事を述べる。これは如何にもと讀者を背かきしめる。一方が樂しめば他方は口惜しがる。一方が喜ばば他方は不本意に思ふ、といふ風なものでは、たとひそれが實利實益をめぐる事件とは異つて、一時の遊戯に過ぎないものであるにしても、あまり感心出来るものとは言ひ難い。「人に本意なく思はせて我が心を慰まん事」は、徳に背くといふ。その徳は儒教的に言へば、仁の徳を指したものである。又、睦じい間柄同志で戯れ遊ぶ場合に於ても、他人をうまく謀略に乗せ、一杯喰はせなとして、それを以て興ある事とするといふ風な傾向も世には多い。勿論それは親しさのあまりの冗談事ではあるが、他人に一杯喰はせて興するといふ事は、自己の計略のうまさ誇らしく感じ、そこに満足を得ようとするものである以上、禮義を外れたものと言はなくてはならない。何

れにしても、現實の生存利達に於てはもとより、遊戯に於ても、親しい間の冗談事に於ても、他と優劣をあらそふやうな傾向の事柄は、一切これを避けるやうにといふのが、兼好の示した處世の一秘訣である。

かやうに、人に優る事を自らに感じ、それを一つの快心事とする事を兼好は否定したが、人間の性質に於ては、かやうな喜びを求めざる事は、一つの本能的な欲求ともいふべきもので、これを絶滅する事は到底不可能である事をも、兼好はよく知つて居るのである。従つて、さうした欲求の發現に適當な場所を與へて、これを善用する道をも考へてゐる。即ち「人にまさらん事を思はば、たゞ學問して、その智を人にまさらんと思ふべし」といふのがそれに當る。この學問は、當時に於ては、道を中心とした、儒教・老莊・佛教・有職等を含めて考へるべきものであつて、徳文化の學問を主とするものである事は、「道を學ぶとならば、善にほこらず、ともがらに争ふべからず」といふ事を知るべき故なり」といふ條より推測せられる。又、「大きな職をも辭し、利をも捨つるは、たゞ學問の力なり」といふ條からも、この事はたしかめられる。さうした「道の學問」であれば、他にまさらん事を何程希求しても、それには少しの害毒も伴はないばかりでなく、却つて處世上の活教訓をも得られる。そして、そこに於て、人間の優越を求める本能的欲

求を満足させて行かうとする兼好の考へ方は、誠に巧妙なる處世訓と稱すべきものであると思ふ。

次に、この條に關聯して見るべきものに、第九十三段の「己が境界にあらざる物をば争ふべからず」といふ處世訓がある。曰く

くらき人の、人をはかりて、その智を知れりと思はび、更に當るべからず。拙き人の、甚うつことばかりに敏くたくみなるは、賢き人の、この藝におろかなるを見て、己が智に及ばずと定めて、萬の道のたくみ、わが道を人の知らざるを見て、己すぐれたりと思はん事、大きな誤なるべし。文字の法師、暗證の禪師、互にはかりて、己にしかずと思へる、共にあた

らず。己が境界にあらざるものをば、争ふべからず、是非すべからず。と述べて居る。即ち愚かな人間は、よく他人を付度して、「あの者の智慧は、此の程度のことしかわからないものだ」などと考へ易いが、それは決して正しい判断とは言へないものだと言ふのである。例へば、他の事は殆ど何も知らないで、圍碁だけが巧みな者が、賢い人でありながら、碁の道に於てはさして上手でない人を見て、あの者は自分の智に及ばないものだ、と決めてかかる如きで、大きい誤算といはねばならない。すべて、萬の道に於て、自分の専門とする所を他人

が知らない時に、自分だけがすぐれた者であるかの如くに考へ易いものであるが、それは決して當を得たものでない、といふ教訓である。かやうな誤算は、闇愚な者にもあるが、闇愚ならざる者に於て、却つて多いやうである。相當に一藝を物にし得たやうな人が、自己の優越感に溺れる時には、大ていこの錯覺に陥るものである。殊に、伎藝に於ても學問に於ても、専門的に益々分化してゆく現代に於ては、相當の有識者と言はれる人物までが、この誤ちを犯して、自己をすぐれたものだと自惚れやすい傾向にある。その自惚れが、たゞその者の心の中だけにあれば、まだしも恕すべき所があるが、それを言語顔色にあらはして、他人を輕率に見下すといふ風になるとそこに人格の破綻が生じて來て、自他の間に面前からぬ感情のもつれを醸し、處世の上の障害となり易い。文字の法師（専ら教理の學問をして、悟道の體驗を缺く僧）と、暗證の禪師（専ら坐禪證悟に専念して、教理教相に暗い禪僧）とが、互に他を付度して、自分に及ばないものだと考へてゐる如きは、往昔に於けるこの一例である。それで結局、自分の専門とする事以外のことについては、他人を尊重して、それを批評したり、又、優劣を争つたりしないやうに氣をつける」といふ事が、最も無難であり、且つ賢明な生き方である、といふ所に落付くのである。

又、第百卅四段には、「自己を知れ」といふ事について、處世訓をのべてゐる。「自己といふものを眞に知る事が、如何に容易なわざでないか」といふ事を、身にしみて感じるのは、誰でもめいめに、自己を過大視する自惚れ心を持つて居る事實を反省した時に感じる所である。しかし、兼好は此の段では、自惚れの心については觸れてゐない。それは、自惚れ心といふものだけであれば、それは幾分可愛げがあるものである上に、人間からこれを除去する事も、一寸やそつとの事では出来るものではないからであらう。又、自惚れ心だけでは、さして處世上に大きな波紋を生じるやうな事も起らない事を知つてゐるためかと思ふ。さうした心を以て世の中に出しやばつては、甚だ鼻持ちのならないものであるから、その點に留意すれば良いわけである。兼好が「己れを知れ」といふ事を處世上に特に力説するのは、貪る心を以て世に交る醜さを中心としてである。曰く、

高倉院の法華堂の三昧僧、なにがしの律師とかやいふ者、或時鏡をとりて顔をつくづくと見て、我が容貌の醜くあさましき事を、あまりに心憂く覺えて、鏡をさへ疎ましき心地しければ、其後ながく鏡を恐れて手にだに取らず、更に人に交る事なし。御堂の勤めばかりにあひて、籠り居たりと聞き侍りしこそ、有り難く覺えしか。

賢げなる人も、人のうへをのみはかりて、己をば知らざるなり。我を知らずして外を知るといふ理あるべからず。されば己を知るを、物知れる人といふべし。容貌みにくけれど知らず。心の愚なるをも知らず。身の數ならぬをも知らず。年の老いぬるをも知らず。病の犯すをも知らず。死の近き事をも知らず。行ふ道の至らざるをも知らず。身の上の非を知らねば、まして外のそしりを知らず。但し、容貌は鏡に見ゆ。年は數へて知る。我が身の事知らぬにはあらねど、すべきかたのなければ、知らぬに似たりとぞ言はまし。容貌をあらため、齢を若くせよとはあらず。拙きを知らば、何ぞやがて退かざる。老いぬと知らば、何ぞ閑に身を安んぜざる。行おろかなりと知らば、何ぞ茲を思ふこと茲にあらざる。事すべて、人に愛樂せられずして衆に交るは恥なり。かたち醜く心おくれにして出で仕へ、無智にして大才に交り、不堪の藝をもちて堪能の座に列り、雪の頭をいただきて盛りなる人に並らば、況んや及ばざる事を望み、かなはぬ事を憂へ、來らざる事を待ち、人に恐れ人に相ぶるは、人の與ふる恥にあらず。食る心にひかれて、自ら身を辱かしむるなり。食る事やまざるは、命を終ふる大事、今ここに來れりと、たしかに知らざればなり。と言ふのである。先づ最初に、高倉院の法華堂の三昧僧某が、鏡を見て自分の顔の醜い事を恥し

く思ひ、其後は鏡を恐れて手に取らず、衆に交る事をも恥ぢて、只管に籠居したといふ巷説を紹介して、「有り難く覚えしか」と、その三昧僧の行狀を讚美して居る。普通の人であれば、小心者であるとか、僧にも似合はぬ物恥ぢをした者であるとか、さうした冷評を下すであらう心に對して、有り難き志の者であると讚美して居るのは、「自己の拙き事を知らば、直ちに退くべきものである」といふ事に對する伏線的例話である爲であるが、又、兼好の好む所に合した種な例であつた事によるものと思ふ。

次に兼好は、「賢げなる人も、人の上をのみはかりて、己をば知らざるなり」といひ、「我を知らずして、外を知るといふ理あるべからず」と言ひ、「されば、己を知るを、物知れる人といふべし」と述べてゐる。「賢げなる人」とは、賢人ではなくて、賢人らしく振舞ふ人である。賢人ぶる人間である。それは愚人に比べれば上等の人間であるが、賢人に比べれば數段の下位に屬する人物であるに過ぎない。さういふ人物は、他人の事については、甚だ利巧に批評し批判するものであるが、自己自身の認識に關しては全く盲目であつて、少しもこれを知らない。自己批判の眼を缺いた者である。しかも、自己自身をさへ知ることの出來ないほどの者が、他人を知る事が出來よう筈はないのであるから、この賢げなる人が、他人の上に關して批判批評を下したとて、そ

これは眞に他を知り得た批判とは言ひ難いものである事も明瞭である。眞の賢人と言ひ得る人は、自己を知る明智のある人であり、さうした明智の人であり得て、はじめて他をも知り得るものである、といふのが兼好の言ひ度い所である。而して次に兼好は、世上に自己を知らぬ者の多い事をのべて、己の容貌の醜きを知らぬ者、己の心の愚かさを知らぬ者、己の藝の拙さを知らぬ者、己の身分の數ならぬを知らぬ者、己の年の老いたるを知らぬ者、己が身を病の犯すを知らぬ者、己の死の近きを知らぬ者、己が道の行ひの不足を知らぬもの、己の身の上の非を知らぬ者、他よりの謗を知らぬ者などの數々を列挙して、先づ我々を自己反省に導いて行き、次で、容貌は鏡で知る事が出来、年齢は數へて知る事が出来るといふ風に、その他についても、これを知る事は出来るものであるが、それを單に知るだけでは、未だ眞に知つたものとは稱し難く、眞に知るが爲には、それを知つて、身を處する處し方まで實行が伴ふことを必要とする由をのべる。實踐の伴はない知は眞知ではない。知は行と合してはじめて眞知たり得るといふのである。上の例で言へば、容貌の醜きを知つて後は、兼好に交るを避けて引き籠つた三昧僧の如きは、知る事が直ちに身の處し方にまで連なつて居る點に於て兼好の稱讃したものであり、拙きを知らば直ちに身退くべく、古いぬと知らば、身を閑かに安く

する境涯に退くべく、行ひが疎かであつたと知るならば、常住一念に行を勵む事にのみ心を用ひるべきである、といふのも、眞に知る事が如何に處世の上に實行となつてあらはれねばならないものであるかを、示したものと見るべきである。次に兼好は、「すべて、人に愛せられずして、兼好に交るは、大なる恥なり」と述べてゐる。愛樂とは愛し望まれる意である。他人から愛せられず交りを希望せられないやうな身である事を知らないで、兼好に交るといふ事は、我が身の大きな恥辱である、といふのである。例へば容貌も醜く心も愚かでありながら出で仕へ、無智の身でありながら大才の人の中に交り、不器量な藝でありながら堪能者の中に交り、老人でありながら壯年の人と立ち並ぶ、などといふのが、それに當る。それは我と我が身に恥辱を與へる所行である。況んや、さうした交はりを敢てして、及ばざる望みを達しようとしたり、叶はぬ事を嘆いたり、來さうにもない幸運を待ち願つたり、他人に恐れ、或は他人に媚びたりするに到つては、貪欲心に引かれて自ら自己を汚辱するものであつて、全く唾棄すべき振舞であるとのべる。そして、かやうな振舞の根源は貪欲心に發するものであるが、その貪る心事の止まないのは、命終の大事が眼前に迫つて居るといふ事を、眞に自覺して居ないから發するものであると結論して居る。世の無常を眞に自覺すれば、自然に貪る心も薄くなり、

貪る心が薄くなれば、我が身を恥しめてまで世に出で交はらうといふやうな氣持もなくなり、自然に我が身を、安らかに閑かな境涯に引退させる事ともなつて、人生の生き方に過誤なからしめ得るといふのである。

自己を知れといふ事は、身の缺陷や不足を自覺せよ、といふ意味に於て儒教的である。缺陷や不足を自覺するならば、それは當然に身の處し方の實行の上に、何等かの形をとつてあらはれねばならない、といふのも、知行合一思想によつてゐる。その實行實踐が、我が身を世上の交りから引退せしめて、閑靜な境地に入らせよといふ方向に向けられる時、老莊的な色彩を帯びて來る。そして多くの人が、其の實踐が出来ないで、やはり世上の交りに戀々として居るのは、「貪る心」に引かれて居る結果であると斷じた處は、老莊的であると共に佛教的である。「貪る心」の止まないのは、命を終ふる大事が身に迫つて居る事を、眞に自覺し得ない故であると言ふ論は、佛教思想によるものである。かやうに、兼好の論ずる處世訓は、儒佛老の各方面から巧妙に組織せられて居るのであるが、それ等の各思想は、兼好自身に於ては、分離して存在するものではなくて、渾然融合して、兼好の人生觀と化して居るものであると考へるべきであらう。

兼好は、處世上に於ては、大體に於て消極的に控へ目にする事、他に求めずして自己に反省する事、等をその理想としてゐるが、人生として眞に求むべき事柄に關しては、勇敢に進むべき事をも提唱してゐる。第百五十五段に

世にしたがはん人は、先づ機嫌を知るべし。ついで悪しき事は、人の耳にも逆ひ心にも違ひて、その事成らず。さやうの折節を心得べきなり。但し、病をうけ、子産み、死ぬる事のみ、機嫌をはからず。ついで悪しとて止む事なし。生住異滅の移り變る實の大事は、たけき河の漲り流るるが如し。しばしも滯らず、直ちに行ひ行くものなり。されば、眞俗につけて、必ず果し遂げんと思はん事は、機嫌をいふべからず。とかくのもよひなく、足をふみとどむまじきなり。

といふのがそれである。普通に世間に順應して行くためには、機嫌（物の時機・場合）といふものを、第一に心得てゐなくてはならない。時機の悪い時に物事を言ひ出しては、他人の耳にも逆らひ心にも違つて、その事は成功するものではないといふ。これは正にその通りであつて、人情の機微をよくとらへた忠告である。しかし、それだけで世の中を渡れば良いかといふと、それだけでは、たゞ醉生夢死で、折角生れた甲斐もなく、生涯他人の顔色をうかがつて、一生は暮れて



しまふ。のみならず、生住異滅の變化は、機嫌などに頓着なくて、大河の漲る勢を以て行はれて行く。従つて明日ありと頼み明年ありと豫期する事は出来ない。時機の熟するを待つ中にも無常は容赦なく訪れて来る。さうした人生であつて見れば、自分が「此事だけは是非とも果し遂げた」と決心した事については、即刻に、何等の躊躇もなく、斷乎としてこれに慕進しなければならぬ、といふのである。ここに兼好の積極的な一面がはつきりと示されてゐる。而して兼好はこの「果し遂げんと思はん事」は「眞俗につけて」と言つて居るが、彼の眞に望む所は、眞諦即ち佛道に入る事であつて、俗諦即ち世俗に關係した方面に於ては、さして深い關心を示して居ないのである。しかし、「世に従はん人は」といふ冒頭の書き出しに照應せしめて考へる時、これを世俗の世界にも擴充して考へる事は、我々に於ては少しも差支ないと思ふのである。

(四) 交際論

處世に關して最も具體的な問題は、人と人との交りである。兼好がこの方面に於て、如何なる態度を好ましいものとして居たか、さうした一面を調べて見るのも、興味が深い。

兼好は「善友(イ)よき友・悪しき友

の第百十七段に、友とするによきもの、わるき者を列挙して、  
友とするに悪き者七つあり。一つには高くやんごとなき人。二つには若き人。三つには病な  
る身強き人。四つには酒を好む人。五つには猛く勇める兵。六つには虚言する人。七つに  
は欲ふかき人。よき友三つあり。一には物くるる友。二つには醫師。三つには智慧ある友。  
と、簡明に率直に述べてゐる。高貴な人を友として持つ事は「所謂世渡り上手」といはれる種類  
の人々が好んで願ふ所であり、それのつてによつて、利益や便宜を得ることを目的とするもの  
であるが、兼好がこれを悪きものの中に入れたのは、さうした高貴な身分の者は、眞の人情の機  
微に通ぜず、愛憎の念が強くと且つ忽ちに變じ易く、且つ人々から御無理御尤もで奉られてゐる爲  
に、我儘である點などを厭ひ退けたものであらう。さうした人を友としては、機嫌をうかがふに  
汲々として、己が心の平和を保つ事も出来ないからである。「若き人」を友とするに悪き中に入れ  
たことについては、兼好自身が相當の老年に及んでゐた爲に、自分の友としてはふさはしく感じ  
なかつたによると考へる事も出来るが、彼が老年と若年者を比較してゐる第百七十二段の物の見  
方は、その理由の根本をなすものと見られる。そこには  
若き時には血氣うちに餘り、心物に動き情欲多し。身を危ぶめて碎け易きこと、珠を走

ちしむるに似たり。美麗を好みて財を費し、是を捨てて昔の袂にやつれ、勇める心さかりに  
 式をして物と争ひ、心に恥ぢ恨み、好む所日々定まらず。色にふけり情にめで、行をいさぎ  
 よくして百年の身をあやまり、命を失へるため願はしくして、身の益も久しからむ事をば  
 思はず。好ゆる方に心ひきて、永き世語ともなる。身をあやまつことは、若き時のしわざな  
 と若年者の通有の缺點を指摘してゐる。かやうな者を友として持つ事を、危険な事と考へたのは  
 自然である。これに比べると老いたる者は、老いては心おのづから静かなれば、  
 老いぬる人は、精神衰へ、淡くおろそかにして、感じ動く所なし。心おのづから静かなれば、  
 無益のわざをなさず。身をたすけて愁ひなく、人のわづらひ無からん事を思ふ。老いて智の  
 若き時にまされる事、若くして容貌の老いたるにまされるが如し。若き時は、  
 といふ長所を持つ。智に於てまさり、自らを保つこと安らかに、他に愁を及ぼす事を恐れ、執着  
 も薄く、無益のわざをしない、といふ如き友人であれば、友としては最も安全であるといふので  
 ある。第三に「病なく身強き人」を悪しき友の中に加へたのは、醫師を良き友の中に加へた事と  
 の對比によつてその氣持は知られるが、これは單に兼好自身が病身であつたといふやうな個人的

な理由ばかりに依るものではないやうである。健康で強壯な人は、自己の健康な爲に、病の苦痛  
 を経験しない。従つて他人の病に對しても同情の念が甚だ薄いし、思ひやりも乏しい傾向がある。  
 その同情や思ひやりの念の乏しい點を、物足りなく感じたためであらうと思ふ。面白い標準の立  
 て方である。第四の「酒を好む人」を悪き友に數へた理由は、既に述べた兼好の「酒の論」(百七  
 十五段)に於ける前半の斥酒論に、委曲を盡して描かれてゐる所である。第五に「猛く勇める兵  
 を友とするに悪しき者としたのは、勿論兼好の清閑を希求する人生觀とは正反對なものである爲  
 であるが、兼好の武人觀を見るべきものとしては、第八十段に、當時の法師が武勇を好むといふ  
 厭ふべき風俗も、太平記などに見える南都北嶺の僧兵などの跋扈はその好き例である十一のある  
 事を慨歎した後

法師のみにあらず、上達部・殿上人、上さままで、おしなべて武を好む人多かり。百度戰  
 ひて百度勝つとも、いまだ武勇の名を定め難し。その故は、運に乗じてあだを碎く時、勇者  
 にならずといふ人なし。兵盡き矢きはまりて、遂に敵に降らず、死をやすくして後、始めて  
 名をあらはすべき道なり。生けらん程は武に誇るべからず。人倫に遠く禽獸に近き振舞、そ  
 の家にあらずば、好みて益なき事なり。

といふのがある。武者を以て「人倫に遠く禽獸に近き振舞」であると見、武士の家門に生れてそれを職とする者であればともかく、然らざる者が好みて益のなきものである、と断じ、武士であつても「生けらん程は武に誇るべきものではない」と述べて居る所によつて知られる。「猛く勇める兵」は、武を憑み武に誇る傾向の武士である。到底兼好の好みとは合致し得るものではない。第六の「虚言する人」や、第七の「欲深き人」が、友とするに悪しきものである事は論ずるまでもないであらう。

兼好が「よき友三つあり」として三友をあげたのは、論語の益者三友に倣つたものであると古註に述べてゐるが、論語が、「直を友とし、諒を友とし、多聞を友とすれば、益あり」としてゐるに比べると、兼好の挙げた三友は甚だ人情の機微に觸れたもので、我々をして、微笑を催さしめるものがある。第一に、「物くるる友」を挙げたのなどは、誠に興味が深い。人情の自然を衝いてゐる。そしてそれを正直に堂々と述べて居る所なども、徒然草が萬人に好かれる所以である。これに對して、「兼好の言葉は矛盾してゐる。何となれば、物くるる友を以て良き友とするのは、欲深きものである。然るに、欲深き人は彼は悪友として挙げた所である。自己の欲深き事は棚に上げて、他人の欲深きを斥けるのは片手落ちの沙汰である」といふ非難を加へてゐる考へ方も、

古註には見られる。しかし、それは理論であり理窟であつて、それららゐる事を兼好が知らぬ筈はないのである。理窟は正に其の通りであるが、人情は理窟のままに動くものではなくて、更に深い根柢から我々を動かして来るものである。兼好はさうした事の止むに止まれぬ勢をよく知りかけた人生批判者であるから、敢て「物くるる友」をよき友の中に先づ數へ上げたのである。第二に「醫師」を良友の中に加へたのは、病苦を救うてくれる爲であつて、これも、人間の最も切なる願望の一つである。これと關聯して見るべきものは、兼好が人生に最も必要なものとして、衣食住の三つをあげた後に、薬といふものを附加して論じてゐる條である。第二百二十三段に人の身に、止むことを得ずして營む所、第一に食ふ物、第二に着る物、第三に居る所なり。人間の大事、この三つには過ぎず。飢えず、寒からず、風雨にかされずして、閑かに過ぐすを楽しむとす。但し、人皆病あり。病にかされぬれば、その愁忍びがたし。醫療を忘るべからず。薬を加へて、四つの事、求め得ざるを貧しとす。この四つ缺けざるを富めりとす。この四つの外を求め營むを驢とす。四つの事儉約ならば、誰の人か足らずとせん。兼好のいと述べてゐる。佛教では、「生老病死」を四苦として、その中に「病」をあげてゐるが、兼好のいふ如く、病の無い人は先づ絶無であり、病苦は、何にもまして忍び難いものである以上、醫師を

第二に良友として擧げたのは、人情に徹した見方と言つて良いであらう。第三に良友として「智慧ある人」をあげたのは、彼のみでなく、何人も望ましい人物であるが、讀書を好み、道を楽しみ、文藝にも通じた人といふものは、その教養が自然に人格に潤ほひを持たせ、眞の人間らしい味はひを出させるものである點を考へれば、これこそ最も理想的な友といひ得るものであらう。

(ロ) 訪問及び受訪の心得

交友の問題で、他人を訪問する時の心得をのべてなる條にも、面白い見方がある。第七十段は、

「さしたる事なくて、人の許行くは、良からぬ事なり。用ありて行きたりとも、その事果てなば、疾く歸るべし。久しく居たる、いとむづかし。用なきは、人の間を去るべし。人の間を去るべし。人と對ひたれば、詞多く、身も草臥れ、心も閑ならず。萬の事障りて時を移す。互のため益なし。厭しげに言はんもわるし。心づきな事あらん折は、なかなかの由をも言ひてん。同じ心に、對はまほしく思はん人の、つれづれにて、今しばし。今日は心閑かになど言はんは、この限りにはあらざるべし。阮籍が青き眼、誰も有るべき事なり。」

その事となきに人の來りて、長閑に物語りして歸りぬる、いとよし。又文も、久しく聞えさせねば、などばかり言ひよせたる、いとうれし。

とあるのがそれである。先づ「用事なくして他人を訪問する事を良くない」としてゐる。又「用事があつても、その所用の話が終れば、長居しないので、さつさと歸るべきである」といふ。長居をしてゐる事は、まことにうるさく嫌なものだといふ。それ等は、如何にもと思ふ。訪問を受ける側から言へば、以上の心得のある人には好感を感じ、さうでない人には嫌悪を感じる。殊に、多忙な壯年や、體力の衰へた老年になればなるほど、この感は深い。

次に、訪客でも受訪者でも、お互に對坐してゐると、黙つてつくねんとしてゐるわけには行かないので、つい何かしゃべる事となり、しゃべつてゐると、氣疲れがし、又身體も疲れて來る。つまり無意識の中に緊張を持續してゐる爲である。そしてその間に時間を取られて、仕事の豫定も狂ひ、萬事に差障りが生じて來る。だから、お互に益する事は何もない事になる。さうかと言つて、訪客に對して、無愛相な不快な應答をしてゐるといふのも、どうもあまり良くない感じがする。むしろ、差障る事などがあつて、長話などは困るといふやうな場合には、却つてその事をはつきりと言つた方が、氣の乗らぬ受け答へをして、内心いらいとぢれてゐるよりは、すつ

と氣が利いたやり方であらう。以上の兼好の考へ方も、如何にもと同感される所である。以上は訪問一般論であつて、何れかと言へば、特別な必要のない限りは、訪問は他人の迷惑になる事だから、差控へるが良く、萬一よんどころない事情で訪ねるにしても、用件が終れば、さつさと暇を告げるが良いといふ消極的な立論である。一般論としては、正に然るべきものである事は、私共も常に感じて居る所であつて、六百年前に兼好がかく感じたといふ事は、人情に古今なしの感慨深いものがある。それと同時に、我々には氣の合ふ友人關係があり、話し合ふ事に樂しさを感ずる友がある。さうした者については、兼好も右の一般原則の例外を認めてゐる。即ち氣の合つた同志で、話し合つて居たく思つてゐる受訪者が、折よく仕事もなくつれづれの状態で居る際で、「もう暫く話して行かないか。今日はのんびりと話し合ひ度い氣がする」と引きとめられるやうな際には、長話しに興ずるも良いといふのである。實際、氣の合つた同志であると、只黙つて差向つてゐるだけでも、自然に心と心が通ひ合ふやうな氣持のするもので、少しも疲れもせねば又退屈も感じない。不思議な現象であるが、誰にもこの經驗はあるものである。晉の阮籍が、好きな友人には青眼(和やかな眼つき)で對し、好ましくない訪客には白眼(睨みつける眼つき)を以て對した、といふのを引いて、これは阮籍のやうに露骨なやり方でないにしても、誰

にでもある事だと述べて、人情に東西の別のない事を語つてゐるのも面白い。最後に、別段の用事もないのに、ぶらりと訪問して来て、のどかに物語りをして歸つて行く、といふのも、又面白いものだ」といひ、「手紙なども、あまり水らく無沙汰をしてゐたので……」などと書いてよこしたのも、又うれいものである」と述べてゐるのは、一寸見ると、最初の「さしたる事なくて、人のがり行くはよからぬ事なり」といふ意見と矛盾してゐるやうであるが、その中心點に相違がある。即ち、相手から何かを求める心あつての訪問と、求める心を何等持たない訪問とのちがひである。求める心を持つての訪問は、受訪者に取つては迷惑を感じる場合が多く、自然に氣持が固くなり易い。さうでなくて、極く氣樂に、特別の用件もなくぶらりと訪ねてくれる友人といふものに對しては、氣が許せる。その相違が、受訪者の心持をなごやかにする爲である。手紙でも同様で、用件を持ち込まれるよりは、久瀾を謝するといふだけのものの方が、はるかに受取る方の心持はらくである。その點を中心として、最後の段を附け添へたものだと考へられる。表裏両面の消息を盡した書きさまで、一向きに偏しない所、兼好のいつもの周到さのあらはれである。

(八) 交際の要訣——誠實と敬と言葉少な——

世人との交際に關する一般的な心得として、兼好は二百卅三段に次の如く記してゐる。

萬のことがあらじと思はば、何事にも誠ありて、人を分かすうやうやしく、言葉少なからんに  
 はしかじ。男女、老少、皆さる大こそ良けれども、殊に若く容貌よき人の、言美しきは、忘  
 れがたく、思ひつかるるものなり。萬のことがは、馴れたるさまに上手めき、所得たる氣色し  
 むるで、人をないがしろにするにあり。誠實と敬の心と、寡言との三つが大切であると  
 茲では、交際に當つての心掛けとして、「誠實」と「敬の心」と「寡言」との三つが大切であると  
 してゐる。誠實の心は人の信を得、敬の心は咎を防ぎ、言葉の少い事はゆかしさを感ぜしめる。  
 これだけが實行出来れば、處世上に於て頭く事は先づ無いと言つて良いであらう。その中でも、  
 言葉のうるはしき事は、最も望ましいとしてゐる。それは、言葉は心の窓ともいふべきものであ  
 り、言葉を通じてその人の心がうかがはれるものであるからであらう。言葉が真にうるはしい事  
 は、その心のうるはしきによるものであり、いくら言葉を飾つても、心のうるはしく無い人の言  
 は、やがてその底が見えて来るものである。年が若く美しい容貌の主で、しかも言葉がうるはし  
 い時には、忘れ難く懐しさを感ぜしめるものである、といふ。これも人情の機微に觸れてゐる。

そしてあらゆる咎のもとには、いかにも物馴れてゐるぞと言はんばかりに上手らしく振舞ひ、得  
 意然たる様子で、他人を見くだしたやうなやり方をする。ことから生じて來るといふ。敬の心を  
 失つたやり方である。敬の心を失ふといふのは、結局は自己に慢心があつて、他人を見くびる所  
 から生れる。それが世渡りの失敗の原因であるといふのである。簡単な言葉であるが、よく急所  
 をついでゐると評すべきである。

(三) 分を知る

次に、他に對しての禮儀としては、己の盡すべき本分を盡す事が大切であるが、その際にも世  
 人の誤解してゐるやり方が往々に行はれてゐる事を注意して

貧しき者は財をもて禮とし、老いたる者は力をもて禮とす。己が分を知りて、及ばざる時は、  
 速かにやむを智といふべし。許さざらんは、人の誤なり。分を知らずして、強ひて勵むは、  
 己が誤なり。貧くて分を知らざれば盗み、力衰へて分を知らざれば病をうく。

と第百三十一段に述べてゐる。茲では、自分の分際や力量といふものを良く自覺して、分際力量  
 に過ぎた事であつたならば、速やかに止めるのが良いとの注意が主となつて居る。例へば貧しい  
 身でありながら、多くの金銀を費さねばやれないやうな響應をするとか、老人で體力も衰へて居

る身でありながら、他人の爲に種々と奔走したり助力したりするなどといふのは、其の志は嘉すべき所があるにしても、それが眞の「禮」であるかといふと、それは分際力量をわきまへない點に於て、「過ぎたるは猶及ばざるが如し」であるといふのである。貧しくて分を知らない時には、盗み心が往々にして萌す恐れがあり、老いて分を知らない時には、過勞の爲に病氣に陥り易い、といふのは、其の弊の極まる結果を示したものである。若し、貧者に對して立派な養應を望み、老人に對して奔走を要求するやうな相手であれば、それは相手の人の強慾といふべきものであり、さうした相手に交を求めても、何等益する所はない筈であるから、早速に交りを絶つて退くのが賢明であり、自分の分際を超えた事を敢てしてまでも、他人に喜ばれ度いといふやうな考へを起す事は、やはり他から何物かを得ようといふ貪心が無意識の中に働いてゐる爲であるから、それも決して感心した事とは言へない。しかし、かやうな實例は古今東西にわたつて夥しくあるものであつて、支那の古代の曲禮にも「貧者は貨財を以て禮となさず、老者は筋力を以て禮となさず」と見えてゐる。兼好は、これを中心として、この處世訓を書いたものと思はれる。

(五) 品位への希望

(イ) 物の言ひぶり——人柄の上品下品——  
實際交友に於て、最も大事な事は言葉の問題である。言葉を通してその人柄なり性格なりは、最もよくあらはれる。兼好が「言うるはしき」事を以て、又「言少き」事を以て、良き人の條件としてゐる事は前に見たが、その「うるはしさ」は如何にしてあらはれるか。上品下品の差別はどうした處に出るものか。さうした事について、兼好の語る所を見ると、第五十六段に「あいつ久しく隔りて逢ひたる人の、我が方にありつる事、數々に残りなく語りつづくるこそ、あいさになけれ。隔てなく馴れぬる人も、程經で見ると、恥じからぬかは。次ぎさまの人は、苟且に立ち出でて、けふありつる事とて、息もつきあはず語り興するぞかし。よき人の物語するは、人あまたあれど、一人に向きて言ふを、おのづから人も聞くにこそあれ。よからぬ人は、誰ともなく、數多の中にうち出でて、見ることのやうに語りなせば、皆同じく笑ひののしる、いとらうがはし。をかしき事を言ひてもいたく興せぬと、興なき事をいひてもよく笑ふにぞ、品のほど、はかられぬべき。」

と語つてゐるのは、その解答の一つである。先づ、久々で相逢つた際に、自分の方に有つた事ばかりを、一言に残る所もなく、のべつ幕なしに話しつづける事を取り上げてゐる。これは世間に多い事であり、殊に女性にこの傾向が強い。それは久々で逢つた嬉しさに、つい氣が弾んで来て、自然にかやうになるものであつて、無理もない事ではあるが、兼好はこれを「あいなし」と評する。「あいなし」とは、奥ゆかしい懐しさに缺けてゐる、といふ意である。何故かといへば、いくら以前には隔てなく馴れ合つた友でも、長らく別れてゐる中には、それ相當の修養も積み、身分などの上にも變りもありなどして、吳下の舊阿蒙ではなくなつて居る場合もあり、又、その友の境遇や物の考へ方なども、以前とは變つてゐる場合もあり得るわけであるから、少しは遠慮と慎しみを以て對すべきである、といふのである。第二に、教養や品位に於て劣つた人間の物の言ひぶりを評して、一寸人仲へ顔出しをしても、直ぐに「今、大變面白い事があつたよ」などと切り出して、息をもつがずに語り出して興するものだといふ。かやうな人々は、何かの珍聞でもあると、誰も聞かない先きに自分が披露することは、非常に得意を感じる人であつて、世にはその例が多い。所謂「金棒引き」と稱せられる連中である。兼好はこれを以て、無教養な者の陥り易い話ぶりであると貶するのである。又、さうした人が人仲で話す話しぶりは、満座の中へ乗り出し

て、誰に話すといふ相手も定めず、手眞似身振り入りで、まるで眼の前の出来事を見るやうな風に、冗舌をふるふものであり、聞く人も、その芝居氣たつぶりな話しぶりに、げちげちと笑ひながらをかきさうに聞きはやすといふ風で、實に騒々しいものであるといふ。然るに、上品な人の話しぶりは、たとひ澤山の聞き手が居ても、その中の誰か一人に向つて、その人に話しかけるやうにして物しづかに語る。他の人も自然にその話に耳を傾ける、といふ風な話しぶりであるし、他の話を聞く時でも、をかしい話を聞いてもさして深く興するといふ風をしないで、他所ながら聞くやうな態度をとるものであると述べる。そして、結論としては「興なき事を言ひてもよく笑ふ者は下衆と判じて良く、をかしき事を言ひてもいたく興せぬ者は、上品な人柄だと心得て良いと言ふ。この中には、兼好の趣味感も加へられては居るが、我々自身の經驗に徴して見ても、兼好の言ふ所は正しく當つてゐることを感じる。

この兼好の考へ方と聯關して見るべきものに、第七十八段の「今様の事どもの珍らしきを言ひ廣めもてなすこと、又、うけられね。世にこと古りたるまで、知らぬ人は、心にくし。今さらの人などのある時、此所もとに言ひつけたることぐさ、物の名など、心得たるども、片はし言ひ交はし、目見合せ、笑ひなどして、心知らぬ人に心得ず



思はする事、世慣れず、よからぬ人の、必ずある事なり。といふ條や、第七十七段の、世にその頃の人のもてあつかひぐさに言ひ合へる事、いろふべきにはあらぬ人の、よく案内知りて、人にも語り聞かせ、問ひ聞きたるこそ、うけられね。ことに片邊なるひじり法師などぞ、世の人の上は、我が如く尋ね聞き、いかでかばかりは知りけんと思ゆるまでぞ、言ひ散らすめる。

といふ條や、又、第七十九段の

何人も入りたぬさましたるぞ良き。よき人は、知りたる者として、さのみ知り顔にやは言ふ。片田舎よりさし出でたる人こそ、萬の道に心得たるよしのさしいらへはすれ。されば、世に恥しきかたも有れど、みづからもいみじと思へる氣色、かたくななり。よくわきまへたる道には必ず口おもく、問はぬ限りは、言はぬこそいみじけれ。先づ、七十八段では、最近のニユースだと言ふわけで、珍しい出来事などを盛んにしやべり歩く者に對して、あまり感服した事ではないと言ひ、世人が知りつくして、もう既に穢の生えてゐるやうな話になつたものまでも、知らずに居るといふ風なのが、奥ゆかしいものであると述べてゐる。これは、知らずに居る事自體が奥ゆかしいのではなくて、さうした世上の噂話などの仲間入りをしたくないで、ひとり閑かに暮してゐるといふ風な生き方に、奥ゆかしさを感じたものであると思ふ。所謂觸れ歩き屋の金棒引きの、下品な無教養さを厭はしく思ふ心が、その背後にあるわけである。又、新しくやつて来た人などのゐる場所で、その土地の者だけが言ひ慣れ心得てゐて、新來の者には譯のわからないやうな言葉や物の名などを、心得た者同志で、話の間にちよいちよといひ合ひ、目を見合せたり笑つたりして、新參者に何事だらうと氣がかりな思ひをさせるなどといふやり方について、それは世間慣れない無教養な人間のよくやる事であると排斥を加へてゐる。實際に自分が新參者となつて他郷へ行つたり、何かの仲間に加はりなどした際に、かうした仕打ちをせられると、何か自分に關して當てこすられてゐるやうに感じ、いらぬ神經をつかふものであつて、わびしい思をするものであるから、世慣れた者ならば心得て、さうした話しぶりはしない筈であるが、井の中の蛙で育つて、教養も持たない連中には、かうした事で優越感を満足させる連中が多いのである。

次の第七十七段では、世の噂話の種になつてゐるやうな事柄を、そんな事には全く無關心でゐ

て然るべきやうな人物が、案外に詳しく事情を穿鑿してゐて人に話して聞かせるといふ風な人物や、又、知らなくてすませてゐる方が良いと思はれるやうな噂話を、根掘り葉掘り聞き尋ねるといふ風な人物を、これも一向に感心しないものだと思つてゐる。その例として、田舎坊主などは、世人の身上に關した事を、まるで自分事のやうに穿鑿し、どうしてそれほど精しく知つたものかと驚かれる程に、しやべり散らすものであると述べてゐる。世を離れた筈の僧侶が、却つて「俗より出でて俗よりも俗なり」と言はれるやうな振舞ひをする事に對して、眉をひそめてゐる兼好の心持がよく感じられると思ふ。

又、第七十九段では、何事についても、自分は一向に知らず造詣もないやうな風にしてゐるが良いと述べ、その證據として、品位の高い教養人は、たとひ自分がよく心得てゐる事でも、決して知つたかぶりをするものではないに反して、片田舎などからさし出て來た者は、どんな道の事についても、實によく通曉してゐるかのやうな口吻をするものであると述べてゐる。都人と田舎人との相違、教養ある者と教養に乏しい者との相違、さうした違ひは、一寸の詞や應待のはしほしにも、はつきりとあらはれる。勿論、田舎者といつても、その中には、都人が恥しさを感ずる程にすぐれた點を持つてゐる者が無いわけではない。しかし、さうした一道に達した者でも、自

分で自分をすぐれた者だと自認してゐるやうな素振りが目立ち、我は顔である所に、もう一つ垢抜けのしない野暮くささがある、と批判してゐる。兼好の趣味感であり、都會人の田舎者観がよくあらはれてゐる。それで結局は、眞によく辨へてゐる道については、決して輕々しくしやべるものではなく、人から問ひかけられない限りは沈黙してゐるのが最もよいことだ、といふ事に落ちつくのである。「實るほど頭の下の稲穂かな」であり、「底ひなき淵やはさわぐ山河の淺き瀬にこそあだ波は立て」である。

(ロ) 都人と田舎人——趣味の高下——

處世論は交友論に連なり、交友論は言語論に連なつて、兼好の好む所は次第に鮮明になつて來るが、「すべてを内輪に控へ目に」といふ態度は、當時の世相に對する嫌惡——田舎者・成上り者・粗野な武士どもの幅を利かして居た時代相に對する反撥——に發し、平安時代的なものへの憧憬によつて、一層に強められたものと考へられる。第三百三十七段の「花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものは」といふ有名な段の中に、都人のよき人と田舎者との比較を試みてゐるが、これなども端的に兼好の好惡を物語つて居るものと思ふ。即ち

よき人は、ひとへに好けるさまにも見えず。興するさまも等閑なり。片田舎の入こそ、色こ

く萬はもて興すれ。花のもとにはねち寄り立ち寄り、傍目もせずまもりて、酒のみ連歌して果ては大きな枝、心なく折り取りぬ。泉には手足さし浸して、雪には下りたちて跡つけないど、萬の物、よそながら見る事なし。

まやうの人の、祭見しさま、いとめづらかなりき。見ごといと遅し、その程は棧敷不用なりとて、奥なる屋にて、酒呑み物食ひ、圍碁雙六など遊びて、棧敷には人を置きたれば、「渡りさふらふ」と言ふ時に、各々肝つがるるやうに争ひ走りのほりて、落ちぬべきまで廉はり出でて、押し合ひつつ、「事も見洩らさじとまぼりて、とありかかると、物毎にいひて、渡り過ぎぬれば、「又渡らんまで」といひて下りぬ。ただ物をのみ見んとするなるべし。都の人のゆゆしげなるは、睡りていとも見ず。若く末々なるは官仕へに立ちぬ、人の後にさぶらふは、様悪しくもおよびかからず、わりなく見んとする人もなし。

何となく葵かけ渡してなまめかしきに、明け離れぬほど、忍びて寄する車どものゆかしきをそれか、かれか、など思ひよすれば、牛飼・下部などの見知れるもあり。をかしくも、きらきらしくも、さまざまに行きかふ。見るもつれづれならず。暮るるほどには、立てならべつる車ども、所なく並み居つる人も、何方へか行きつらむ、程なく稀になりて、車どものらう

がはしさもすみぬれば、塵・塵も取り拂ひ、目の前に淋しげになり行くこそ、世のためしも思ひ知られてあはれなれ。大路見たるこそ、祭見たるにはあれ。

と述べて居るのである。都のよき人は、何に對しても、無暗に好きこのんであるやうな様子を見せず、物事をもて興する興じ方も、淡々としたものであるに比べて、田舎者は、何事にも、あくどくしつこくもて興する。花を見るにも、木の下に立寄り捻ぢ寄つて、傍目もふらずに見詰め、花の下で酒宴を行つたり連歌を張行したりして、とどのつまりには、折角美しく咲いてゐる大きな枝を、無残にも折り取つて、家土産にして歸る、といふ風なやり方をする。夏になれば、清らかな泉などを見ると、直に手足をさし浸して冷涼を食ひ、冬の雪景色に對しては、雪の中へ下り立つて足跡をつけて興する。即ち、物事を他所ながら、閑かに賞玩する事をしないといふのである。この傾向の差異は、子供と大人の間にもある。小兒は必ず物事を他所ながら見るといふ事をしてしないで、執拗にいぢくり廻さねば気がすまない。その點で、田舎人のやり方に共通する所がある。それだけに一面元氣にみち溢刺とした所もあるが、何としても無作法で野人的なといふ缺點は免れ難い。都のよき人が、他所ながら賞玩するやり方は、賞し方に熱意が乏しいわけではなく、十分に賞美するのであるが、物そのものの美を味はふばかりを目的としないで、その周邊の雰圍

氣をも味はひ、閑かに其の空氣の中に浸らうとするのである。そしてその「あはれ」を身にしみて感じ取らうとする。その間の消息は、次の、賀茂の葵祭の見物の仕方にて、更に具體的に生き生きと描き出されてゐる。田舎の見物人は、祭の行列そのものを見ようとする。それ故に、行列が通る際には、非常に熱心に一事をも見落すまいと凝視する。しかし、行列が通らない時は、棧敷に居ても詰らないといふわけで、棧敷には見張り番だけを留めて、自分等は奥の間で、酒宴をしたり、碁や雙六をしたりして、退屈を紛らしてゐる。つまり刹那々に何等かの感覺的刺戟を求め、それによつて生き甲斐を感じるといふ行き方を採らないと満足しないのである。従つて「つれづれ」は、さうした田舎人に取つては、まことに閉口な無聊であるに過ぎない。然るに、教養あり趣味を解する都のよき人は、その「つれづれ」の味はひをも樂しむだけの心の豊かさを持つ。祭の見物に於ても、まだ明けはなれない頃から、忍びやかに車を寄せて、祭の日の大路のさまを閑かに興じ、祭が過ぎて、車も散じ人も歸つて行き、家々の棧敷の飾りも取拂はれて、眼前に淋しく變つて行く大路の有様、さうしたのものにも、一種の「あはれ」を感得する。隨所に主となつて、あらゆるものの味はひにひたる。そこに悠揚として通らぬ落つきが生れ、教養の高さ廣さがあらはれて来る。兼好の好みは、この豊かさを願ふ所にあると見て良いであらう。

## (ハ) 強ひて興あらんと作爲する勿れ

物事を、他所ながら見るといふ態度は、又最も自然に有りの儘に見るといふ態度である。特に或る工作を加へたり、焦點の置き場所を限定したりする事なく、始めから終りまでもよく味はつて、あらゆる角度から、そのものの持つ「あはれ」を味はふ行き方である。さうした行き方が、物事を興ずる場合に、強ひて興趣あらしめようとして、人爲的な工作を加へるといふ風なやり方を斥けることも、又自然であると言へる。兼好は、「あまりに興あらんとする事は、必ずあいなきものなり」とも言ひ、「振舞ひて興あるよりも、興なくてやすらかなるが、勝りたる事なり」とも言ひ、「やすらかに自然に」といふ事を、やはり處世の一訓としてゐるのである。徒然草で有名な、御室仁和寺の僧の足鼎の失敗談や、紅葉狩の趣向の失敗談などは、あまりに興あらんとし、却つて興ざめた結果を招いた笑話の例である。周知のものであるが、本文をあげると、第五十三段の足鼎の失敗談は

仁和寺の法師、童の法師にならんとする名残とて、各々遊ぶ事ありけるに、酔ひて興に入るあまり、傍なる足鼎をとりて頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻を押しひらめて、顔をさし入れて舞ひ出でたるに、満座興に入る事かぎりなし。

しばしかなで後、拔かんとするに、大方ぬかれず。酒宴ことさめて、いかかはせんと感ひけり。とかくすれば、頸のまはりかけて、血垂り、たゞ腫れに腫れみちて、息もつまりければ、打割らんとすれど、たやすく割れず、響きて堪へがたかりければ、叶はで、すべきやうなくて、三足なる角の上に帷子をうち掛けて、手を引き、杖をつかせて、京なる醫師のがり率て行きける。道すがら、人の怪しみ見る事限りなし。醫師の許にさし入りて、對ひ居たりけん有様、さこそ異様なりけめ。物を言ふも、くぐもり聲に響きて聞えず。「かかることは文にも見えず、傳へたる教もなし」といへば、又、仁和寺へ歸りて、親しき者、老いたる母など、枕上に寄り居て泣き悲しめども、聞くらんとも覺えず。

かかる程に、或者の言ふやう、「たとひ耳鼻こそ切れ失すとも、命ばかりはなか生きざらん。たゞ力をたてて引き給へ」とて、薬のしべをまはりに差し入れて、かねを隔てて頸もちぎるるばかり引きたるに、耳鼻缺けうげながら抜けにけり。からき命まうけて、久しく病みわたりけり。

と記されてゐる。描寫が簡潔で且つ生き生きとして居り、事柄が滑稽である爲に、人々に好み讀まれる所である。殊に、京なる醫師の許に伴ひ行く際の異様な有様や、醫師と對座の様子、醫師の言葉の眞面目なユレモアなど、巧みなものと言ふべきである。兼好はこの話には、格別な感想をのべてはゐないが、次の五十四段の紅葉狩の失敗談に添へた感想は、この段にも響いてゐるのである。五十四段には、

御室に、いみじき兒のありけるを、いかで誘ひ出して遊ばんとたくむ法師ども有りて、能ある遊法師どもなど語らひて、風流の破子やうのもの、ねんごろにいとなみいでて、箱風情の物にしたため入れて、雙の岡の便よき所に埋みおきて、紅葉散らしかけなど、思ひよらぬまに、御所へ参りて、兒をそそのかし出でにけり。うれしと思ひて、ここかしこ遊びめぐりて、ありつる苔のむしろに並み居て、「いたうこそ困じにたれ。あはれ紅葉を焚かん人もがな。驗あらん僧達、祈り試みられよ」など言ひしろひて、埋みつる木のもとに向きて、數珠押しすり、印ことごとしく結び出でなどして、いらなく振舞ひて、木の葉をかき除けたれど、つやつや物も見えず。所の違ひたるにやとて、掘らぬ處もなく山をあされども、無かりけり。埋みけるを人の見おきて、御所へ参りたる間に、盜めるなりけり。法師ども言の葉なくて、聞きにくくいさかひて、腹立ちて歸りにけり。あまりに興あらむとする事は、必ずあいなきものなり。

とある。仁和寺の僧が、寺の稚兒を誘ひ出し、雙が岡で愉快な紅葉がりの遊びをしようと企てた。そして普通の趣向では面白くないといふ次第で、その際の酒肴の御馳走を、風流な辨當箱に詰めそれを更に大きい箱に納めて、これを前以て山の好都合な所へ埋めて置き、後に祈禱の效驗によつてこれを祈り出して見せる、といふ珍案を考へたのである。所が、埋めてゐる所をそつと見てゐた人間が、僧侶が御室の御所へ稚兒を誘ひに歸つた間に、これをこつそりと盗み取つてしまつた。その爲に、折角の珍案は、却つて一座を白けさせ、うろたへさせ、果ては聞きにくい言ひ争ひとなつて、——それは折角の楽しみ御馳走が、どうしたものか、無くなつてゐるためであるが——終つたといふのである。これは痛ましい滑稽であるが、兼好はこの滑稽な物語りを終つた後に、「あまりに興あらんとする事は、必ずあいなきものなり」といふ短評を加へてゐる。面白い批評である。

以上は、滑稽な僧侶の失敗談であるが、これに似てゐる感想を洩らしてゐるものに、第二百卅一段の圓別當入道の話がある。

圓別當入道は、雙なき庖丁者なり。或人の許にて、いみじき鯉を出したりければ、皆人、別當入道の庖丁を見ればやと思へども、たやすくうち出でんも如何とためらひけるを、別當入道

さる人にて、この程、百日の鯉を切り侍るを、今日缺き侍るべきにあらず。まげて申し請けむしとて切られける。いみじくつきづきしく、興ありて人ども思へりけると、或人、北山太政入道殿に語り申されたりければ、「かやうの事、おのれは世にうるさく覺ゆるなり。切りぬべき人なくば、賜へ、切らむ」と言ひたらむは、なほよかりなむ。何でふ百日の鯉を切らんとぞ」と宣ひたりし、をかくし覺えしと、人の語り給ひける、いとをかし。

おほかた、振舞ひて興あるよりも、興なくてやすらかなるが勝りたる事なり。賓客の慶應なども、ついでをかしきやうにとりなしたるも、誠によけれども、たゞその事となくとり出でたる、いとよし。人に物を取らせたるも、ついでなくて、是を奉らんと言ひたる、まことの志なり。惜しむ由して乞はれんと思ひ、勝負の負わざにことづけなどしたる。むづかし。といふのがそれである。圓別當入道とは、檢非違使別當藤原基氏の別號であるといはれてゐる。雙なき庖丁者なりとあるから、料理の道に於ても非常にすぐれた腕前を持つて居た人であつたらしい。それが或人の許へ行つた際に、その家で實に見事な鯉を出したといふのである。恐らく主人は別當の庖丁の腕前を見たく思つたのであらうし、一座の人達も、それを希望したものと思ふ。しかし、賓客に對して料理を所望するといふ事は禮儀をわきまへないやり方である爲に、一同も

ためらつて言ひ出し兼ねてゐたのである。その際に、別當は誠に如才のない人であつて、皆の希望を察したので、「自分は此頃、修行のために、百日つづけて鯉の料理をしてゐる最中である。今日もそれを缺くわけには行かない。他に料理せられるべき方も御ありになる事とは思ふが、今日は是非自分にやらせて頂き度い」といふ口實を設けて、庖丁の姿を見せた。一同はこの別當のやり方を、まことに折に似つかほしいやり方であると思ひ、感興ふかく感じたといふのである。然るに或人が此の際の事を北山太政大臣(西園寺實兼)に物語つたところ、實兼は別當のやり方を評して、「自分はそのやうなやり方は、實にうるさい技巧的なものだと思ふ。料理される方がなければ、私に下さい。私が料理しませう」と、素直に言つて、そして料理したら一層良いだらう。百日間鯉料理の修行をつづけてゐるなどといふ事は、どうして有るものか」と評したといふのである。即ち、強ひて興趣あるやうの作爲をした所に、却つて自然の眞實をはなれた嫌らしさを感じたわけで、この話を傳へ聞いて兼好に物語つた人物も、實兼の評を「をかし」と是認し、兼好もそれに同感してゐるのである。

兼好はこの例話をあげた後に、「大方、振舞ひて興あるよりも、興なくてやすらかなるが、勝りたる事なり」と、自然で無技巧で、作爲やつくろひ飾りの無い物事のやり方を、禮讚してゐる

そして、賓客に對する饗應でも、他人に物を興へる場合に於ても、そこに何等かの口實を設けたり技巧的な作爲を構へたり——例へば、實際は買ひ調へた品を、折節他所からの到來物である由に披露したり、興へようと思つてゐる品を自家の重寶で手離し難い品であるがと勿體をつけたり或は何かの勝負事の賭け物にして、わざと負けて、相手に取らせるやうに仕向けたりする如き——する事は、まことにうるさく嫌なもので、少し心ある者であれば、その作爲の裏が見え透いて、却つて感興を害するものだと言ひしてゐるのである。「眞實の心から出た自然さ」といふものを尊ぶのが、兼好の人生觀である。それには汲めども盡きぬ眞心の味はひが湛へられてゐて、なまじひな作爲技巧にまさる事數倍であるが爲である。

(六) 儉素生活への禮讚

——足るを知る心——

兼好は、趣味としては美的情趣的な生活を禮讚して居るが、他の一面には、驕奢を退けて及ぶ限りの簡素な生活に生きる事をも讚美して居る。その代表的なものは、支那に於ける許由や孫晨の生活ぶりを禮讚した條や、我國に於ける松下禪尼や、最明寺時頼の儉素を稱揚した條などであ

る。第十八段には

人は己をつづまやかにし、驕りを退けて財を持たず、世を食らざらんぞ、いみじかるべき。

昔より、賢き人の富めるは稀なり。

唐土に許由といひつる人は、さらに身にしたがへる貯も無くて、水をも手してささげて飲

みけるを見て、瓢箪といふ物を、人の得させたりければ、ある時木の枝に掛けたりければ、

風に吹かれて鳴りけるを、かしがましとて捨てつ。また手にむすびてぞ水も飲みける。いか

ばかり心の中涼しかりけん。

孫晨は冬の月に食なくて、藁一束ありけるを、夕にはこれに臥し、朝にはをさめけり。唐土

の人は、これをいみじと思へばこそ、記しとどめて世にも傳へけめ。これらの人は、語りも

傳ふべからず。

と記されてゐる。「己をつづまやかにして」は、足る事を知り、其の分に安んずる心が中心となつて、そこから發して來る心づかひである。自ら持する事儉素であることは、吝嗇や貯蓄の爲ではなくて、自らの心を外物のために左右させられないが爲である。又、「驕りを退ける事は、一面に於ては他より貪り取る食欲心を制する事であると共に、自らの心を墮落から防ぐ事にもなる。

「財を持たない」といふ事は、驕りを防ぐ爲のよい手段であると共に、財物に對する執着心を離れるよすがともなる。「金持ほど吝嗇である」といふ事は、財多ければ執着心が益々募ることを告げてゐる。「世を食らない」といふ事は、天命のままに随順する事であつて、徒らに長壽福利を貪らうとしない事である。かやうな生活が、人間としては、最も稱讚すべき生活であつて、昔から賢人として世に傳へられてゐる人々の生活は、何れもこの條件をみたしてゐる。賢人で富有な人間は稀であるといふ事實、それを良く考へて見よといふのである。

それならば、人間の生活として、如何なる生活を以て足れりとし、如何なる生活を以て驕りと見るか。兼好の言葉によると、人の身に、止む事を得ずしていとむ所、第一に食ふ物、第二に着る物、第三に居る所なり。人間の大事、この三つには過ぎず。飢えず、寒からず、風雨にかされずして、閑かに過ぐすを楽しむとす。但し、人皆病あり。病にかされぬれば、その愁ひ忍びがたし。醫療を忘るべからず。薬を加へて、四つの事求め得ざるを貧しとす。この四つ缺けざるを富めりとす。この四つの外を求め營むを驕とす。四つの事儉約ならば、誰の人か足らずとせんとす。即ち、足れりとする生活とは、飢えず寒からず風雨にかされず醫藥の備へある生活である。驕りとは、この四つの外を求め營むことであるといふ。飢えずを防ぐ以外に美味を求め、



寒さを防ぐ以外に美衣を求め、雨風を防ぐ以外に居室をきらびやかにするなどの營み、さうしたものは驕りであるといふ。いはば生命を維持するに足る最少限度のものに於て、缺けなければ、それを以て「足りたる生活」と見るべしといふのである。

許由は支那の堯の時代の高士であつて、堯が天下を譲らうといふのを聞いて、耳が汚れたといつて潁川で耳を洗つたと傳へられてゐる人物である。全く無一物の生活に徹してこれを樂しみとした。水をも手ですくうて飲んでゐるので、人があはれんで瓢箪をあたへた。瓢箪は水を飲む柄杓に用ひるものである。許由はこれを木の枝にかけて置いた所、風に吹かれて鳴つたので、かしましいと言つて、これをさへ捨て、又以前のやうに、水を手ですくひ飲んだ。といふのである。兼好はこの話を記して「如何ばかり心の中涼しかりけむ」と評語を下してゐる。ここに兼好の庶幾する所がはつきりとあらはれてゐる。即ち、簡素な生活に徹する事は、「心の中を涼しくすることにある。換言すれば、少しの煩悩もない、澄み渡つた大虚のやうな、清爽極りない心境に入るといふ事が、最も望ましい事であると考へてゐるのである。孫晨に於ては、衾(夜具)をも持たない人で、藁一束を以て衾の代用とし、それに晏如として満足してゐたといふ事を傳へてゐる。そして、支那人は、かやうな生活態度を立派なものだと思つたからこそ、かやうな話を傳へて來、

たものであらう、と述べ、今日の日本人では、語り傳へることさへもしないであらうと慨歎してゐる。けだし、當時の上下一般が、ひたすらに財寶の慾に驅られて、争ひ合ひ奔走合つてゐた世相に對しての慨歎である。

許由や孫晨の話は、語りぐさとしては面白いが、そこには、言はば極端なるものが示されてゐるので、その生活態度をそのままに兼好時代に適用させようとしても無理である事は、兼好自身もよく心得てゐたと思はれる。彼の希望は、心の清涼を得て、財寶驕奢の汚濁からこれを離れば、彼の儉素主義は實行せられるわけである。兼好が好ましい話柄として傳へてゐる最明寺時頼の逸話には、

平宣時朝臣、老の後、昔語り、「最明寺入道或宵の間によばるる事ありしに、「やがて」と申しながら、直垂の無くて、とかくせし程に、又使來りて、「直垂などのさぶらはぬにや。夜なれば、異様なりとも、疾く」とありしかば、萎えたる直垂、うちうちの儘にて罷りたりしに、銚子に土器とり添へて持て出でて、「この酒をひとりたうべんがさうさうしければ、申しつるなり。肴こそ無けれ。人はしづまりぬらん。さりぬべき物やあると、いづくまでも求

め給へ」とありしかば、紙燭しよくさして、くまぐまを求めし程に、臺所の棚に、小土器こつはらひに味噌の少しつきたるを見出でて、「これぞ求め得てさぶらふ」と申ししかば、「事足りなん」とて、心よく數献すけんに及びて、興に入られ侍りき。その世には、かくこそ侍りしか」と申されき。といふのがある。これは平の宣時のりとき（鎌倉幕府の執權連署の役をつとめた陸奥守大佛おほほとけ宣時である）が、最明寺入道時頼の人物を追慕し、その簡素な生活ぶりを語り、且つ時頼の心づかひのこまやかさを稱讃した話であつて、兼好自身の感想は何等加へられてはゐないが、この話を記した兼好は、宣時の言葉に大きい感動を受け、それをそのままに傳へる事によつて、自分の同感の意味をも傳へようとしたものと思はれる。執權北條時頼といへば、當時の武將としては最上の位置と權勢の持ち主である。若し彼が欲するならば、如何なる驕奢も意のままになる身の上であるが、さうした事を斥けて、極めて簡素な生活に生き、そこに安らかな楽しみを求めてゐる點に、人間時頼の偉さがあるのである。夜に入つて酒を嗜むに、一人で飲むのは淋しいからといつて、宣時を招いたといふのは、かやうな飲酒は彼には例外の事であり、その楽しみを、部下の宣時にも分ちたいとの氣持と察せられる。そして、宣時の來やうが遅いのを案じて、「外出用の直垂が無いのか。夜の事だから、變な風でも差支ない。疾く來給へ」と、察しの良い口上を重ねて送る親切さ

といひ、宣時を迎へて、自ら銚子と盃を持つて出て、「もう家人どもは寢入つて居るであらうから」と、起すを不憫がるあはれみ心といひ、宣時に、「何か肴になるやうな物が無いか探して見してくれ」と注文する打とけた態度といひ、如何に時頼が人情味のこまやかな武將であつたかが、實によくあらはれてゐる。宣時も又、手燭をつけて隈々までさがし求め、臺所の棚から、やうやく小土器に味噌の少しばかり盛つてあるのをさがし出して、「これぞ求め得てさぶらふ」と持つて來たなど、實に面白い。執權の家の臺所がこの程度のものであると氣づいた宣時は、定めて深い感動を受けたであらう。僅かな味噌の残されてゐる小土器も、此の時の宣時には山海の珍味に等しく尊く感じたにちがひないと思ふ。そして、さうした、言はば見苦しい物をさがし出して來たのに對して、「それで十分だらうよ」と言ひながら、快よく數献を傾けて、興に入つたといふ時頼の態度は、實に安らかであり天真であつて、後々までも宣時をして、「其の世には、かくこそ侍りしか」と、追慕措く能はざらしめたのである。簡素な生活をする事は望ましい事であるが、それを檢素だと自ら意識してゐるのでは、まだ至れるものとは言ひ難い。檢素を檢素と感じなくなつて、はじめてその生活は眞の檢素となり得たものであると言ひ得る。そして、さうした「板についた」檢素さに、限らない安らかさを感じ楽しさを感じるに至つて、檢素は人間性を高める働き

に轉じて來る。最明寺時頼はたしかに此の境地まで到り得た人と言つて良いであらう。許由の話は人間離れがしてゐるが、時頼の話は人間味が生きてゐる。兼好の望む所も、この最明寺風なものであつたと思はれる。

時頼がかやうにすぐれた武將たり得たのは、一面には、彼の母である松下禪尼の感化も與つて大に力あつたものと思はれる。兼好はこの良き母についても語つてゐる。第八十四段に「相模守時頼の母は、松下禪尼とぞ申しける。守を入れ申さるる事ありけるに、煤けたる明り障子の破ればかりを、禪尼手づから、小刀して切りまはしつづ張られければ、兄の城介義景、その日の經營して候ひけるが、給はりて、なにがし男に張らせ候はん。さやうの事に心得たる者に候」と申されければ、「その男、尼が細工によもまさり侍らし」とて、なほ「間づつ張られけるを、義景、皆を張り替へ候はんは、はるかにたやすく候べし。まだらに候も見苦しくや」と重ねて申されければ、「尼も、後はさはさはと張り替へんと思へども、今日ばかりは、わざとかくて有るべきなり。物は破れたる所ばかりを修理して用ひる事ぞと、若き人に見習はせて、心つけん爲なり」と申されける。いと有難かりけり。

世を治むる道、儉約を本とす。女性なれども聖人の心にかよへり。天下をたもつ程の人を子にて持たれける、誠に、たい人にはあらざりけるとぞ。

とあるのである。これは時頼が既に執權職に在り、母は出家して尼寺に住んでゐた頃と思はれる。執權職の母が煤け破れた障子の家に住むといふのも、その簡素さが偲ばれるが、そこへ時頼を招待する事となつて、尼自ら障子の破れを切り張りするといふも、この母の並々の女性でない事を告げる。尼の兄の義景が、それを見兼ねて、悉く張り替へさせようと思ひ、「何某に命じて張らせませう。さうした事の上手な男だから」と、それとなく、尼の切り張りを止める事をすすめたのも、細かな心づかひであり、其の心底を悟つて、「その男、尼が細工によもまさり候はし」と、さりげない返事であしらつた禪尼も、さるものであると言ひ得る。義景が重ねて、「切張りは見苦しいから全部張り替へては」と、正面から切り出して來たに對して、尼も、「物は破れたる所ばかりを修理して用ひる事ぞと、若き人（時頼を指す）に見習はせて、心つけん爲」に、「今日ばかりは、わざとかくて有るべきなり」と、正面から自分の所信を告げて居る。兄妹の會話、まことにその人物を彷彿たらしめてゐる妙がある。そして兼好は、彼の感想として、「世を治むる道は儉約を根本とするものである。禪尼は女性であるとはいふものの、其の精神は聖人の心に通ふも

のがある。天下を保つ程の時頼を我が子として持たれただけあつて、尋常一様の女性ではない傑物だ」と、禪尼禮讃の辭を述べてゐるのである。

この禪尼評の兼好の言葉は、第二段の九條殿遺誡や禁秘抄を引いて兼好が述べてゐる所に通ふものがある。曰く、

古の聖の御代の政事をも忘れ、民のうれへ、國のそこなはるるをも知らず、萬にきよらを盡していみじと思ひ、所せきさましたる人こそ、うたて思ふところなく見ゆれ。「衣冠より馬車にいたるまで、有るにしたがひて用ひよ。美麗を求むる事なかれ」とぞ、九條殿の遺誡にも侍る。順徳院の禁中の事ども書かせ給へるにも、「おほやけの奉り物は、おろそかなるをもてよしとす」とこそ侍れ。

といふのである。爲政者や人の上に立つ者の、最も心すべき事は、儉素に身を保つといふ事である。それは、彼等は驕りを極めようと思へば、如何やうな驕りをもなし得る地位にあるために、普通の者に比べて、驕奢に傾く可能性も多く、又實際に驕り易いのである。民が愁へ苦しみ國が疲弊する事をもわきまへないで、萬事に美麗をつくしてそれを得意とし、あたり狭しと威張つた

振舞をして、それが當然の権利であるかの如くに考へる。さうした人物の例は枚擧に暇もない程であるが、それは、「誠に情なく、無思慮の至りである」といひ、藤原師輔の遺誡の「衣冠から馬や車に到るまで、有り合せのものをやるやうにし、美麗なるを求めぬ」といふのや、禁秘抄に「天皇の御召物は、粗末なのがよろしい」と仰せられた御言葉を引いて、古代の聖天子や賢臣の志が那邊にあつたかを思ひ見るべき事を述べたのである。兼好の生きてゐた時代といふものを考へると、彼のこの言葉は、當時の爲政者の驕奢横暴に對する、止み難い憤慨をもらしたものである事が察せられるのである。

(七) 住居・調度と住む人がらの問題

——趣味のあらはれ——

兼好は、儉素といふ立場に於ては、住居は風雨におかされる事の無い事を以て、足れりと考へねばならない、と斷じた。それはしかし、さうした住居が人間として理想的であるといふ意ではない。奢侈を極めた住宅に對する反感が、雨風を凌げばよい、といふ斷定に導いたのである。従つて、住宅といふものは、住む人の好みに應じた趣味性が加へられ、質素な中に、やすらかな心